

# 読書悠々日記

(2016年)

久恒啓一

## 目次

2016年1月	6
矢部宏治「日本はなぜ、『基地』と『原発』を止められないのか」(集英社インターナショナル)	6
前泊博盛,明田川融,石山永一郎,矢部宏治「本当は憲法よりも大切な『日米地位協定入門』」(創元社)	8
吉田敏浩・新原昭治・末浪靖司「検証・法治国家崩壊 砂川裁判と日米密約交渉」(創元社)	11
江国香織訳「更科日記(日本文学全集 03 巻)」(河出書房新社)	13
落合陽一「魔法の世紀」(PLANETS)	13
横田達之,横田紀代子,神田泉屋学園同窓会「たより」編集委員「横田達之 お酒の話——日本酒言いたい放題」(武蔵野書院)	14
白井聡「『戦後』の墓碑銘」(金曜日)	15
竹内洋「立志・苦学・出世——受験生の社会史」(講談社)	16
福岡伸一「芸術と科学のあいだ」(木楽舎)	17
馬場錬成「大村智——2億人を病魔から守った化学者」(中央公論新社)	19
原田マハ「楽園のカンヴァス」(新潮社)	20
弓場隆訳「アインシュタインの言葉」(ディスカヴァー・トゥエンティワン)	20
2016年2月	21
山田正彦「TPP秘密交渉の正体」(竹書房)	21
蓮池透「拉致被害者たちを見殺しにした安倍晋三と冷血な面々」(講談社)	22
内館牧子「終わった人」(講談社)	22
小保方晴子「あの日 小保方晴子」(講談社)	23
青山文平「つまをめとらば」(文藝春秋)	23
大村智,小杉小二郎「人生に美を添えて」(生活の友社)	24
加藤典洋「戦後入門」(ちくま新書)	25
小島勇編訳「武田家百目録——信玄の人生訓」(武田神社)	26
高村薫「空海」(新潮社)	27
2016年3月	28
星野英紀「四国遍路の宗教学的的研究」(法蔵館)	28
辰野和男「四国遍路」(岩波新書)	28
福島英「人に好かれて、きちんと伝わる声になる本」(中経出版)	28
門井慶喜「家康、江戸を建てる」(祥伝社)	29
酒井シズ「愛と至誠に生きる:女医吉岡弥生の手紙」(NTT出版)	29
司馬遼太郎「霸王の家」(新潮社)	31
中島邦「成瀬仁蔵」(吉川弘文館)	32

日本女子大成瀬記念館「広岡浅子関連資料目録」(日本女子大成瀬記念館) .....	33
常井健一「小泉純一郎独白」(文藝春秋) .....	34
2016年4月 .....	35
福島清彦「日本経済の「質」はなぜ世界最高なのか」(PHP研究所) .....	35
山本七平「勤勉の哲学—日本を動かす原理」(PHP研究所) .....	36
嵐山光三郎「漂流老怪人 きだみのる」(小学館) .....	37
モラロジー研究所編「広池千九郎物語」(モラロジー研究所) .....	37
堀文子「ホルトの木の下で」(幻戯書房) .....	38
司馬遼太郎「おお、大砲」(中央公論新社) .....	38
桐野夏生「バラカ」(集英社) .....	39
葉室麟「霖雨」(PHP文芸文庫) .....	40
三島由紀夫「レター教室」(ちくま文庫) .....	41
中井英夫,本多正一「中井英夫戦中日記 彼方より」(河出書房新社) .....	41
津田大介・香山リカ・安田浩一他「安倍政権のネット戦略」(創出版新書) .....	43
2016年5月 .....	43
三宅一生,重延浩「三宅一生 未来のデザインを語る」(岩波書店) .....	43
川端康成「雪国」(新潮文庫) .....	44
朝井まかて「眩(くらら)」(新潮社) .....	44
池内記「亡き人へレクイエム」(みすず書房) .....	46
石寒太・谷村綱夢「いきいき健康「脳活俳句」入門」(ペガサス) .....	46
谷村綱夢「胸に突き刺さる恋の句—女性俳人 百年の愛とその軌跡」(論創社) .....	47
大熊玄「鈴木大拙の言葉—世界人としての日本人」(朝文社) .....	48
宮本輝「蛍川・泥の河」(新潮文庫) .....	49
野口悠紀雄「話すだけで書ける 究極の文章法」(講談社) .....	49
出光佐三「人間尊重七十年」(春秋社) .....	50
2016年6月 .....	50
上橋菜穂子「鹿の王(上巻・下巻)」(角川書店) .....	50
出久根達郎「本のお口よごしですが」(講談社) .....	51
新井白石「西洋紀聞」(岩波文庫) .....	51
嵐山光三郎「追悼の達人」(新潮社) .....	52
2016年7月 .....	53
矢部宏治「日本はなぜ、『戦争ができる国』になったのか」(集英社インターナショナル) .....	53
矢部宏治,須田慎太郎「戦争をしない国—明仁天皇メッセージ」(小学館) .....	54
荻阪哲雄「社員参謀」(日本経済新聞出版社) .....	54
嶋聡「最強経営者の思考法」(飛鳥新社) .....	55
楡周平「プラチナタウン」(祥伝社) .....	56

矢島裕紀彦「夏目漱石 100 の言葉」(宝島社).....	57
蓮実重彦「伯爵夫人」(新潮社).....	58
邱永漢「食は広州にあり」(中央公論社).....	58
2016年8月.....	58
高橋洋一「数字・データ・統計的に正しい 日本の進路」(講談社).....	58
宇野常寛編著「静かなる革命へのブループリント——この国の未来をつくる7つの対話」(河出書房新社).....	59
白井聡「戦後政治を終わらせる」(NHK出版新書).....	60
三田完「不機嫌な作詞家 阿久悠日記を読む」(文藝春秋).....	62
桐野夏生「猿の見る夢」(講談社).....	63
別冊宝島編集部「田中角栄 100 の言葉」(宝島社).....	63
ロバートキヨサキ,白根美保子「改訂版 金持ち父さん 貧乏父さん」(筑摩書房).....	64
村田沙耶香「コンビニ人間」(文藝春秋).....	65
ケヴィン・ケリー,服部桂「インターネットの次に来るもの——未来を決める12の法則」(NHK出版).....	65
寺島実郎「中東エネルギー地政学」(東洋経済).....	66
2016年9月.....	69
辻直樹「なぜ水素で細胞から若返るのか」(PHP新書).....	69
ヘンリー・キッシンジャー,伏見威著「WORLD ORDER(国際秩序)」(日本経済新聞出版社).....	69
2016年10月.....	71
安田峰俊「野心 郭台銘伝」(プレジデント社).....	71
三木清「人生論ノート」(新潮文庫).....	72
朝井まかて「落陽」(祥伝社).....	73
リンダ・グラットン,アンドリュー・スコット「ライフシフト 100年時代の人生戦略」(東洋経済新報社).....	75
神渡良平「中村天風『幸せを呼び込む』思考」(講談社α新書).....	77
鹿島茂「神田村通信」(清流出版).....	77
志村ふくみ「一色一生」(講談社学芸文庫).....	78
2016年11月.....	79
春原剛「ヒラリー・クリントン——その政策・信条・人脈」(新潮新書).....	79
平松洋子「野蛮な読書」(集英社文庫).....	79
西垣通「ビッグデータと人工知能」(中公新書).....	80
黒田博樹「クオリティピッチング」(KKベストセラーズ).....	81
ドナルド・トランプ「トランプ自伝」(ちくま文庫).....	82
星亮一「山川健次郎伝」(平凡社).....	84

国重悼史「住友銀行秘史」(講談社).....	84
2016年12月.....	85
渡部昇一「実践 快老生活——知的で幸福な生活へのレポート」(PHP新書).....	85
鷲田小彌太偏「谷沢永一 二巻選集下 精選人間通」(言視舎).....	87
橘川幸夫「ロッキングオンの時代」(晶文社).....	88
ユヴァル・ノア・ハラリ 柴田裕之訳「サピエンス全史・上」(河出書房新社).....	89
服部龍二「田中角栄—昭和の光と闇」(講談社現代新書).....	90
ユヴァル・ノア・ハラリ 柴田裕之訳「サピエンス全史・下巻」(河出書房新社).....	91
司馬遼太郎「ビジネスエリートの新論語」(文春新書).....	92
東谷暁「予言者 梅棹忠夫」(文春新書).....	93

2016年1月

矢部宏治「日本はなぜ、『基地』と『原発』を止められないのか」(集英社インターナショナル)

基地と憲法を巡る「沖縄の謎」、原発を巡る「福島」の謎、天皇と憲法を巡る安保村の謎、国連憲章と第二次戦後の世界を巡る安保村の謎、自発的隷従と起源を巡る最後の謎、そういった戦後の謎を解こうとする野心的な本だ。腑に落ちることが多い。

- ・ 2009年の鳩山政権誕生の半年前の小沢事件は全くの冤罪による完全な国策捜査であった。鳩山首相と民主党小沢幹事長を検察は新政権誕生後も攻撃し大手メディアも足並みをそろえた。
- ・ 沖縄本島の18%が米軍基地だが、上空は100%米軍が支配している。実は地上も潜在的には100%支配されている。米軍の財産のある場所は一瞬にして治外法権になる。
- ・ 米軍は日本国憲法を超えた存在だ。
- ・ 砂川判決はアメリカ政府の指示と誘導によって進行した。統治行為論。憲法違反は断を避けた最高裁そのものが憲法違反である。
- ・ 安保条約、日米地位協定、日米合同委員会という構図。
- ・ 密約法体系を含む安保法体系が、砂川裁判の最高裁判決によって日本の国内法より上位に位置することになった。
- ・ 福島の原発事故で責任を問われた人はいなかった。警察も東京電力の捜査をしなかった。これはなぜか。
- ・ 日本の首相(野田首相)には密約に抵抗する権利はない。オスプレイの配備に反対できない。
- ・ 辺野古の基地建設を認めると初めて米軍基地の存在を自ら認めたことになるから、粘り強い抵抗運動になっている。強行すれば流血事態になる。
- ・ 首都圏をおおう巨大な空域は米軍が支配している。首都圏が他国に支配されていて主権はない。独立国ではない。
- ・ 横田基地や横須賀基地からアメリカの諜報機関要員が自由に日本に入り活動している。
- ・ 外務官僚や法務官僚がオモテの法体系を尊重しなくなった。
- ・ 国家レベルの安全保障には日本の法律のコントロールが及ばない。改正原子力基本法には「安全保障に資する」と入った。それは法的コントロールの枠外に移行するという意味である。
- ・ 大気汚染法、土壌汚染対策法、水質汚濁防止法には、放射線物質については適用しないとある。環境基本法には放射性物質による汚染防止は原子力基本法その他の法律で定めるとあるが、何も決めていない。規制の基準値が決まってい

ない。

- ・ 日米原子力協定は日米地位協定と同じ法的構造。日本側では何も決められない。決められるのは電気料金だけ。
- ・ 憲法機能が停止状態。変えようとする政権トップも必ず失脚する。
- ・ 日米原子力協定は日本国憲法の上位法。政府の行動を許可できるのはアメリカ政府と外務省。
- ・ 沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落事故で、日本は実質的な植民地状況にあることが明らかになった。
- ・ 原子力村は日米安保村の一部で相似形。原子力村の経済規模は 2 兆円。安保村は 530 兆円。安保村は戦後日本社会そのもの。
- ・ 重要な文書は、最初はすべて英語で書かれている。吉田首相のサインした日米安保条約は日本語の条文がなく日本代表団は内容をわかっていなかった。
- ・ 実際は強要されているが、主体的にやった形をとる。
- ・ 日本国憲法はGHQが書いた。日本人自身が選び取ったと 70 年ごまかしてきたことが現在の惨状を招いた。法治国家崩壊。
- ・ 戦後日本の最高権威たちは結論をウラから与えられ、正当化するためには自説を 180 変えても平気な人物たちだ。
- ・ 憲法という国家の根幹に大きな闇が生まれた。もし強要されていたなら自分たちで作り直しただろう。
- ・ 憲法については悪く変えるか、指一本触れさせないという二つの勢力しかないという悲劇。きちんと書き直して重要なことは憲法に書けばいい。
- ・ 人間宣言も日本国憲法も大枠はGHQ、アレンジは日本。
- ・ 日本人は国際標準のまともな憲法を自分で書く力がなかった。2012 年の自民党憲法草案は 18 世紀に戻ったような案。
- ・ 米軍による日本全土への永久駐留、アメリカの基地帝国化が起っている。
- ・ 国連憲章の敵国条項。対象は日本とドイツ。再び軍国主義が復活したら安保理事会の許可なしに攻撃してよい。
- ・ 本当の民主主義を勝ちとっていくプロセスがどこかで始まる。新しい憲法を制定してまともな法治国家を一からつくっていくプロセス。新しい国のかたちをツクッテオモテ側で堂々と議論すれば反対できない。
- ・ 日本に主権を残したままでの長期リース方式というフィクションにもとづくべきだという天皇メッセージ。
- ・ 軍事力と交戦権を放棄した憲法 9 条 2 項と人類史上最大の攻撃力を持つ米軍の駐留という大きな矛盾による戦後日本の国家権力構造。
- ・ 在日米軍基地と憲法 9 条 2 項と国連憲章敵国条項はセットで同時に解決すべき。
- ・ 日本で有事とアメリカが判断した瞬間に自衛隊は在日米軍の指揮下に入るという

密約がある。外国軍基地は日本に置かないことを憲法に銘記し、過去の密約は無効とすべきだ。

- ・ 安倍政権の「集団的自衛権の行使容認」の先にあるのは、密約の実現化。
- ・ フィリピンモデルの憲法。最低限の防衛力と国内に外国軍事基地を置かないことを明記。当たり前のことを堂々と主張。
- ・ ドイツは 1990 年に戦勝 4 か国と事実上の講和条約を締結。4 年後に駐留軍を撤退させた。
- ・ 不戦共同体を東アジアの地に創設。

### 前泊博盛, 明田川融, 石山永一郎, 矢部宏治 「本当は憲法よりも大切な『日米地位協定入門』」 (創元社)

創元社の「戦後再発見双書」の一つ。著者は沖縄国際大学大学院教授となっているが、前職は琉球新報論説委員長だ。

「戦後史の正体」(孫崎亨)に続く「戦後再発見双書」の第二弾。戦後のタブーへの挑戦の書。

民主党政権の誕生と消滅、普天間基地の辺野古移設問題、東日本大震災、福島原発事故、原発再稼働問題、検察の調書ねつ造事件、尖閣問題、オスプレイの強行配備、TPP参加問題、集団的自衛権、、、、。

こういったここ数年の動きでわかたってきたことは、沖縄は法的にも日米両国の属国であり、その中心は日米地位協定であることだ。

「戦後日本」という国家の根幹をなす最も重要な法的取り決めは、日米地位協定である。日本本土も沖縄と同様の枠組みの中に置かれている。

この本では、最初に問いを掲げ、その答えを示すという構造になっている。それに沿って内容を要約する。

- ・ 日米地位協定って何ですか？
  - ・ 米軍地位協定。
  - ・ アメリカが占領期と同じように日本に軍隊を配備し続けるための取り決め。
  - ・ 日本における、米軍の強大な権益についてのとり決め。
- ・ なぜ戦後 70 年たっても、米軍はまだ日本にいるのか？
  - ・ ポツダム宣言では「平和的な傾向を持つ責任ある政府が樹立されたときは、連合国の占領軍はただちに日本より撤退する」とあるが、サンフランシスコ平和条約では、日米間の協定があれば外国軍隊の駐屯ができるとなっている。それが行政協定(地位協定)。看板は変わったが実質的な軍事占領状態が継続した。
  - ・ 事実上の治外法権。軍用機事故の場合の植民地状況。米軍関係者は出入国審査を受けずに基地から自由に出入りができる。



- ・ 地位協定は、いつ、どのようにして結ばれたのですか？
  - ・ サンフランシスコ平和条約締結の数時間後、吉田首相一人が調印。
  - ・ 行政協定のための安保条約、安保条約の為の平和条約。
  - ・ 旧安保条約の目的は、日本全土を米軍の潜在的基地にすること。
  - ・ 旧安保条約前文「日本国は、、日本国内およびその周辺にアメリカ合衆国がその軍隊を維持することを希望する」
  - ・ 旧安保条約第一条「、、配備する権利を、日本国は許与し、アメリカ合衆国は、これを受諾する。」
  - ・ 日米行政協定第二条1項「安保条約第一条にかかげる目的遂行に必要な基地の使用を許すことに同意する。」
  - ・ 平和条約調印の二時間前、安保条約の全文が発表された。直前まで内容も日時の誰も知らない事実上の密約だった。
  - ・ 講和条約や安保条約に書き込めない属国的な条項は行政協定に押し込んだ。行政協定は、アメリカは上院の承認を得ずに結べるもの。
- ・ 何が問題化か？
  - ・ 首都圏は米軍の基地で占拠されている。横田・座間・厚木・横須賀。
  - ・ 巨大な横田ラブコンの存在によって、羽田からは一度房総半島方面に離陸し、急旋回と急上昇が必要。
  - ・ 地位協定は、治外法権が米軍の保障されている。不平等密約である。法の下の不平等・法の空白・恣意的な運用・免法特権・治外法権。
  - ・ 米軍施設の所有権を日本に譲渡し、維持管理費や補修費を日本側に負担させるという裏ワザ。
  - ・ 日米の重要な取り決めの多くが、英語だけで正文が造られ、日本語の条文は「仮訳」。正文がないから、条文の解釈権は外務官僚の手にある。
  - ・ 米軍はなにも制約されない。日本国内で、ただ自由に行動することができる。
- ・ オスプレイはどこを飛ぶのですか？
  - ・ 未亡人製造機
  - ・ 21件 138市町村を飛行する。
- ・ ひどい騒音による人権侵害になぜ裁判所は飛行中止の判決を出さないのか？
  - ・ 普天間基地爆音訴訟判決「損害賠償は認めるが、米軍機の飛行差し止めは棄却する」
  - ・ 第三者行為論。米軍には日本の法律は及ばない。日本政府は飛行差し止めの権限を持っていない。
- ・ 米兵の犯罪は罰せられないのですか？
  - ・ 日本側は裁判権を放棄するという密約が日米間で交わされている。
- ・ 米軍が希望すれば、日本全国どこでも基地にできるというのは本当ですか？

- ・ 個々の基地に関する協定は日米合同委員会をつうじて両政府が締結すると地位協定第二条にある。
- ・ 日米合同委員会は、日米が対等な外交交渉を行っているフリをするブラックボックス。
- ・ 基地返還—全自衛隊基地の共同使用—米軍の永久駐留と駐留経費の大幅削減。本土の沖縄化が進む。
- ・ 日米行政協定と日米地位協定はどこがちがうのですか？
  - ・ 「結局、何も手放さなかった」
  - ・ 安保条約
    - ※ 第3条「継続的かつ効果的な自助および相互援助により、、、」
    - ※ 第5条「自国の憲法上の規定および手続きにしたがって、、、行動することを宣言する」(アメリカ議会が自国の国益にかなうと判断すれば軍事行動も、、、NATO(北大西洋条約):「必要な行動(兵力の使用を含む)を、、、ただちにとる」)
  - ・ アメリカ:「領有権については中立」「島しょ部の防衛は日本が行う」。
  - ・ 安保条約改定後、事前協議は一度も行われたことはない。
  - ・ 安保条約は、10年たった1970年以降は、1年ずつ自動延長されているだけだ。(安保条約第10条)
  - ・ 孫崎亨「安保条約を一度終了させ、新しく結びなおす。同時に地位協定を全面的に改定する」
- ・ 原発事故や再稼働問題、検察の調書ねつ造もんだいと関係があるのですか？
  - ・ 巨大な外国軍駐留と治外法権の付与の結果、日本の国内法の体系は完全に破壊された。
  - ・ 1959年の砂川裁判で第一審の伊達判決を、検察庁は跳躍上告し、最高裁判決をだした。アメリカ国務省からの指示と誘導があった。
    - ※ 外国軍隊は、憲法第二条2項の「戦力」には該当しない。
    - ※ 高度の政治性を有するものが違憲か否かの法的判断は、裁判所の処方審査権の範囲外にある。
    - ※ 安保条約はは、、違憲無効であることが一見極めて明白であるとは認められない。
    - ※ 憲法判断をしない。ということから、最上位であるべき憲法が停止となり、安保条約群は日本の国内法の上位に位置することとなった。
    - ※ 官僚は、日本国憲法という下位の法律よりも、上位の法律(条約)に従う。
    - ※ 2012年の改正原子力基本法にもこっそり「わが国の安全保障に資することを目的として」という言葉が入った。放射性物質は各法律(大気汚染防止法・土地汚染対策法・水質汚濁防止法、)の適用除外となっている。そして環境基

本法では、放射性物質による汚染については原子力基本法その他の法律で定められている。法的には汚染ではないから除染も賠償もする義務がない)。

※ 現在の日本は法律も、省令や行政指導も憲法に違反できる状態になっている。

- ・ 日米合同委員会って何ですか？
  - ・ 密約製造マシン。
  - ・ TPPも同じ構造。21 の分科会。安全保障分野から経済関係全体に拡大しようという試み。内容を知らないのに参加表明をしてしまう。
- ・ 米軍基地問題と原発問題の共通点は？
  - ・ 安全神話。受益と被害の分離。他人任せ。思考停止。なれ合い。隠ぺい体質。国民の無知と無関心。
- ・ なぜ地位協定の問題は解決できないのですか？
  - ・ 不平等条約。
  - ・ 在日米軍は、超法規的存在になっている。

戦後日本の悲願「対等な日米関係の構築」には、米国との単独安保体制の見直し、多国間安保体制の構築。自主独立の気概が求められている。

### 吉田敏浩・新原昭治・末浪靖司「検証・法治国家崩壊 砂川裁判と日米密約交渉」(創元社)

1959年12月16日に最高裁大法廷で行われた砂川裁判を戦後最大の事件として取り上げた労作。

創元社の「戦後再発見」双書の第3弾。

「米軍駐留は憲法第9条違反」として日本を揺るがした伊達判決が3月30日。検察は最高裁に跳躍上告。上告審は9月7日から口頭弁論、審査は異例のスピードで開始され、わずか10日余りで6回の口頭弁論が終了する。

「米軍駐留は合憲」の逆転判決があり、この日に日本国憲法はその機能を停止した。

伊達秋雄裁判長(東京地裁)

- ・ 憲法9条は日本が戦争をする権利も、戦力を持つことも禁じている。安保条約は日本防衛だけでなく極東における平和と安全のために出動できる。米軍駐留は日本国憲法の精神に反する。」
- ・ 米軍の駐留は日本政府が要請しアメリカ政府が承諾した結果であり、米軍の駐留

は憲法第9条第二項の戦力の保持に該当する。駐留米軍は憲法上存在を許されない。

田中耕太郎裁判長(最高裁)

- ・ 憲法9条は戦争を放棄し、戦力の保持を禁止しているが、主権国家としても固有の自衛権は否定していない。
- ・ 憲法9条は他国の安全保障を求めることを禁ずるものではない。
- ・ 憲法が保持を禁じた戦力とは、わが国が主体となって指揮権・管理権を行使し得る戦力を意味する。だから駐留米軍は憲法が禁じた戦力には該当しない。
- ・ 日米安保条約は高度の政治性を有する。違憲か合憲かの法的判断は内閣と国会の政治的判断と表裏一体である。純司法的機能を使命とする司法裁判所の審査にはなじまない。一見きわめて明白に違憲無効であると認められないかぎり、司法審査権の範囲外にある。
- ・ 米軍駐留は憲法に適合こそすれ、違憲無効であることは一見きわめて明白であるとはどうも認められない。

この地裁判決から最高裁判決までの経緯を、アメリカの公文書を詳しく読み込んで詳しく追った内容である。

アメリカ国務省長官からの指示・誘導を受けて、日本は藤山外相を中心とした岸政権が田中耕太郎最高裁長官と相談している。

そして指示通りの内容の判決を出す。統治行為論。

司法の独立を最高裁長官自身が破ってしまう。

この判決で、憲法体系よりも、矛盾する安保法体系が上位に位置することになった。

米軍は憲法を超えた超法規的存在となった。安保条約と関連する日米地位協定、付随する密約なども承認されたも同然となった。

安保条約と日米地位協定という不平等条約が存在することを認めたことによって米軍は治外法権となった。法治国家崩壊である。

その後、米軍は基地の騒音訴訟では日本政府の権限も司法権も及ばない第三者であるとして、損害賠償は認めるが飛行差し止めはできないという判決が下っていく。第三者行為論。

伊達秋雄(1909—1994年)。

京大法学部卒。新潟地裁、東京地裁。1961年に退官。法政大学教授(刑法)、弁護士。

田中耕太郎(1890—1974年)はどういう人物であったか。

東大法学部卒。内務省に入省するが、東大に戻り教授(商法)。1950年、吉田首相の推挙で第二代最高裁長官。60年に退官。その後、オランダのハーグにある国際司法裁判所判事に就任し、10年間つとめる。

東大教授を経て、60代は最高裁長官。70代は国際司法裁判所判事。

### 江国香織訳「更科日記(日本文学全集03巻)」(河出書房新社)

江国香織訳「更科日記」(日本文学全集03・池澤直樹編集)を読了。

竹取物語・伊勢物語・堤中納言物語・土佐日記・更科日記と並んでいるが、まずは更科日記を読んでみることにした。江国香織の現代語訳がこなれていて、抵抗なく読めた。

この日記は「源氏物語」が書き紡がれていた年の1008年に誕生した菅原孝標の娘が書いた自伝である。

当時話題の「源氏物語」に憧れる文学少女は、光源氏のような男が現れるのではないかと夢想しながら娘時代を過ごす。

都である京と父の任官で地方でも暮らす、その旅の様子も克明に記しており、1000年以上前の暮らしや考えがわかる。

旅の途中で出てくる地名もなじみがあり興をそそる。

下総、武蔵、相模、隅田川、足柄山、富士の山、上総、駿河、遠江、天竜川、浜名、三河、終わり、美濃、墨俣、逢坂、近江、東山、常陸、石山寺、東大寺、長谷寺、鞍馬寺、和泉、淀、住吉、大津、、、。

この娘は「源氏物語」から始まり、伊勢物語その他の物語に夢中になり、昼も夜も読ふける。宮中に女房として出仕したり、結婚したり、子供を養ったり、そして老境になっていく。この間、親しい人や縁のあった人たちとの会話は、歌である。

「何一つ願いがかなうことなく終わった女、それが私なのだから、いまさら功德を積んだりもせず、ただなんとなく生きている」と述懐する。

千年前も今の時代も、あまり変わらない。

### 落合陽一「魔法の世紀」(PLANETS)

28歳の若き天才による衝撃の書。

20世紀は情報が平面に展開する映像の世紀であり、21世紀は映像の中の出来事が実世界に踏み出していく時代である「魔法の世紀」である、と著者は主張する。情報が情報世界から染み出していく。それを実現するのは、魔法の箱であるコンピュータだ。

魔法とはアートと技術を包括しながら、どちらとも異質の存在だ。今後、誰でも人は

魔法使いになっていく。

魔法の世紀では、人間に原初的な感動を与えられるか、どれだけ心を動かせるかが勝負になる。

ディズニーは「この世界に魔法を実現する」ことを目標としている魁だ。

魔法の世紀では、これまでにない問題を創りだして自ら解いていくことが大事になる。

人間もコンピュータによって制御できるようになっていく。

人間の感覚を超越した設計を行うことで、メディアは物質世界事態をプログラミングできるようになる。

コンピュータ科学という名の統一言語で、知能・物質・空間・時間を含む、この世界全体お存在と現象が記述され相互に感応し合う。

感動の主体は人間であり、文化の紡ぎ手はコンピュータと人間の共生であり、保存装置はインターネットになる。

今後の方向はこの通りだろう。想像を絶する世界が現れはじめている。

それに組織として、そして個人としてどう貢献し、対応していくか。

## 横田達之,横田紀代子,神田泉屋学園同窓会「たより」編集委員「横田達之 お酒の話---日本酒言いたい放題」(武蔵野書院)

「横田達之 お酒の話---日本酒言いたい放題」をじっくりと時間をかけて読了。

オビにはこう書いてある。

「本物のお酒を楽しんでいますか？」

「国際線ファーストクラスに”本物の大吟醸酒”を初めて搭載し、わが国古来の文化「日本酒」の名を世界に轟かせた、神田和泉屋の横田達之。蔵元さえ頼りにする卓越した知識と豊潤な経験がその源泉にある。くわえて、各界から参加した 2000 名の卒業生を送り出すほどの、お酒の学校の校長も務めた横田の哲学を、一冊に凝縮したのが本書なのだ。」(神田和泉屋学園同窓会)

JAL時代、この大吟醸搭載に関わり、これが縁となって横田さんの主宰する「アル中学」「アル高校」「アル大学」を卒業した。学園での成績は悪かったが、高い学歴はもらった。「アル」は正式にはアルコールの意。

神田和泉屋学園は開校から27年が経ち、2015年3月に閉校した。この学園はいい酒がわかりそれを呑む人を育てることがいい蔵を残すことにつながるという信念で、味の分かる賢い消費者を育てるとい志の高い素晴らしい事業だ。

その神田和泉屋店主の横田さんが1988年から毎月書いてきた2011年まで23年間にわたる「神田和泉屋たより」の集大成だ。

日本酒に対する該博な知識、現場に必ず足を運ぶ真摯さ、妥協を許さず正邪を見

分ける目、職人や蔵元に対する愛情と尊敬、メディアに流される浮薄な風潮への義憤、日本酒に関わる良き人々との淡い交流、、、。

この本には日本酒の全てが入っているという感がある。

日本酒に関する、消費者側から見た一つの優れた体系だ。電子書籍にして、言葉や疑問から検索できるようになると、日本酒に関する生き生きとした事典になるのではないか。

横田さんは、2000人の卒業生が慕っており、先日の出版パーティも200人を軽く超える大盛況だった。

ワインは農業だが、日本酒は工業、さらに言えば手工業と横田さんはこの本でも書いているが、人間も手工業製品であるとすれば、横田さんは仕事に没頭し天命を授けられ、長い時間をかけてあらゆる工夫と事上練磨を重ねて、人物の大吟醸になった感もある。

この学園ではおかみさん(横田紀代子)がつくる酒のつまみも大変人気があった。その「おかみさん料理 レシピ」も付いている。

神田和泉屋学園同窓会の編集委員たちの身に着けた知識と熱心さ、そして武蔵野書店の編集者との息が合った編集委員会の雰囲気がよく出ている。とてもいい本に仕上がっている。後世に残る名著になるのではないか。

### 白井聡 『戦後』の墓碑銘 (金曜日)

「永続敗戦論—戦後日本の核心」で、石橋湛山賞や角川財団学芸賞を受賞した注目の著者による続編。2015年10月発刊。

2014年2月号から2015年7月号までの「週刊金曜日」の連載の第1章がこの本のタイトルになっている。

全体を通じて、安倍政権に対する決然たる批判の書。

- ・ アベノミクス、集団的自衛権行使容認、特定秘密保護法、武器輸出解禁、原発再稼働、原発の「ベースロード電源」としての地位確認、TPP参加、非正規雇用の拡大、教育現場の国家主義的介入、メディアへの政治介入(言論統制)、ヘイトスピーチの横行の容認、、、。
- ・ 「戦後レジームからの脱却」とは永続敗戦レジームの純化を通じた自己破壊だ。左派やリベラルこそ内容を具体化し、実現しなければならない理念である。
- ・ 「責任アル政府が現に存在しない以上、占領が続くのはむしろ当然なのである。
- ・ われわれに必要なのは、国共合作に匹敵する試みである。
- ・ 「戦争する国になる」ことは既定路線、問題は「いつ、だれと、どんな戦争をするのか」。「まずは参戦、それから改憲へ」という順序。
- ・ 「積極的平和主義」は対米従属の新(深)段階。

- ・ 日本の法体系全体は、決定的な場面において無効。
- ・ 「永続敗戦レジーム」とは「戦後の国体」である。それは「敗戦の否認」である。
- ・ TPPに代表されるように米国にとっての日本の位置づけは、収奪の対象へと変化している。産業の多様性や諸々の安全、国土の田園等等、有形無形の国富を多国籍資本に売り飛ばす。
- ・ 「冷戦脳」。
- ・ 亡国の後をどう振る舞うべきかを考えなければならない段階。
- ・ 「戦前の建前」を自らのものとする努力を实らせるか、その前に破局が訪れるのか、残された時間は少ない。
- ・ 「こうした権力の存在を許すほど、国民は愚劣な存在なのか」という問いかけ。
- ・ 公的な形での戦争責任の追及というものを日本人はやっていない。いまからでも対内的な責任の追及を一種の儀式の形としてでもしなければならぬ。
- ・ 改憲派と護憲派の堂々巡り。
- ・ 無責任の体系。
- ・ すでに憲法九条は死んだも同然である。

### 竹内洋「立志・苦学・出世――受験生の社会史」(講談社)

ファンである竹内洋先生の1991年刊行の原著の復刻文庫版。

相変わらずの切れ味のいい竹内ブシ。

受験的生活を中心に、受験をめぐる主観的意味世界を探検した本だ。

明治30年代半ばまでの「前受験の時代」、昭和40年代までの「受験の時代1-受験のモダン」、現在にいたる受験の時代2-受験の脱モダン」と受験現象を区分している。

- ・ 前受験の時代は、明治20年を境に、前を「僥倖」の時代、後を「秩序」の時代。(明治19年に帝国大学を頂点とする学校序列ができ、明治20年に官吏任用試験制度ができた)
- ・ 受験の時代1は、立志・苦学・出世。将来の生活を賭けた競争の時代。私はこの時代の最後の世代か。
- ・ 受験の時代2は、量的・質的变化の時代。学歴の意味の変容。学歴から出身階級への視線転換。現在。

「学術文庫版」のあとがきで、著者は「アフター大衆受験圧力釜社会論」と題した議論を展開している。

大学生の4割は学力試験を受けていない。大学院の入学が容易になった。難関なのは学部入学のみ。

このように現在の受験圧力釜社会は大きく様変わりをしている。



これは受験激戦地帯(旧制高校・陸士・海兵)と受験無風地帯(私立専門学校)の 2 層化となっていた戦前への回帰のようにみえる。

受験無風地帯は、F判定大学の登場、推薦入学、AO選抜として登場。大学院も他大学出身者という傍系や選科入学に似ている。

こうしてみると、戦前回帰というよりも、万人を受験勉強に動員させた偏差値体制の方が受験の歴史の変則であるようにもみえる。

ひたすらな加熱(学力上位層)からほどほどの加熱(冷却)、相応競争が受験のポストモダンの姿である。

著者は「庶民文化」の 3 つのシナリをあげている。

- ・ 学力格差は将来生活の格差を意味しないという意識になれば痛痒は感じなくなる。階級の再生産の道。貧困の道。
- ・ ノン・エリート 라이프スタイルと文化の成熟という道。矜持する庶民文化の芽生え。
- ・ ノン・エリート側からの学歴エリートに対する征伐の道。ヤンキー文化、反知性主義という風潮。

### 福岡伸一「芸術と科学のあいだ」(木楽舎)

「生物と無生物のあいだ」で境界のあいまいさを描いて、生命の本質に迫り話題をさらった福岡ハカセの新刊本。

日経新聞の連載コラムを書籍化したもの。連載中に読んでいたが、一冊にまとまって読むのも楽しい。

この本には人の科学者と芸術家の名前が数多く出てくる。偉大な人々と現代の最先端を走る人たちだ。彼らの名前や訪問した美術館などをあげることで、内容を語ることに代えてみよう。

ミノルヤマサキ(ワールドトレードセンター設計者)

フランク・ロイド・ライト(グッゲンハイム美術館)

宮永愛子

イサム・ノグチ

ケント・フラワー(「写真集「コーネル」)

クロイスターズ美術館(「ユニコーン狩り」)

モルガン・ラーブラリー

ダ・ヴィンチ

亀井南暎(金印「漢委奴国王」)

レーウエンフック(「顕微鏡」)

フェルメール(国立西洋美術館の「聖オウラクセディズ」)  
美術史美術館(ウイーン)  
サルバドール・ダリ  
池田学(「予兆」)  
パスツール  
F・クリック(DNA構造)  
ピーテル・ブリューゲル(「バベルの塔～  
細野仁美(羽根の葉の器)  
北斎  
丹下健三(国連大学)  
加納夏雄(円銀貨)  
黒川紀章(中銀カプセルタワー)  
隈研吾(プロソミュージアム・リサーチセンター)  
河原温(日付)  
カズオイシグロ(「忘れられた巨人」)  
高山辰雄(牡丹 洛陽の朝)  
多田富雄(免疫)  
鈴木理策(SAKURA)  
杉本博司(アラスカオオカミ)  
伊藤若冲  
ジャクソン・ポロック(アクション・ペインティング)  
千住博(滝)  
アンリ・ファーブル  
アルブレヒト・デューラー8メランコリー)  
エリアス・ガルシア・マルティネス(会が修復)  
東山魁夷(年暮る)  
J・ワトソン(細胞の分子生物学)  
ピエト・モンドリアン(勝利のブギウギ)

「生命」について。

- ・ 科学とは、自然や宇宙について私たちが古くから何となく感得していたことを、より解像度の高い言葉で再発見する試みである。
- ・ 生物にとって中央はあとから、発生的に作りだされた。
- ・ 変わらないために、変わる。これが生命の本質である。
- ・ 生命を構成する要素は単独で存在しているのではない。それを取り囲む要素との関係性の中で初めて存在しうる。状況が存在を規定する。自分の中に自分はいな

い。自分の外で自分が決まる。相補性である。

- ・ マクロを形作るミクロな世界の中に、マクロな世界と同じ構築原理が、無限の入れ子構造として内包されている。
- ・ パワーズ・オブ・テン
- ・ 私たちは常に動き、流れており、身体はそこに浮かぶ、うたかたにすぎない。私たちは粒の容れ物ですらない。生きるとは流れそのものである。

### 馬場錬成「大村智――2億人を病魔から守った化学者」(中央公論新社)

初版は2012年であるが、私が読んだのは2015年11月10日付けの第6版。つまり、中身は2015年のノーベル賞受賞の前に書かれたものだ。

大村は微生物の生産する有用な天然有機化合物の探索研究で優れた業績をあげ、感染症の予防・撲滅に顕著な貢献をしている。また、学術研究で稼いだ特許ロイヤリティ収益250億円を北里研究所に還流させた。これは産学連携の模範ともいべき業績である。さらに、女子美術大学への支援や、私費による葦崎大村美術館の建設、学校法人開智学園の運営などの業績もある。

#### 共同研究方式

「共同研究という形で資金提供を受ける。創薬につながる微生物由来の天然化学物質を見つけて特許をとる。特許の専用実施権は企業に与える、化学物質と研究成果を提供された製薬企業は薬を開発しビジネスにする。ビジネスになった場合は特許ロイヤリティを大村に払う」

地元の山梨大学を卒業後、都立高校の夜間教師をしながらの東京理科大学大学院での学び、から始まる大村智の人生行路は魅力がある。

このような偉人に誰が影響を与えたのか、そして大村はどういう心構えと考えで生きていったのか、そこに焦点をあててみたい。

- ・ 母「教師たる資格は、自分自身が進歩していることである」
- ・ 父「日本では講師止まりかもしれない。だったら世界を目指せばいいじゃないか」
- ・ 田中元之進「社会にでてから5年間は勝負だよ」
- ・ 横山隆策「人と同じことをしてはだめだ。ライバルを上回ることを考えてやらなければ勝てないぞ」
- ・ パスツール「チャンスは準備が整っているところにやってくる」
- ・ 王済夫「山は低くても仙人が住めば価値がある」

大村智

- ・ 処万変主一敬(誰もが自分の師であることを思うことが大事だ)
- ・ 独自のことをやると、人より悪い場合もあるが人を超えるチャンスが生まれる。
- ・ レベルの高い人とお付き合いすることが大事である。レベルの高い人たちと付き合っているといつしか自分もそのレベルになってくる。そのためには自分を磨いて、いい仕事をしなければならない。
- ・ 志あれば道あり。
- ・ 正師を得ざれば、
- ・ 学ばざるに如かず(道元)
- ・ 至誠天に通ず
- ・ よき人生は日々の丹精にある(松原泰道)

この人はたいへん偉い人だ。

明日の土曜日は、蕪崎大村美術館を訪問しようと思っていたが、大雪予想のため断念。近々出かけることにしたい。

### 原田マハ「楽園のカンヴァス」(新潮社)

先日、東京駅ステーションギャラリーの「パリ・リトグラフ工房 idem から」をみてきた。

原田マハとの共同企画だったこともあり、この作家の代表作「楽園のカンヴァス」(新潮文庫)を購入し読了した。

アンリ・ルソーの名作「夢」を巡るミステリー仕立ての素晴らしい小説だった。

大原美術館、ニューヨーク近代美術館、スイスのバーゼル美術館、そしてピカソやルソーがいた時代のパリが主な舞台だ。。1908年から1910年頃のパリ、1983年のニューヨークとスイス、そして2000年の倉敷と時空を超えて物語が展開する。名作と画家を巡るコレクターとキュレーターが主役であるが、女性主人公は、最初は美術館の監視員として登場する。

美神に取り憑かれた芸術家の想像力に迫っていく発想の大胆さ、絵画と芸術家に対する深い愛情、一枚の絵の謎を核としてさまざまな職業の人々の織りなす豊かな物語を紡ぐ構成力、そういうものを原田マハは持っている。今後どのような物語を見せてくれるだろうか。原田マハのファンになった。

今日、八王子の東京富士美術館で開催中の「顔」をみてきたが、監視員に関心が湧いた。確かに名作ともっとも身近に長い時間接している人かもしれない。

### 弓場隆記「アインシュタインの言葉」(ディスカヴァー・トゥエンティワン)

アインシュタインが舌を出している有名な写真は、大学の講義で英単語のスペルミ

スを学生に指摘されたときに撮影されたものだが、ユーモアの精神にあふれた、そして世界中の人から親しまれたアインシュタインの人柄をよく表している。

この本の中から好きな言葉を抜き出してみたい。

- ・ 知的な馬鹿は、物事を複雑にする傾向があります。
- ・ 私はふたつのことに畏敬の念を抱いています。満天の空と自分の中にある宇宙です。
- ・ 大学における一般教養の価値は、多くの事実を学ぶことではなく、教科書から学べないものについて考えるよう頭を鍛えることにあります。
- ・ どんな政府もある程度は邪悪なものです。
- ・ 賞賛を浴びて腐敗するのを回避する唯一の方法は、粛々と仕事を続けることです。
- ・ 失うものがほとんどない年配者は、若い人たちのかわりに堂々と発言すべきだと思います。

## 2016年2月

### 山田正彦「TPP秘密交渉の正体」(竹書房)

著者は民主党政権で鳩山内閣の農林水産副大臣を経て、2010年6月の管内閣の農林水産大臣を経験した人物である。

各章のタイトルは以下のようになっている。

「TPPの原点は北米自由協定にある」「日米並行協議がTPPよりも恐ろしい」「TPPは日本にとって百害あって一利なし」「韓国はどうなったか」「食の安全は本当に守れるのか」「日本の農業はTPPでどうなるのか」「医療も介護も金持ちでないと受けられない」「安い労働力が入ってきて、日本人の賃金が低下する」「軽自動車の税負担軽減措置がなくなる」「地方自治はTPPでどうなるのか」「ISD条項で国の主権は失われる」「インターネットの自由が損なわれる知的財産権の交渉」「経済のグローバル化が国家の自由独立を損ねる」「秘密協定であることが恐ろしい」

分野は広範に及んで、TPPの危険性について警告を発している。

ここではアメリカとFTAを結んでいる韓国はどうなったか、を拾ってみる。

- ・ 1年で畜産業の7割は廃業。農業は壊滅的な打撃を受けている。
- ・ 医薬品の価格が高くなっている。
- ・ 事前協議で一番強力な反対団体、農協を解体。
- ・ 遺伝子組み換え食品は無条件で受け入れる。
- ・ 株式会社経営の病院の参入を認めた。
- ・ アメリカ産牛肉の輸入条件を緩和。

- ・ アメリカの安全基準で税関をパスした自動車はそのまま輸入できる。
- ・ 排ガス基準を下げて環境基準をアメリカに合わせた。
- ・ ラチェット条項をのんだ。「一度決めたルール・基準はもとに戻せない」
- ・ 食料自給を断念。
- ・ 国内法の 63 本をアメリカの制度にならって改正。
- ・ 貧富の格差、二極化が加速。
- ・ ISD条項で政府は企業から損害賠償の申し立てを受けている。

この本は 2 年前に出版されている。その後、韓国がどうなったかを調べたい。

### 蓮池透「拉致被害者たちを見殺しにした安倍晋三と冷血な面々」(講談社)

1978 年 7 月 31 日、弟の蓮池薫さんが突如いなくなった。それから 24 年後の 2002 年に小泉首相の訪朝まで北朝鮮による犯行だとの確信はなかった。10 月 15 日、弟を含む拉致被害者 5 人は一時帰国で帰国する。そしてこの 5 人はそのまま日本に定住する。その後も日朝交渉は継続するが、14 年後の 2016 年現在、進展はない。

この間の事情を「家族会」の事務局長として、また退会を強要された立場から、述べた本である。

著者は、北朝鮮に対する制裁をすべきという強硬派であったが、それがまったく効果をあげていないことから、対話を重視する方向に舵を切る。政治家の動向と、家族会の内紛、救う会との確執、マスコミの動き、などが克明に記録されている。

著者は東京電力に勤務しており、2009 年に 54 歳で退職する前は原子燃料サイクル部のサイクル技術担当部長だった。また家族会代表だった横田滋さんは日銀出身であることは初めて知った。拉致問題に関わる人々への批判の舌鋒も鋭いが、返す刀でこの間の過激な自身の言動についても強く反省の弁を述べていてバランスは悪くない。

「拉致問題の解決」とは何か。これが本書のテーマだ。

### 内館牧子「終わった人」(講談社)

主人公は私と同一年の設定。盛岡の名門高校から東大法学部に進み、国内トップのメガバンクに就職。大卒男子 200 名の中でトップを争うが、ライバルに敗れ 49 歳で小さな子会社に飛ばされ、51 歳で転籍となる。63 歳、専務で定年となる。その後の 66 歳までの歳月を描いた定年小説である。

毎日が日曜日になって、ジムに通ったり、カルチャーセンターに顔を出したり、大学院に入ろうとしたりする。そういう生活に耐えられなくて仕事を探す経歴がリッパすぎ

てうまくいかない。途中でずいぶんと年の離れた女性との恋愛もどき、もある。IT企業の顧問を経て社長になるが、倒産の憂き目に遭い、個人の金融資産のほとんどを失う。

結局、起業をしようとしていた妻とはおかしくなる。

それを救ったのは「故郷」だ。友人たち、お袋、自然、、、。

「最後は横一列」「成仏」「ソフトランディング(軟着陸)」、、、、。

89歳のお袋が「66か、良塩梅な年頃だな。これからはなってもできるべよ」と言う。「終わった人」どころか、「明日がある人」なのだ。

私の88歳のお袋も「60代は若いよ、いいよ」といつも言っているのを思い出した。この小説の最後は2016年1月だから、「現在」だ。

内館牧子はこの書をすべての読者の遙に故郷の山河に捧ぐとしているが、成仏できないでいる団塊世代を中心に大きな影響を与える本になると予言しておこう。

### 小保方晴子「あの日 小保方晴子」(講談社)

2016年1月28日発行。15章のタイトルを並べてみる。

「研究者への夢」「ボストンのポプラ並木」「スフェア細胞」「アニマルカルス」「思いとかけ離れていく研究」「論文著者間の衝突」「想像をはるかに超える反響」「ハシゴは外された」「私の心は正しくなかったのか」「メディアスクラム」「論文撤回」「仕組まれたES細胞混入ストーリー」「業火」「戦えなかった。戦う術もなかった」「閉ざされた研究者の道」。

「STAP細胞」をめぐる大騒動の中心に立つことになった著者から見えた世界の姿が克明に記録されている。科学の説明と周囲の動き、そして渦のど真ん中にいる自分の心境が科学者らしい証拠を押さえた上手な文章で綴られている。

生命科学界のどろどろした内幕、理研・早大などの組織防衛による裏切り、若山教授など個人の驚くべき保身の動き、毎日新聞・NHKなど容赦ないマスコミの攻撃、こういった耐えがたい業火に焼かれる日々、、、。

真実は闇の中だが、渦の中心から見えた地獄の風景は、よくみえた。

さて、この書はどういう影響を与えていくだろうか。

### 青山文平「つまをめとらば」(文藝春秋)

67歳で受賞して話題になった、直近の直木賞受賞作品。

平穏な江戸時代の文化の時代の下級武士の暮らしといくつかの男女の関係を描いた小説。

男は本業以外に、釣術、俳諧、算学、戯作、などの余技を持っている。女は、戯作、

漢詩などの余技を持っている。そして同時代の俳諧の小林一茶、戯作の曲亭馬琴などの姿が垣間見える。その余技が主人公たちの人生に陰影や飛躍を与えている。

青山文平は、藤沢周平の後継者の呼び声が高い時代小説家だ。短編集をまとめるのは難しいが、「オール讀物」を中心に連載した短編はそれぞれ質が高く粒がそろっている。冴えた目はユーモアを醸し出す。

それぞれの最後に近いところで、結末めいた物言いがあがる。

「などと、かわしながらも、時折、世津に似てきたと思うこともある。」

「この世には、こんな人たちがいるし、こんな場処もある。この世は私が想ってきたよりも遙かに妖しく、ふくよからしい。やはり、私はずいぶん狭い世界から、詩材を採っていたようだ。」

「女の乳房はけっして一人の女のものではなく、一族の乳房なのでございます」

「村は結局、なにも変わっていない。けれど、村を見る自分の目は、この一夏で、ずいぶん変わった気がする」

「里にちゃんと、恋をさせてみる。妾暮らしなんぞよりも、本妻暮らしのほうがずっといいことを、しっかりとわからせてやるつもりだ」

「齢を重ねるにつれて、分かったことが増えたが、分からないことも増えた。分かっていたことが、分からなくなったりもする。でも、それがわるいとは思わないし、いやでもない。」

著者がいうように「ふつうの女など、いない。」し、男も変わり、女も変わっていく。

司馬遼太郎は「自己意識の強い人が芥川賞、他者との関係に目を向けたものが直木賞向け」という名言を吐いたが、確かにこの時代小説も男女の関係を描いた作品だと納得した。

### 大村智,小杉小二郎「人生に美を添えて」(生活の友社)

専門の微生物に関する書物ではなく、美術に関する著作である。この書の中から、大村先生の考えをすくってみたい。

- ・ 1日なら都内の美術館やギャラリーを巡る。2-3日余裕があれば、温泉と陶芸家の窯を訪ねる。
- ・ 外国でも、まず日本食レストラン、次に美術館の場所の確認、それから学会、。
- ・ 教育と研究の両方が相まって本当の教育者だ。いい弟子を育てたか。
- ・ 何事をやるにも、まず歴史から入る。歴史を勉強すると、次の考え方が見えてくる。
- ・ 司馬遼太郎と山本周五郎。
- ・ 人材育成は、幅広い考え方や見方をもつ人材を育てること。
- ・ ゴルフ、美術の仲間が多い。



大村智先生の生き方には刺激を受ける。

科学者の本業では世界的発見を成し遂げ、その特許で所属する北里研究所に莫大な金銭的貢献を行う。同時に、趣味である芸術鑑賞分野では、縁あって女子美術大学のトップを引き受ける。そして双方の交流をはかるというように展開していく。

こういう人をほんとうに偉い人というのだ。

### 加藤典洋「戦後入門」(ちくま新書)

新書としては極限の634ページ、原稿用紙で800枚の大部の書である。

「戦後」を地理的には高い山から鳥瞰し、時代的には100年前の1914年から始まる世界大戦(第一次)から総括していくという大きな試みが成功している。こういう本は今までにない。30年後にもなお、私たちは戦後100年といっているだろうか、そういう極めつけの問いが「はじめに」にある。

この本の中で登場する主な人物は以下の通り。

三島由紀夫、江藤淳、小島信夫、田中康夫、吉本隆明、内田樹、シュヴェルブシュ、ウィルソン、レーニン、石橋湛山、吉野作造、重光葵、石原莞爾、トルーマン、鳩山一郎、桜井よし子、オーウェル、マッカーサー、石橋湛山、吉田茂、鶴見俊輔、渡辺京二、高坂正堯、永井陽之助、岡崎久彦、南原繁、R・ドア、小沢一郎、ラッセル、湯川秀樹、矢部宏治、池澤夏樹、柄谷行人、安倍晋三、、、、。

重要な事柄や見識は山ほどあるが、戦後を考えると必ず「憲法九条」に行くつくことになる。

加藤は、左からの護憲か、右からの改憲かという議論は、出口がないとして、それを超えていくことを主張している。リベラルの視点からの改憲である。

あらゆる角度から検討した結果、最終ページで、結論を出している。

以下、九条改定案。

-----  
九条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

二、以上の決意を明確にするため、以下のごとく宣言する。日本が保持する陸空海軍その他の戦力は、その一部を後項に定める別組織として分離し、残りの全戦力は、これを国際連合待機軍として、国連の平和維持活動及び国連憲章第四十七条による国連の直接指揮下における平和回復運動への参加以外には、発動しない。国の交戦権

は、これを国連に委譲する。

三、前項で分離した軍隊組織を、国土防衛隊に編成し直し、日本の国際的に認められている国境に悪意をもって侵入するものに対する防衛の用にあてる。ただしこの国土防衛隊は、国民の自衛権の発動であることから、治安出動を禁じられる。平時は高度な専門性を備えた災害救助隊として、広く国内外の災害救助にあたるものとする。

四、今後、われわれ日本国民は、どのような様態のものであっても、核兵器を作らず、持たず、持ち込ませず、使用しない。

五、前四項の目的を達するため、今後、外国の軍事基地、軍隊、施設は、国内のいかなる場所においても許可しない。

再武装・日米同盟の「軍事的アナリスト」(安倍政権)と再武装・国家主権の復古型国家主義(日本会議)へ対抗するために、平和主義・一国主義の「非武装中立論」(旧護憲派)と平和主義・国際主義の平和的リアリスト(内田・矢部・柄谷ら)を網羅した連合を形成する画期的な提案だ。自衛権を認める憲法学者、旧自民党ハト派までを含む護憲・国連中心主義の合同である。

自民党ハト派の一部、小沢一郎の国連中心外交、鳩山由起夫の東アジア共同体構想、社会民主党・日本共産党の平和主義、外務省、財務省、防衛省の一部政治的リアリズム派までが、旧来の護憲派、現今のさまざまな未来構想とともに、結集できる。

以上が加藤の結論である。

現今の政治情勢をみるに、優れた、そして大きな構想であると思う。

### 小島勇編訳「武田家百目録—信玄の人生訓」(武田神社)

武田信玄の軍師・山本勘助口演実記二審源自らが加筆して成立した心得集。

若い武士を対象とした日常生活の心得や守るべき常識を平易に記したものだ。

- ・ 朝の目覚めの方法「胸から臍の下まで 3 回なでおろし、臍下三寸の丹田をしっかりとおさえてから起き上がれ」「寝床の上にあぐらを組み、その日の用事を心に描き、整理し、順序を立てて、寝床を出よ」「目の中はよく洗え」
- ・ 寝る前に「便所へ行って、その日一日の仕事の内容を書く印紙忘れていたことは記録して枕元へ置き、翌日真っ先に区切りをつけよ」「晴れ晴れとした気持ちで丹田を押さえ気持ちを落ち着かせて寝る」「枕元に干し飯、金銭、梅干し、檜の棒、草鞋 2 足をそろえよ」
- ・ 「得意の仕事を申しつけよ」「身の出来事をむやみに語らず慎み深くせよ」「金を

- 貸すときは助け与える気持ちで」「一步一步歩みを踏み固め、段々と稽古に励め」
- ・ 他には、旅の心得、家のおさめ方、など実に細かく作法や心構えや作法を説いている。

基本に流れる考え方は儒教の「修身齐家治国平天下」である。

戦国武士の心得と武田信玄の考え方がよくわかる。現代で言えば、ビジネス書に近い。

### 高村薫「空海」(新潮社)

小説家であり、一方で時代を論評する言論人の顔を持ち、近代合理主義者を自認していた高村薫は、1995年の阪神淡路大震災に大阪の自宅で遭遇し、宗教、とくに仏教に深い関心を寄せるようになった。そして2011年の東日本大震災でさらにその思いは深まった。

本書は共同通信社が2014年4月から2015年4月まで配信した連載「21世紀の空海」を加筆修正したものである。この間、共同通信社の取材チームとともに、全国の寺院、博物館、大学、地方新聞など膨大な人々に取材をしている。

最後の前高野山真言宗管長の松永有慶との対談で、空海は「やはり漠としている」と感想を述べている。私生活が伝えられていない空海の人物像が明瞭な姿を結ばないのだろう。タイムマシンがあったならば、空海その人に会ってみたい、とこの本を結んでいる。司馬遼太郎も「空海の風景」を書いたが、やはり同じような感想を抱いていたように記憶している。

空海は密教を独創で細部まで念入りに完成させた。それゆえ弟子たちは怠けてしまった。最澄はあらゆる教えを受け入れたが、体系化には成功しなかった。それがその後の仏教の新しい波を育てたともいえる。法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗、栄西の臨済宗、道元の曹洞宗、日蓮の日蓮宗などの新仏教は比叡山で学んだ僧たちによって起こされた。

この本の主題である空海自身のことにも関心はあるが、四国八十八箇所をめぐるお遍路とは何かに興味が湧く。全長1400キロに及ぶ四国遍路は、ハンセン病患者が物乞いをして歩き、障害者や犯罪者が露命をつなぐなど、窮民の多い巡礼の道だった。

今日の巡礼は「自分の所在を納得するための手続き」であり、個人が自分という存在を確認するための自己覚醒の儀礼だという見解が紹介されている。白装束に象徴される擬似的な死と、そこからの再生である。

白洲正子の「西国巡礼」の中で多田富雄さんが、巡礼とは自己発見の旅であると喝破していたのを思い出した。

2016年3月

### 星野英紀「四国遍路の宗教学的的研究」(法蔵館)

以下、巡礼観。

- ・ 巡礼は巡り参拝すること。日本では巡るが大きなウエイト。
- ・ 参り。詣。廻国。順礼。遍路。
- ・ 聖は霊山、霊峰、霊場などを修行しながら歴遊すること。(法華経記)
- ・ 巡礼地とは自分の所在を確かめる場であり、その試みが巡礼。神々の在所を巡って人間の在所に戻り、自分の足もとはここだと確認する。自己確認の手続きであり、自分の在所を納得するための手続き。(岩田慶治)
- ・ 自分の抱く困難な問題や苦しみと向き合い、ありのままの自分に目覚めるという自己覚醒に至るのが巡礼(青木保)
- ・ 聖地は場所か、人物(神)に関係するかどちらか。

### 辰野和男「四国遍路」(岩波新書)

歩き遍路は1400キロを40日前後で回る人が多い。筆者は6回に分けて歩く。歩いたのは71日。68歳から70歳になる直前までで長い間の宿願を達成した。この遍路は、区切りうち歩き遍路という分類に入るとのことだ。

四国遍路の日々を達意の文章で綴っていく。

- ・ お四国病院:元気になる。
- ・ お四国大学:人生修行の場。年齢性別職業宗派学業成績国籍不問無試験。
- ・ 四国遍路の円環は平面ではなく、螺旋状。霊場から霊場までを、よりましにしたいと願い螺旋の道を歩く。人は生から死までを一直線に生きるのではなく、螺旋状の回りで生きる。一回りを1月、1年、10年と考える。人生を繰り返す、やり直すことができる。修行して螺旋状に円環を登っていく。修行を怠れば下がっていく。
- ・ へんろ道は芸術品。何十万、何百万の人々が造りあげた共同制作品。
- ・ 「生きている死者」として歩く。白衣に杖という死装束。しかし、日常生活において実は「死者のように生きている」だけではないか。
- ・ 六根清浄。眼、耳、鼻、舌、身、意。こころを洗うのが難しい。

### 福島英「人に好かれて、きちんと伝わる声になる本」(中経出版)

友人が書いた本。「声」に着目。

1日10分のトレーニング。般若心経は呼吸、発声、発音の練習に有効だそうだ。確

かにお坊さんの声はいいが、自然とトレーニングになっているのだろう。付いているCDで練習をするか。

### 門井慶喜「家康、江戸を建てる」(祥伝社)

江戸、現在の大東京は人工の街である。多くの天才技術者たちがそれぞれの分野で創り上げた総合芸術である。

- ・ 湿地帯から逃れるために、土木技術で利根川の流れを変える。
- ・ 純度の高い金貨をつくり、大阪との通貨戦争を勝利する。
- ・ 膨大な人口を潤すために、江戸へ向かって水源から清水を引く。
- ・ 伊豆の名石を切り出す名人と石を積みあげる名人でなす江戸城の石垣の物語。
- ・ 江戸城の天守建設をめぐる秀忠の活躍と家康の遠慮。

それぞれの物語が互いに組み合わせられて、江戸を形作っていく。最後に家康は天守閣から四方を覗き、「わしの、街」「、、われながら、ようやくわい」と心の中で満足する。永遠に普請中の江戸は成長をやめる日は来ない。槌音が響き続ける。

この本では、江戸という街の成り立ち、地名の由来も面白かった。水源という意味の井の頭、洪水を防ぐ遊水池の溜池、鷹場であった三鷹、水の通り道の橋であった水道橋、、、、。

徳川家康という地味な英雄の像に興味を持った。

この人は人生の達人である。

- ・ 決して急がず、確実に期す。ときにはまわり道を辞さぬ。
- ・ 無駄のないやりかたが、家康はもっとも好きである
- ・ 「へりくだる人間は仕事もへりくだる。おのれを恃め」
- ・ 「わしは鷹狩りに興じながらも、常に地相を観じておる」
- ・ ほとんど臆病といえるほどの自制心で陰謀をこらし、戦争をおこない、天下を制するに至ったのが家康の生涯にほかならなかった。
- ・ 華麗な判断力よりも実直な誠意をおもんじる型の人間だった
- ・ 「そういう累々たる死体の上にわしはあり、そなたはある。よいか秀忠、この天守は、それらを祀る白御影の墓石じゃ。」

### 酒井シズ「愛と至誠に生きる:女医吉岡弥生の手紙」(NTT出版)

先日訪問した東京女子医科大学の創設者が生前書いた書簡を集めた本である。

東京女医学校(29歳)から始まり、東京女医学校校長(36歳)、東京女子医学専門学校(49歳)、そして東京女子医大(1951年。80歳)へと発展を遂げるための精進した

偉い女性の考え方がよくわかる。また、この書は候文の形式の名書簡集でもある。手紙の書き方という面からも参考になる。

驚くのは、31歳の時に学生たちの参考に自らの出産を見学させたというエピソードも残っている豪の者であった。

1900年(明治33年)に東京女医学校が開校する。この年は二葉幼稚園、女子英学塾が開学し、翌年には日本女子大学、女子美術学校も開校するなど、女子の高等教育の出発となった時期である。

吉岡弥生は、「女子教育」という視点から、看護師、保健師、美容師、栄養などの分野で先陣を切った。

医学関係。

- ・ 「謹賀新年。庶政一新を望む者は すべてからく自己一新を図るべし」
- ・ 「日本の医学は治療医学を良しとして予防医学を疎かにしたので、、」
- ・ 「治療医よりも予防医の方がむしろ女医に適しておると思います。」
- ・ 「私の持論としては女医が結婚するには専門科目を異にすることがよいと思います。」

学校経営の苦勞。

「学校騒動も不良教授解職が実行できませんので、何かにつけ不愉快のことはありますが、、」「中に赤の分子がおり種々の不穩の文字を並べたり、説いたりして生徒を扇動し、、」「一部左傾分子もあり、、」

人事案件で、相手に病院の責任者を頼む手紙も多い。

「御相談申したいことがございます」「この際あなたに、、」「最も適任と感じますので、就任くだされば好都合と存じます」など。

手紙

- ・ 時下薫風の候、あすます御清栄に涉らせ慶賀奉り候
- ・ ようやく秋せいの句季となりまし
- ・ お暑さ、とんと加わり、
- ・ いかがが御消光でいらっしゃいますかお伺い申し上げます

52歳で遭遇し、第二至誠病院を焼失した関東大震災については「殊に震災当時のことは忘れようにも忘れられず、、いつまでもいつまでもぞっとする思いがいたしません。」

終戦の玉音放送では、「、、嗚咽を禁ずることができませんでした。不忠の軍人、無

能の為政者、かかるあで陛下をお苦しみ申し上げること、悲しさと腹立たしき、身の置き処を知らない境地に入りました。、、、しかし遅きに失したとは言え、国体護持のできますことは何よりのことと諦むるのほかはありません」

手紙は、人柄や書き手の本音がよく出るので、人となりがよく理解できる。

吉岡弥生は誰に対しても率直に、そして丁寧言葉を選んでおり、温かい人柄を感じさせる。多くの教え子の女医や、大隈重信、市川房枝などにも影響を与えたことがよくわかる。

### 司馬遼太郎「霸王の家」(新潮社)

司馬遼太郎には、信長や秀吉を魅力的に描いた歴史小説があり、それを読んできた。家康については、「霸王の家」という作品があることは知っていたが、家康という人物にあまりいいイメージがなかったこともあってなかなか手に取るに至らなかった。最近、いくつかの本を読みながら、あるいは人物記念館をまわりながら、家康のやったこと、器の大きさについて関心を持ってきたので、読み進めた。

以下、司馬遼太郎が家康という人物について語った部分。

- ・ 堅牢に複雑にできあがった二重性格
- ・ 気味わるいばかりに皮質の厚い、いわば非攻撃型の、かといってときにはたれよりもすさまじく足をあげて攻撃へ踏みこむという一筋や二筋の縄で理解できにくい質のややこしさ。
- ・ 正直を演技するという、そういうあくの強い正直であった。
- ・ 日本の歴史に対し先覚的な事業をすこしも遺さなかったと言う点で、めずらしいほどの存在である。
- ・ 「勝ってばかりいて、一度も負けたことがない人間は、どこかよろしくない」
- ・ 自分の体験を懸命に教訓化し、その無数の教訓によって自分の臓腑を一つずつくりあげたような男。
- ・ 「わしが鷹野をこのむのは、ひとつは健康のためである」
- ・ 人間というのは人間関係で成立している。
- ・ すぐれた偽善家
- ・ 実証的な性格
- ・ 意思の持続力には、損得の計算を越えたにぶい、しかし堅牢な情念というものがその性格の底にある
- ・ 年少のころから一度も人を謀殺したことがない
- ・ 強靱な筋肉質をもった自己防衛上の意志計算力をそなえていた。
- ・ 人のあるじと叫ぶものほど本来、不自由なものはない
- ・ いずれ、物事が煮えてから。

- ・ 計算の達者であり、冒険家ではなかった
- ・ ハキとしたこと申さざる人
- ・ 骨の髄からの蓄財家
- ・ 独創力に乏しく、それをみずから知ってもものまねびを重ねてきた男
- ・ 参謀や軍師というものを必要としなかった
- ・ 興醒めるほどに実利的
- ・ 「われ、素知らぬ体をし、能く使いしかば、みな股肱ととなり、勇功を顕したり」
- ・ 執拗さ
- ・ 徹頭徹尾模倣者
- ・ 技術好き
- ・ 戦場諜報に熱心
- ・ 猜疑深くなかった
- ・ 「愚かなことをいう者があってもしまいまで聴いてやらねばならない、でなければ聴くに値することを言う者が遠慮をするからだ」
- ・ 専決をおそれた。総意を執行すべく自分の身を犠牲にする、。
- ・ 現実家
- ・ 耳学問
- ・ 自分という存在を若いころから抽象化し、自然人というよりもハウジンであるかのよう  
に規定し、
- ・ 「天下の政においてすこしの無道もあるべからず。これをわが家の伝えとせよ」

司馬遼太郎の家康観は以上であり、好印象を持っていないようにみえる。

しかし、外様と譜代の遇し方、幕府の職制、江戸の街の創造、優れた敵の遺産を用いるやり方など、家康という男には気宇の壮大なところがあるように思う。

### 中篤邦「成瀬仁蔵」(吉川弘文館)

志

- ・ 「何か天下のことをしたい」「何か、国家的の事をしなくてはならぬ」
- ・ 「吾が天職、教員にあらず、牧師にあらず、社会改良者なり、女子教導者なり、父母の相談相手也、創業者なり。、、」
- ・ 「我目的は吾天職を終わるにあり。吾天職は婦人を高め徳に進ませ力と知識練達を予へアイデアルホームを造らせ人情を敦し、、、理想的社会を造るにあり」

「女子教育」という著作によって多くの賛同者を得る。そして影響力のある大物をこの事業に引き入れている。伊藤博文、西園寺公望、大隈重信、渋沢栄一、大倉喜八



郎、嘉納治五郎、伊沢修二、、、、。

「人として、婦人として、国民として教育する」「リベラル・アーツ重視。」

津田梅子の女子英学塾、吉岡弥生の東京女子医学校、成瀬の日本女子大と同時期に女子の高等教育機関が設立されている。

前二つは小規模であったが、日本女子大は、1901年に家政、国文、英文の3学部と付属高校という陣容で合計288名の大規模な学校として出発した。

「女子高等教育構想」という成瀬のつくった図が興味深い。中核は人格教育であった。

時に成瀬は42歳。60歳で逝去するまで、女子教育に専念した。後継者であり同志であった麻生正蔵の履歴朗読はこの人の60年の全生涯の生き方をあますところなく語っている。

「常に唯光明を見希望を見、暗黒を見ず絶望を見ず前路を見て退路を見ず。、、、」

#### 日本女子大成瀬記念館「広岡浅子関連資料目録」(日本女子大成瀬記念館)

日本女子大成瀬記念館で買った「広岡浅子関連資料目録」を読んだ。NHK朝の連続ドラマの主人公・広岡浅子の講演録が納められており、興味深く読んだ。

「なぜ老年になっても元気なのか」という問いに、「無限の希望」があるからだと答えて、少女時代から老年に至るまでの「希望」を語っている。彼女の一生がわかる。

- ・ 少年時代「我日本の旧習を脱し暇あれば男子と共に素読して、必ず女子の頭脳は開拓せらるべしとの希望を以って、大に力を養ふ事に努めたり」
- ・ 青年時代「広岡家は大阪の富豪なれば、其主人は少しも自家の商業に関せず、万事支配人政治にて、日毎、謡曲、茶の湯等の遊興を自己の業の如く思慮しつつあるが如し。之を見て余は斯くの如き有様にて永久に家業繁盛の継続するや否やの疑問を生ぜり。故に一朝事あれば己れ自ら起たざる可からずと意を決し、其準備に努めたり。そは簿記法、算術、其他商業上に関する書籍を、眠りの時間を割きて夜毎に独学し、之れに熟達せん事を我が希望とせり。」
- ・ 壮年時代「断然意を決し日本女子大学校発起者に加名するの榮譽を担へり。、、、将来の希望に向って尽力するをこよなき愉快なる事となしたりき。」
- ・ 老年時代「我希望の果されん日は前途尚遼遠なるを覚ゆ。然れども死生の別を考慮する暇あらず。今尚無限の希望に充ちて、百年の計画を行ふ之れ余が老いぜざる大なる原因ならずんばあらず。」

日本女子大の学生たちへの講演録から。

- ・ 犠牲的精神を発揮して男子を感化する者とならねばなりません。

- ・ 人格修養の最も簡単な一方法は、一挙手一投足も無意味にせないと言う事であらうと思います。
- ・ 男子を感化し、男子の力を悉く有益高尚なる目的の為に、捧げさせる事が出来るのであります。

広岡浅子の主張は、女性自らが主人公になることもいいが、家庭を持って日本婦人は男子を日常的に感化し、無駄なことをやめさせ、社会のために働くように仕向けることである。

広岡浅子は1919年1月に逝去しているのだが、10歳ほど年下の日本女子大創設の成瀬仁蔵もその3月に60歳で卒している。ほぼ同時に亡くなるのは偶然であろうが、二人の志は次世代に引き継がれていく。

### 常井健一「小泉純一郎独白」(文藝春秋)

主要な歴代総理の回顧録をずっと意識して読んできた。退陣後、すでに10年が経過しているが、小泉総理の本格的な回顧録は出ていない。この本は回顧録ではなく、「原発ゼロ」に向けたアピールという意味で長いインタビューに応じたものだが、ところどころに現在の政治についての考え方がでてくる。やはりこの人は魅力がある。

原発。

- ・ 広島・長崎の原爆より百倍以上強い放射能がまき散らされている。
- ・ いまだになぜ事故がおこったのかははっきりしたことはわからない。
- ・ 「オンカロ」、これを日本でやろうたって無理、(地震国には原発は適さない)
- ・ 原爆爆破してメルトダウン起こせば、、、もう駄目。こんな脆弱な国はないよ。日本人に向けた核兵器を日本が持っているのと同じことにする。
- ・ 人が住めなくなった福島ができたこちらのほうが、、、国富の損失じゃないか。
- ・ 多額の税金を投入しないといけない、、、自治体、銀行、鉄鋼、建設、セメント、IT、商社、下請け、新聞社、大学の原子力研究所、経産省、、、よく押さえてきたよ。(多額の税金がかかる)(核廃棄物の捨て場がない)
- ・ 今の原発に頼った状態も三十年あれば自然エネルギーで十分まかなえるように変えられる。
- ・ 河合弁護士「原発訴訟が社会を変える」(集英社新書)、、、東電の裁判は面白くなるよ。どんどん、どんどん隠していたことが明るみに出てくる。

政局。

- ・ 新党は全部壊れるでしょう。野党だけでいくらやったって。自民党議員が出て新党をつくらないと伸びないよ。、、自民党っていうのはそれほど国民に根づいている
- ・ 自民党が変われば全部変わっちゃうんだから。自民党を変えるのが一番早いんだ。
- ・ 軽減税率なんて、高所得者対策だ。、、最悪だよ。軽減税率を設けるくらいだったら、消費税を上げないほうがいい。
- ・ 財政赤字はここまできると削減できない。インフレで解決しようとする。困るのは国民。
- ・ 本来憲法九条は、自衛隊を軍隊と認めて、武力行使はしないと改正すべき。、、安全保障は野党第一党を味方につけなければいけない、争点にしてはいけない。

その他。

- ・ あいさつは三分以内。間が大事、早口は駄目。

## 2016年4月

### 福島清彦「日本経済の「質」はなぜ世界最高なのか」(PHP研究所)

多摩大の非常勤を長くやっていただいた福島先生の近著。

伝統的に用いられているGDP統計は生産高を示すが、暮らしの質を重視すべきであるという2009年のスティグリッツ報告を端緒とする世界の流れを紹介している。「世界も社会も経済も変わってしまったのに、計測指標がそれに歩調を合わせていなかった」とフランスのサルコジ大統領の発言は納得感がある。確かにそうだ。

暮らしの質は、主観的な満足度、客観的な質、経済的な幸福度の公正さ、としている。健康、教育、個人的諸活動、政治への発言と統治、社会的なつながり、環境条件、個人の身の安全、経済的な不安定の8項目で表現される。

そしてGDPを越える指標として4つの資本を示している。それは人的資本、生産した資本、社会資本、天然資本で、日本はすべての高い水準であるとの数字を紹介している。特に計りにくい社会資本については世界一だと推計している。

- ・ 人的資本:人口の量と質:育児。住宅。学歴。教育予算。健康資本。
- ・ 生産した資本:民間設備投資。政府投資。
- ・ 社会関係資本:共助支援。
- ・ 天然資本:農業への新規参入。

「個人の幸福度」の観点から、「より高い所得」を越える大きな目標を立てるべきであり、それを日本が率先して世界を牽引すべきというのがこの書の主張である。

## 山本七平「勤勉の哲学——日本を動かす原理」(PHP研究所)

読了と書いたが、山本七平の鈴木正三、石田梅岩の思想の説明は簡単ではないので、まずこの本の最後の長い小室直樹の解説を読んだ。

この本のテーマは「日本人はなぜ勤勉なのか」だ。

日本人にとって仕事は修行である。禅の修行と同じ。一心不乱に行えば救済される。これが勤勉の哲学だ。勤勉の哲学は「資本主義の精神」であったから日本は発展した。技術でもなく、商業の発達でもなく、営利経済でもない。資本主義の精神を育てるかどうかが重要だ。

資本主義の精神とは何か。

カトリックのエートスである現世内禁欲、計画性と合理性を、プロテスタントが俗人にもその規範を要求した。禁欲によって人格が作りかえられた。生活態度に一貫した方法が形づくられた。

日本資本主義の精神とは何か。

世俗内における職業的労働は宗教的行為とみなす。一心不乱に行えば成仏(救済)できる。それは精神的安定と充足感だ。先世の因果でその位置に生まれた責任があるから、その位置が要求する労働をただひたすら行うことが義務である。

キリスト教の世俗内禁欲とは、勤勉のことである。

私欲から離れて、世の人につくすため一所懸命に職業に励めば結果的に利潤が発生する。その利潤だけが是認される。儉約、貯蓄、投資、成長のサイクルが資本主義。ピューリタンは働き利得をあげよ、ただし使わずにただ貯めよとの思想であった。天職につとめ隣人を愛すなら神の恩恵を受ける。

梅岩は、衣食住は生活に必要なだけでよいとする乱費を戒めて儉約の思想を生んだ。正三・梅岩の思想は革命の思想ではない。神という絶対者があれば、悪い社会を捨てて、よい社会を選べる。それが革命の論理だ。正三・梅岩の思想には絶対者はいない。

さて、日本近代化のためには革命が必要であった。そのためには絶対者の存在が必要になる。その答えはこの書の中にはない。

本居宣長が徹底して現状肯定の論理を突きつめることが、そのまま体制否定の論理を内包することになった。朝廷から征夷大將軍と指定されたのが徳川政権であり、その現状を肯定すると、天皇が親政を行うことができるという論理が生まれるということになった。これが明治維新の思想と原動力になった。

天皇という絶対者の存在をつくるのが、日本の近代化をもたらした。

これは、中国の「天」、欧米の「神」と同様の仕掛けではないだろうか。明治国家の創造者たちは、天皇という存在を明らかにして、新しい近代社会を創造していったという

ことなのだろう。

この論理は、腑に落ちる。

### 嵐山光三郎「漂流老怪人 きだみのる」(小学館)

きだみのる、という名前はよく知っているが、どのような人かは知らなかった。エッセイストの嵐山光三郎(元平凡社「太陽」編集部員。1942年)による師匠・きだみのるの伝記である。新刊。

生涯をかけて漂流に身をまかせた怪人。酒飲みで、勇敢。威張っていたが、知力は緻密で不純物がない。ギリシャ語とフランス語の達人。眼光鋭く、太い背骨がまっすぐにたち、肩も胸も厚い。なみはずれた食欲、わい談を好み、単純生活者といいつつ哲学を語り、幸福論をぶちあげ、つきあったアナキストとの思い出を語る。フランス趣味と知識人への嫌悪。反国家、反警察、反左翼、反分断で女好き。果てることのない食い意地。人間のさまざまな欲望がからみあった冒険者。

嵐山本人の表現だと以上のようになる。面白いが、やっかいな人物である。翻訳家、旅行家、詩人、作家、コスモポリタン、社会学者、という多面体。

1895年1月1日、奄美大島生まれ。

35歳、ファーブル「昆虫記」の翻訳を始める。

48歳、「モロッコ紀行」(日光書院)

53歳、「気違い部落周遊紀行」(毎日出版文化賞)

62歳、「気違い部落」が松竹で映画化。

80歳、死去。

一番重要なことは長生きだ。、長生きすれば、いま生きている連中の正誤がわかる。共産主義者はすべてに先だって、マルクスの「資本論」より、ファーブルの「昆虫記」を読まなくちゃならない。現実探求のリアルな目は、これで養うのだ。

日本人は降伏を終戦と言い直した。占領軍を進駐軍といった。自尊心のオブラートで現実を包んで、ファクトを見ようとしなない。

### モラロジー研究所編「広池千九郎物語」(モラロジー研究所)

新聞の広告欄で見かけて注文。本日届いたので、早速夕食後に読み終えた。

広池千九郎(1866-1938年)は、郷里・中津の偉人である。中津市にある生家の記念館と、千葉県柏市の麗澤大学内の記念館は訪問したことがある。その他に、静岡県の広池千九郎畑毛記念館と群馬県みなかみの広池千九郎谷川・大穴記念館があるようだ。

若い人向けに編んだ書物であり、平易に解説しているので、本質がよく見える。以

下、広池千九郎の思想の骨格をまとめてみた。

知識や考える力を持っていても悪いことをする人もいる。人の一生に決定的な違いを生むものが「道徳」である。

道徳の大切さを世の中の人に考えてもらうのが、「モラロジー」(道徳科学)という学問である。

- ・ 22歳:「生き方のお手本」にしたい人の話を集めて「新編小学修身用書」を書く。
- ・ 日本の国に誇りを持ち、世の中のために一生懸命に働こうと思う子供を育てるには、教師自身が日本の歴史を知らなければならない、と歴史研究を始め、「中津歴史」を書く。2000年以上に及ぶ中津地方の歴史をまとめた本である。
- ・ 日本の国の成り立ちやしきたり、日本人の暮らしに関することならすべて調べられる事典である「古事類苑」の編集に関わり、10年以上かけて、一千巻、7万数千ページの事典が完成する。広池はその四分の一を書いた。

日本の皇室が長く続いてきたのは、歴代天皇と、その先祖の天照大神が道徳的にすぐれていたからだ。だからその生き方を手本にすることが、わたしたちの幸せの鍵になるのではないか。世界の歴史上の孔子、釈迦、ソクラテス、キリスト、日本の皇室の生き方を「最高道徳」と名付け、理想的な生き方であると考えた。

道徳的な生き方とは、「三方よし」という点にある。三方とは、自分、相手、第三者である。それがみんなが幸せになる道でだ。晩年には広池は道徳的な生き方をする人を育てることに力を注いだ。

「わたしはみずから「たいまつ」となって、自分の身を燃やし、世界を照らしていこう」

### 堀文子「ホルトの木の下で」(幻戯書房)

1918年生まれ。

5歳で、関東大震災に遭遇。「在るものはなくなる」

8歳、2/26事件に遭遇。

「闘わず屈服せず」

### 司馬遼太郎「おお、大砲」(中央公論新社)

Audibleで司馬遼太郎「おお、大砲」を耳で読了。

大阪冬の陣で活躍した大砲が主人公。明治維新にあたってこの大砲が役に立たなかった。そのことで封建社会の形式主義を痛烈に批判した小説。

司馬遼太郎は太平洋戦争で戦車兵だった時に、とうとう動かなかった戦車がニセモノだったことを知り、日本の形式主の愚かさを知り、戦後はなぜ日本はそういう馬鹿な国になってしまったのかをテーマとして追いかけることになった。

時代は違うが、同じ形式主義に陥った社会が対象だ。体験した戦車もどきになぞらえて、大砲とそれにまつわる徳川 300 年間飯を食ってきた制度と人々を滑稽味豊かに描いた作品。

### 桐野夏生「バラカ」(集英社)

桐野夏生の作品は比較的良好に読んでいますか。

デビューは遅かったのだが、その後、話題となる小説を次々と発表している。毎回、趣向を変えているが、この力量はただものではない。

42 歳、「顔に降りかかる雨」で江戸川乱歩賞。

27 歳、「OUT」で日本推理作家協会賞。

48 歳、「柔らかな頬」で直木賞。

52 歳、「グロテスク」で泉鏡花賞。

53 歳、「残虐記」で柴田錬三郎賞。

54 歳、「魂萌え！」で婦人公論文芸賞。

57 歳、「東京島」で谷崎潤一郎賞

58 歳、「女神記」で紫式部文芸賞。

59 歳、「ナニカアル」で島清恋愛文学賞。

60 歳、「ナニカアル」で読売文学賞。

今回は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の前後から、大阪オリンピックまでの数年間を中心にした、バラカという少女をめぐる物語である。現実と虚構が入り混じったノンストップ・ダーク・ロマン。

地震、津波、そして福島原発四基が爆発し、放射能が止むことなく飛散し続けて、東北と関東、そして東京も汚染された状態となり、首都も大阪になっている。

じいさん決死隊、「聖霊の声」教会、ドバイのベビー・スーク、閑上、巨大なカタストロフィー、地獄の門、横田基地、東日本壊滅、震災履歴、棄民、原発推進、大阪オリンピックが開催できるか、過去を取り戻す、反原発・棄民・原発推進の象徴・バラカ、天皇京都への行幸、内部被曝。政府による情報検閲、東京勤務には危険手当で 1.2 倍、。。。。。

この想像を絶する体験をした少女は、「エピローグ」では、18 歳で獄中結婚。20 年以上の戦いの末に上無実の罪が晴れた伴侶が出獄、「ミカ」と名付けた子供を授かる。

40 歳を過ぎてから北海道での定住生活を始める。

悪魔に取り憑かれたようなこの少女の行く末を案じながら読み進めたのだが、最後は少し安心した。

バラカ(薔薇香)とは神の恩寵という意味である。

熊本地震の惨状を見ながら、、、。

安部首相は国会で「リーマン・ショックや大震災のような重大な事態が発生しない限り、消費税を引き上げる」といつていた。これを主たる理由として消費増税を延期するだろう。安全保障面でも、この災害にオスプレイを投入することになる。この政権はついているのだろう。

### 葉室麟「霖雨」(PHP文芸文庫)

天領の豊後日田で、私塾・咸宜園を主宰する広瀬淡窓と家業を継いだ弟・久兵衛をめぐる物語。広瀬兄弟の清冽な生き方を貫こうとする姿を描く。

24 歳から 50 年に及ぶ講業。養子や弟子が引き継ぎ入門者は 5 千人を超えた。高野長英、大村益次郎、大楽源太郎、上野彦馬などの人材を輩出。

広瀬淡窓という人物の肉声と生身の姿を垣間見ようとして手に取った小説で、葉室麟という優れた書き手にも感心があり手に取った。

- ・ 淡窓:「中庸」に「君子の道は淡にしてしかも厭わず」。淡は君子としての在り様を示す。窓は書斎の意。
- ・ 咸宜園:「詩経」の「玄鳥篇」に「殷、命を受くること咸宜(ことごとくよろし)し、百禄は何う(これにならう)。「三奪」、年齢・学歴・身分を奪い平等とする。身分の差別無く塾生を受け入れるという名前である。すべての人は使命を背負っており、その生は尊ぶべきものだ。
- ・ 朝食の前に書に目を通す。もっぱら詩文。少しずつ身のうちに力が充実してくる。生きる希望をもたらすのは詩である。
- ・ 「鋭きも鈍きもともに捨て難し 錐と槌とに使いわけなば」
- ・ 「約原」と「迂言」
- ・ 「万善簿」。一日の行動や心事を、義と欲、経と怠に分け、善行を功、悪行を過とする。振り返って正しく行えたと思えば白丸、過つたと感じたら黒丸をつける。
- ・ わたしは一介の凡愚だ。ただ、焦らずに、歩みを止めることのない凡愚であろうとは思っている。
- ・ 淡窓のつくった有名な詩。

道(い)うことを休めよ 他郷苦辛多しと  
同袍友有り 自ずから相親しむ



柴扉暁に出づれば 霜雪の如し  
君は川流を汲め 我は薪を拾わん

### 三島由紀夫「レター教室」(ちくま文庫)

5 人の人物が繰り広げる事件を手紙形式で表現した異色の小説。主題は、手紙の書き方である。

「ラブレター」「肉体的な愛の申し込み」「愛を裏切った男への脅迫状」「招待を断る手紙」「恋敵を中傷する手紙」「病人へのお見舞い状」「裏切られた女の激怒の手紙」「離婚騒動をめぐる手紙」、。。

・ 「ともすると、恋愛というものは「若さ」と「バカさ」をあわせもった年齢の特技で、「若さ」も「バカさ」も失った時に、恋愛の資格を失うのかもしれないわ」  
やはり三島は人間の心理をよく知っている。人間通だ。

### 中井英夫,本多正一「中井英夫戦中日記 彼方より」(河出書房新社)

中井英夫

1922 年生まれ。

3 歳から日記と短歌をつくる。

7 歳、江戸川乱歩を耽読。

22 歳、参謀本部に配属。

24 歳、東大文学部言語学科に復学。

27 歳、東大中退。「短歌研究」「日本短歌」編集長。

40 歳、「虚無への供物」前半 2 章までを江戸川乱歩賞に応募するも次席。

42 歳、「虚無への供物」を刊行。

52 歳、第 2 回泉鏡花文学賞

71 最、死去。

「短歌研究」五十首詠特選の第一回の中城ふみ子のデビュー作「乳房喪失」の原題は「冬の花火ーある乳癌患者のうた」であり、第二回の寺山修司の「チェホフ祭」の原題は「父還せ」だった。いずれも「短歌研究」の編集人であった中井が一人で決めたものである。

「もゆる限りはひとに与える乳房なれ癌の組成を何時よりと知らず」と詠んだ前衛短歌の中城ふみ子のことは渡辺淳一「冬の花火」に詳しい。

江戸川乱歩に読んでもらいたい一心で 10 年の歳月をかけて摩訶不思議な「虚無への供物」という作品を完成させた。

江戸川乱歩への手紙から。「虚無への供物」完成の自信をうかがわせる。

- ・ 後編ではようやく、現実と寸分隙の無い形での非現実世界の犯罪を、そして、あらゆる探偵小説の約束を生かしながら結末ではそれとは違う何かを僅かばかりでもお眼にかけられるかと考えております。

小説について。

- ・ 小説は天帝に捧げる果物、一行でも腐ってはいはならない。

短歌について。

- ・ 何度でもいおう、自分の生活を、そこに起こった現象を過信するべきではない。そこに働いている、眼に見えぬ意味を探りとることだけが詩人の仕事だと。
- ・ この世の中に、まだまだ未知の不可思議が隠されており、それを自分の言葉で捉える喜びがなくて、なんで短歌を作る甲斐があろうというものではないだろうか。
- ・ もともと作歌自自身が、「ささいなことにこだわ」って、それを輝く宝石に変える仕事の筈である。、、、小さな魔法――作者の手がふれる時はじめて、それをまっていたように輝き出す、それが作歌の秘密であろう。
- ・ その歌の「何もない美しさ」であろう。、、、一見、本当に何もないごとく見えるそこには、ただ光だけが充ちている、そのような歌こそ、、、真に人々の愛唱してやまぬ歌となり得る筈である。

「中井英夫戦中日記 彼方より」(中井英夫・河出書房新社)を読了。

第二次大戦中で学徒動員された世代の中井は市ヶ谷の参謀本部勤務となる。いわば戦争遂行の中枢にしながら、満たされぬ勉強意欲と反戦の日記を書き続ける。思いの丈を綴った日記では同じ年の山田風太郎日記と双璧である。多くの人は戦争の前線には喜んでいったのではない。そういう時代の空気もわかる。「学生の凡ゆる希望も今ここに断たれた」、。。

- ・ 日本は愛しよう。併し今その日本を動かす資本主義と軍国主義を私は愛さない。
- ・ 八月を終わる。併し食堂で昔と大差のない食事をしていると未だ未だ余裕のあることを感じる。
- ・ 軍閥は、、臭気ぷんぷんたる、資本主義と手を結び、南方に帝国主義的な進駐を開始するに到った昭和十六年某日よりの行動は、革命の日もつとも指弾し全面的に責任を問ふ「べき醜悪なる事実である。
- ・ 理念の字句の美麗さと食ふものがろくにない国民生活の惨めさとばかりが滑稽に並んでいる。
- ・ 大いなる未来を思いねむれどもさびしき星は空に光れり

- ・ かうした無理な戦争をしている以上、
- ・ そこにのたうつ、ミタリズムの上にまたがっている太った、安手なリベラリズムの親玉たち。
- ・ 兵器はでたらめだし、
- ・ 日ソ開戦、、、かうして、日本は確実に滅びの門をくぐった。、唯ひとつ惜しいのは、折角めざめてきた日本人自身でこの邪宗(邪宗的国家主義)をくつがえせないことだ。

1971年「公評」3月号の抄録のまえがき。

- ・ 戦後二十五年を経て何より驚かされるのは、私たちいわゆる戦中派の年代が、誰も彼も屠所の羊さながら、権力の命じるまま御両親様宛の遺書をしたため、従容として死についたと思われているらしいことで、もうそんな神話や英雄伝説が出来上がってはたまらない。
- ・ 学徒出陣を国のため君のためと心底思いこんでいた人間は、まったく少数の異端者だったことをあきらかにしておかなければならない。そしてそのくせ、兵隊はいやだという発言を誰ひとりなし得なかったことも確かなので、戦中派の戦後の沈黙は、かかってその恥にあるとわかっていい。

1971年「彼方より 中井英夫初期作品集」のまえがきより。

- ・ 中学三年の冬に、南京陥落で祝賀の提灯行列が行われた夜、とめどもなく他人の国へ攻めこむことがなんだったって祝うに値するのだろうかと思ひながら密かに考え始めてから、ひどい憂鬱症にかかっていた。

1971年「増補新装 彼方より」の「巻末小記」より。

- ・ 世界の大勢について一度も眼を向けず、あきらかな侵略戦争を聖戦と言い変える欺瞞に渾身の憎悪を覚えなかったのだろうか。

津田大介・香山リカ・安田浩一他「安倍政権のネット戦略」(創出版新書)

2016年5月

三宅一生,重延浩「三宅一生 未来のデザインを語る」(岩波書店)

三宅一生は、衣服はどんな素材からもつくりすることができる。それを様々な方法で加工し、新しい形をつくることだと考えている。

日本から世界に発信するには、素材づくりからはじめる必要があり、日本中を歩いて

まわった。

日本は素材の宝庫だった。

しじら織り、刺し子、、、。

ものはどこから来たのかを知るという楽しさ、それがものをつくる楽しさだ。

日本にはまだ手仕事の最後の火が残っている。

それを蘇らせた。

自分は不器用だから、流行を追うことはしない。

人間と衣服の関係は「一枚の布」である。

肉体と衣服の間に自分自身が作る空間があるという考え方で仕事をする。

できるだけ布地を裁ち切らないで存分に空気を入れてしまう。

そしてシンプルな造形にして、着る側とつくる側が、責任を半々に持ち合う。

こういう仕事を続けるための条件は、世界が平和であることだ。

### 川端康成「雪国」(新潮文庫)

近代日本の抒情小説の古典で、最高峰の日本の小説である。大学生の時代に読んだ記憶があるが、数十年ぶりに再読した。

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」から始まり、「踏みこたえて目を上げた途端、さあと音を立てて天の河が島村のなかへ流れ落ちるようであった。」で終わる。

親譲りの財産で無為徒食する主人公は、フランス文人達の舞踏論を、ほそぼそと翻訳している男である。生きることに切羽詰まっている若い女・駒子の清潔さを哀れみながら、ゆきずりの愛以上に踏み込まない自らを哀れむ主人公は、それを冷ややかにみる葉子のはかない美しさにも惹かれる。

その三者の心の動きを越後湯沢温泉と思しき、雪深い温泉町の自然を背景に、実に見事な文章で綴られている。心理小説。

### 朝井まかて「眩(くらら)」(新潮社)

葛飾北斎の娘・応為の物語。

北斎の日常と絵への考えはいかに。

- ・ この世は円と線でできている。
- ・ 描きすぎちゃあ、野暮になる。
- ・ 下手な鉄砲でも数打ちゃ、そのうち何かには当たる。絵も戯作も、数をこなさなね

えと物にはなんえ。

- ・ 来た仕事は断るんじゃねえ。
- ・ ものを見る目が広い。蟻の頭の擡げ方を地べたから見上げるかと思えば、東海道の名所を鳥のごとく上空から見晴らす。
- ・ 描く技を磨きててえなら真似て真似て、躰の中に叩き込め。技もねえのに画風がどうのと余所見をすりゃあ、先は行き止まりだ。
- ・ 何が違うかっていやあ、遠近と陰影だ。まあ、真の景にちかい。異人らにとっては、目の前の物を正しく描き写したものが絵だ。
- ・ たとえ三流の玄人でも、一流の素人に勝る。、、こうして恥を忍ぶからだ。己が満足できねえもんでも、齒あ食いしばって世間の目に晒す。やっちまったもんをつべこべ悔いる暇があったら、次の仕事にとっとと掛かりたがれ」
- ・ 俺は隠居なんぞしねえと言ひ渡してあんだらう。俺には描きたいものがまだ、山ほどある。
- ・ 俺が70になる前に描いたものなんぞ、取るに足らねえもんばかりだ。73を越えてようやく、禽獣虫魚の骨格、草木の出生がわかったような気がする。だから精々、長生きして、80を迎えたら益々画業が進み、90にして奥意を極める。ま、神妙に達するのは100歳あたりだらうな。百有十歳にでもなってみろ。筆で描いた一点一画がまさに生けるがごとくになるだらうよ。
- ・ 毎日、獅子図を描くのを日課にしている。毎日、描く、これが大事なのだ。日課獅子。
- ・ 巧いことと絵の奥意を極めることとは別だ。、、、つまり、描き続けるしかねえんだ。

北斎と同時代の滝沢馬琴は北斎とは、いざこざが絶えなかった。しかし北斎が中風で倒れた時、突然現れて「葛飾北斎、いつまで養生しておるつもりぞっ」と嘖くように言った。この敵の言葉に「養生はもう、飽いた」と絵筆をとった。この場面も見せ場だ。

この後、70を越えて、代表作「富嶽三十六景」に取り組み、大評判をとる。

さて、主人公の応為である。

後に、江戸のレンブラントと言われた光の画家。

- ・ そうか、光だ。光が物の色と形を作ってる。
- ・ 夜の闇の中でも、いくつもの光と影がある。
- ・ 色数を矢鱈と使わずとも、濃淡を創ればいくらでも華麗さは出せる。むしろ怖いのは色を用い過ぎることだ。

最後に、応為は「もう60かもしれないが、先々のあたしから見たら、今日のあたしがいっち若いじゃないか」と踏み出していく。

## 池内記「亡き人へルクイエム」(みすず書房)

「ペンによる肖像画」というPRに惹かれて購入。

新聞や雑誌から、死去を告げられ、書いた追悼文に加筆したもので、28人との交友を回顧し、人物の肖像に仕上げた本だ。著者がみた、その人物の本質をきっちりととらえて書いた、と後書きで述べている。

- ・ 木田元「「いやな男」のいやなところを指摘しながら、同時にその人物の大きさ、天才生をきちんと伝えるなど、なかなかできないことなのだ。他人の悪口を言うとき、おのずと語り手の人となりとスケールが出てしまうのである」
- ・ 森毅「森さんは死んだかもしれないが、いなくなったわけではないだろう。人は逝っても言葉は残るからだ」
- ・ 小沢昭一「そのウンチク、その見方、考え方、さらにその語り方。すべてがそっくり「名人とは何か」の答えになっているのではないか。」
- ・ 米原万里「とびきり自分に正直で勇気あるこの女性は、あきらかにあるべき未来の女性を先取りしていた」
- ・ 赤瀬川源平「たえず、「素」(もと)に戻って考える人は、おのずと時流を突き破っており、ころころならずも時の人になる。大いなる過激派の宿命というものだ」
- ・ 児玉清「おつき合いいただいたのは、ほんの数年なのに、したしくこの人の一代記に立ち会った気がするの、どうしてだろう？」
- ・ 高峯秀子「ほぼ四半世紀を退くことのできない緊張を強いられる場で、おそろしくまっとうに生き、あざやかに身を消した。アップレな女がいたものである。」

追悼文を書くことは、その人物の生涯全体を眺め、その人の本質を描き、後に遺すということだろう。

## 石寒太・谷村綱夢「いきいき健康「脳活俳句」入門」(ペガサス)

俳句は脳を活性化させるから、老後の健康維持に最適という「老快」のススメの本。

以下、気に入った俳句をピックアップ。

石寒太(「炎環」主宰)

葉桜のまっただ中へ生還す

見舞ひ妻桜の真下帰りけり

生も死もたった一文字小鳥来る

かるき子は月にあづけむ肩車

漱石(漱石の俳句は好きだ)

菫(すみれ)ほどな小さき人に生まれたし  
飯蛸の一かたまりや皿の藍  
生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉

虚子(子規の「写生」を一步進めて俳句人口を広げた功労者)

大勢の子を育て来し雑煮かな  
春風や鬪志抱きて丘に立つ

久保田万太郎

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

金子兜太(1919年生まれ。未だ現役の怪物)

酒止めようかどの本能と遊ぼうか  
今を生きて老い思わず去年今年

おい癌め酌みかはそうぜ秋の酒(滋酔郎:江国滋)

紅葉で神が染めたる天地かな(小林凜:小学生俳人)

熱爛の夫にも捨てし夢あらむ(西村和子)

### 谷村綱夢「胸に突き刺さる恋の句——女性俳人 百年の愛とその軌跡」(論創社)

明治以降百年の女性俳人たちの詠んだ恋愛の名句で綴る女性の歴史がよくわかる快著。

以下、心を打った句をピックアップ。

我が恋は林檎の如く美しき(中川富女)  
そなさんと知つての雪の礫かな(沢田はぎ女)  
鳴神や、仁王の臍の紙礫(平塚らいてう)  
呪ふ人は好きな人なり紅芙蓉(長谷川かな女)  
啓蟄や走る自動車皆とまれ(かな女)  
青柿落ちる女が墮ちるところまで(かな女)  
短夜や乳ぜり泣く児をすてっちまをか(竹下しずの女)  
花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ(杉田ひさ女)

足袋つぐやノラともならず教師妻(ひさ女)  
月光にいにち死にゆくひとと寝る(橋本多佳子)  
着きてすぎわかれの言葉霧の夜(多佳子)  
雪はげし抱かれて息のつまりしこと(多佳子)  
しゅうせん(ブランコ)は漕ぐべし愛は奪ふべし(三橋鷹女)  
白露や死んでゆく日も帯締めて(鷹女)  
ゆるやかに着てひとと逢ふ蛍の夜(桂信子)  
羅(うすもの)や人悲します恋をして(鈴木真砂女)  
借財のなき身のかろさ葱鮪汁(ねぎまじる)(真砂女)  
香水やその夜その時その所(武原はん)  
人の手がしづかに肩へ秋日和(七菜子)  
抱擁や初髪惜し気なくつぶす(品川鈴子)  
水着選ぶいつしか彼の眼となって(黛まどか)

### 大熊玄「鈴木大拙の言葉―世界人としての日本人」(朝文社)

著者は、鈴木大拙の親友・西田幾多郎を顕彰した西田幾多郎記念哲学館の学芸員で、中学生向けに大拙の思想を平易に伝えようと著した本である。

大拙は世界へ「禅」を紹介した人物として知られる。鎌倉時代に伝来して以来、日本の生活・文化に多大な影響を与えた禅について書かれた部分を自分なりの理解で以下に並べてみる。

アーティスト・オブ・ライフとは、生きるということの芸術家という意味である。

芸術家は表現をするための道具が必要だが、誰もが持っている肉体を粗材とし、道具とし、生活の中に表現することは誰でもできる。それが人生の芸術家であり、自らの日常生活を芸術品に仕上げていくのが理想である。

「成長はまたつねに苦痛をとまなう」。

それは天意である。苦しめば苦しむほど、人格は深くなり、その深まりとともに、より深く人生の秘密を読み取るようになる。悲しみのパンを口にすることなくしては真実の人生を味わうことはできない。

禅は「言葉に頼るな(不立文字)」を言う。

禅的な方法とはじかに対象そのものの中に入っていき、そして実際そのものの中からモノを見る。花を知るには花になりきることで、初めて花が語りかけてくる。花を知った知によって全宇宙の神秘を知る。そして同時に自己を知る。



禅は何にもこだわらないことを強調する。

自由の本来の意味は、自らに在り、自らに由り、自らで考え、自らで行為し、自らで作ることだ。

禅は季節に移り変わる自然のできごとに深く関心を持つ。

日本の歌人、俳人は自然と一体になって自然の鼓動を一つ一つ自分の血管を通じて感得する。

芭蕉は全存在に通貫する神秘を、身をもって感得する。この感銘の深みにわれを忘れて、深い詠嘆の声を発する。

### 宮本輝「蜚川・泥の河」(新潮文庫)

昭和 30 年代の大阪の場末が舞台の作品。

1977 年伊太宰治賞を受けたデビュー作である。

馬車引き、水上生活者などがまだ存在していた、昭和 10 年代の戦争の傷跡の残った生活風俗を少年の目で的確にとらえている。

河のほとりに住む少年と郭舟に暮らす姉弟との短い交友が、作者の幼年期の記憶を土台に描かれており、人生の哀歓を誘う名作だ。

### 野口悠紀雄「話だけで書ける 究極の文章法」(講談社)

아이폰の Siri を使って文章を書く方法を突きつめた本。

私も出張先でブログを書くときにやっている。楽に書ける。

さすが野口先生、速いなあ。

- ・ セマンティック検索
- ・ 音声入力で下書きを準備し、メモを Gmail で自分宛に送りPCで処理。
- ・ Google ドキュメントに 아이폰で音声入力。
- ・ テキストエディタ。Grep 検索。
- ・ 아이폰の付属アプリで写真も使える。
- ・ 150 字 10 個でまとめ。5 分。
- ・ 1 時間 10 枚。8 時間で 40 枚。10 日で本 1 冊分。
- ・ 1 時間の散歩でアイデア。
- ・ Hey Siri
- ・ Dragon Dictation(無料。正確)。Anfasoft(1080 円。外国語翻訳。高度)。音声

認識メールクラウド(120 円、高度)

### 出光佐三「人間尊重七十年」(春秋社)

以下、心に届いた言葉。

- ・ 「黄金の奴隷となるな」(学生時代)。「組織の奴隷となるな」(戦時中)。「権力の奴隷となるな」(占領時代)。「数や理論の奴隷となるな」(独立後)。「主義の奴隷となるな」。
- ・ 二人の恩人。中津出身の神戸高商の水島てつや初代校長。淡路出身の日田重太郎からは別荘を売った 8000 円を無条件で提供してもらった。
- ・ 人格を磨く、鍛錬する、勇んで難につく、つとめて苦勞する、隠忍する、贅沢を排して生活を安定する、しかして大いに思索する。
- ・ 愚痴をやめよ、世界無比の三千年の歴史を見直せ。そして今から建設にかかれ。(8 月 15 日の玉音を拝して)
- ・ ドイツは戦争に負けたが、占領政策には敢然として戦っております。ドイツの再興はわれわれの手でやりたいと言っている。
- ・ 人間として偉ければいい。人間が偉いということは道德の人、心の曇らない人になるということです。
- ・ 偉い人は都会から出ておりません。必ず地方から出ております。

仙涯の蒐集家として知られる出光佐三は学生時代からこの和尚の書画が好きで集めていた。仙涯が夢異な円通禅師であることを知ったのはずっと後になってからだそうだ。その蒐集が出光美術館をつくった。

2016 年 6 月

### 上橋菜穂子「鹿の王(上巻・下巻)」(角川書店)

本屋大賞第一位の傑作。

本屋大賞を受賞した 100 万部を超えるベストセラーだ。本屋大賞は全国の書店員が「いちばん売りたい」と思った本である。読者側に立った目線なので、はずれはないので、本屋大賞第一位の作品は必ず読むようにしている。

さて、この「鹿の王」は、医学、薬学、人類学、社会学をバックにした異世界を巡る壮大なファンタジーエンターテイメントである。マイクロコスモスである人間の体の内で何が起きているか、その謎解きをしながら、人の命と国家の将来を暗示する大きな物語だ。

著者は「あとがき」で啓示を受けた 2 冊の本をあげている。

- ・ 「創造する破壊者」——ウイルスが身体を変化させる共生体としてふるまうことがある。
- ・ 「われわれはなぜ死ぬのか——死の生命科学」(柳沢桂子)——生物進化論。不死の生物の存在と、性の分化が死を生み出す。

人の身体は、細菌やウイルスらが、日々共生したり葛藤したりしている場である。雑多な小さな命が寄り集まり、それぞれの命を生きながら、いつしか渾然一体となって、ひとつの大きな命をつないでいるだけなのだ。それは社会そのものである。そういう発想からこの物語は生まれた。

「鹿の王」とは、我が身を賭して、群れを守る鹿のことだ。鹿の王という生き方は、「他者を生かすことで、自分も生きる。他者を幸せにすることで、自分も幸せになる」ということである。

### 出久根達郎「本のお口よごしですが」(講談社)

講談社エッセイ賞を受賞した、ほろ苦く、笑いを誘われる、そして人生を肯定すべきあたたかな挿話集。

### 新井白石「西洋紀聞」(岩波文庫)

上・中・下巻。

最後の潜入者・イタリア生まれの宣教師ジュアン・シドッチは小石川の切支丹屋敷に幽囚される。その 40 才のシドッチを当時 53 才の新井白石が尋問したときの記録である。

上巻では、シドッチ上陸からの経緯を記しており、彼の印象が次のように描かれている。シドッチは、背が高く六尺をはるかに越え、髪黒く、眼は深く、鼻が高い。博覧強記で多学であり、天文地理の知識は抜群である、

中巻では地理を尋ねている。地球は丸いというところから始まる。エウロパ、ヅブランデヤ人、フランシス・サイベリウス、ロソン、スイヤム、マロカ、カステイリヤ、カラナナータ、、、聞き取った事実を記した後、「按ずるに」という枕をつけて、新井白石は所感を述べるというスタイルだ。

下巻。姓名郷国父母等のことを聞く。41 才、幼少より天主の法を学ぶ。学校は 22 年、師は 16 人。日本の風俗と言語を 3 年学ぶ。家族のことを聞くと、しばらく黙って、憂いを浮かべながら、忘れることは無いが、使命を果たすのみと答えた。日本国の風俗言語は、ロクソンで聞いたり、辞書で学んだとのことである。

フランシスコ・ザビエルの関係者は皆知っている。

陸戦はトルコ、水戦はフランス。今はヅブランデヤが最強。デウスという天主、アダン、

エワ。モイセス、エイズス・キリスト、マリア、、、。「按ずるに」とあり、耶蘇教を批判する。天地がないときにこのデウスは生まれたのか。エイズスについては嬰兒の言葉のようだ。天地能造の主なのに人々を善にすることもできない、万能ではないではないか。耶蘇教は仏教に似てはいるが、浅く愚かだ。耶蘇教の禁止は、過剰防衛ではない、と白石は結論づけている。

シドッチの処分については、白石は 3 つの策を上申している。本国に送り返すのが上策(難しいように見えるがやりやすい)、囚として助けるのが中策(易しく見えるが難しい)、殺すのが下策(易しくみえて易しい)。幕府は中策をとって、切支丹屋敷に幽囚した。

### 嵐山光三郎「追悼の達人」(新潮社)

明治・大正・昭和の作家 49 人(正岡子規から小林秀雄まで)を没年順に並べた「追悼」に関する労作である。1999 年に出た本で、神保町でみつけた。嵐山は 5 年間にわたって作家の追悼文ばかり読んできたと「あとがき」で述懐する。こういうテーマの本は見たことがない。実に面白かった。

追悼にはナマの感情が出る。依頼されるのは突然であるから、準備も無く一気に書き上げるから、油断するのである。そして追悼は思い入れが入るし、後世に文献として残るとは思わないから、本心が出るのである。

- ・ 弔辞の達人。正岡子規。川端康成の弔辞は一人一人への弔辞の文体を変えた。「追悼は川端」という相場があった、
- ・ 追悼の達人。夏目漱石。三島由紀夫。

世間に認められるのが、死後のことがよくある。友人が絶賛したり(草野心平が宮沢賢治を世に出した)、後に全集がでたり(石川啄木)、そういうことがキッカケとなって、有名になることがある。意外なのは、鷗外の小説は、存命中は売れなかったようで、売れたのは死後に著作集が出てからであった。谷崎潤一郎が大谷崎と言われるのは死の翌年から全集が刊行されてからだ。

文士はうまい追悼文を書く。演出家は偉そうな追悼文を書く。興行主は如才のない追悼文を書く。旧友は若き日を語る追悼文を書く。役者は追悼文を書くのに苦労する。

若く死んだ天才は、その時代の大家からの追悼を得ることができる。

死んでから人気が出る作家には優秀な弟子達がそろっていて、一斉に美しいエピソードで飾ってくれる。漱石はその最たる人であり、弟子がいなかったのは田山花袋だった。岡本かの子は、一平と太郎によって美化され、伝説化した。

人気のあった漱石への追悼句は 500 余句あった。

与謝野晶子は妻を亡くした有島武郎に言い寄った。

芥川の自殺は作家達へ追悼という宿題を残した。  
若山牧水は、全盛時に一日二升五合の酒を飲んだ。  
女にもてすぎた男はさげすまれる。  
歌詠みは追悼歌を詠む。弔電で故人を偲ぶのが礼儀だった。  
泉鏡花への追悼文はだれが書いても文学作品になっている。  
嫌われ者は長生きすると、斬られることが少なくなる。  
著名な文化人が死ぬと、国会本会議で追悼演説がなされていた。福沢と逍遙。  
情死、虐殺の場合は追悼文は難しい。  
有名人の多くは青山斎場だ。

2016年7月

矢部宏治「日本はなぜ、『戦争ができる国』になったのか」(集英社インターナショナル)

注目の論客・矢部宏治の「日本はなぜ、『基地』と『原発』を止められないのか」に続く衝撃の書・第二弾。

前作は、「沖縄」と「福島」に関する疑問を追いながら、戦後体制を検証した力作である。今作は、戦後史の中でも1945年の敗戦から1952年の平和条約締結までの米軍占領期の闇に迫った力作だった。

結論は、日本の現状は「戦後体制の継続」だったのでは無く、さらに悪い「占領下の戦時体制(戦争協力体制)の継続」である。

この体制の終焉は、日本人がきちんとした政権をつくり、占領下で始まった米軍の戦争協力体制をやめようとアメリカに主張すれば実現できる、という。

密約の4重構造は、平和条約・旧安保条約・行政協定・日米合同委員会(秘密協議)となっている。以下のように、二つの密約の体系がある。

基地権密約＝米軍が日本の基地を自由に使うための密約。日本の国土全体を米軍基地として自由に使う権利を持つための密約の体系。駐屯ではなく米軍を配備する権利を持つ。

指揮権密約＝米軍が日本の軍隊を自由に使うための密約。安保関連法によって、指揮権密約を残したままで日本が海外で軍事行動を行うようになると、日本の防衛とは関係ない場所で、米軍の指示のもとで軍事行動に従事させられる可能性が高まり、戦争の当事者になる可能性が飛躍的に高まる。

- ・ 「戦争になったら、日本軍は米軍の指揮下に入る」という密約を1952年に吉田首相が結んだ。
- ・ 米軍の指揮下でしか動けない。アメリカと敵対関係になったら何もできないしくみ。

- ・ 日本に返還したのは民政であり、軍政ではない。  
巻末の参考文献の主要なものを全部読まねばならない。

### 矢部宏治,須田慎太郎「戦争をしない国—明仁天皇メッセージ」(小学館)

矢部による「偉い人」の定義。

深い闇を体験し、その中でもがき苦しんだものだけが、長い思索ののち、光のような言葉をつむぎ出すことができる。そうした境地に到達できた人が「偉い人」だ。明仁天皇がそういう人だ。

この書では、明仁天皇と美智子皇后の歌と言葉が、須田慎太郎の写真とともに紹介されている。

明仁天皇

- ・ 外国(とつくに)の 旅より帰る 日の本の 空赤くして 富士の峯立つ(1995 年歌会始 沖縄の いくさに失せし 人の名を あまねく刻み 碑は並み立てり(1995 年)
- ・ 原爆の まが(禍い)を患ふ 人々の 五十年の日々 いかによりけむ(1995 年)
- ・ あまたなる 命の失せし 崖の下 海深くして 青く澄むみたり(2005 年サイパン島訪問)
- ・ 患ひの 元知れずして 病みをりし 人らの苦しみ いかばかりなりし(2013 年水俣病患者と面会)

美智子皇后

- ・ 今ひとたび 立ち上がりゆく 村むらよ 失せたるものの 面影の上に(2012 年・復興)
- ・ あづかれる 宝にもにてあるときは 吾子ながらかひな 恐れつつ抱く(1960 年・浩宮誕生)
- ・ 初夏の 光の中に 苗木植うる この子供らに 戦あらずな(1995 年・植樹祭)

### 荻原哲雄「社員参謀」(日本経済新聞出版社)

「人と組織をつくる実践ストーリー」とサブタイトルにあるように、組織開発の仕事の小説ばりのストーリーを用いて説明した労作である。

組織開発の暗黙知を、実践で使える組織論の形式知に変えるという難しいテーマに挑んだ書だ。著者の今までの膨大な経験が織り込まれている。

登場人物は、DJ社取締役・姿晋介、DJ社社長・檜垣真吾、DJ社組織開発室・本城恵美、外部コンサルタント・高杉正人。

私は主人公の姿晋介を自分に見立てて読み進めた。ビジネスマン時代の最後に遭遇した全社プロジェクト(全社の改革)の中心に座って切羽詰まったことを思い浮かべながら姿の動きや気持ちに寄り添いながら楽しく読んだ

ライバルの檜垣は、当時の主流派。本城は部下たち。高杉は支援してもらったコンサルタント。こういう見立てで、当時を思い出しながら、内容を吟味してみた。

この著者は「バインディング・アプローチ」と説明している理論を小説仕立てで展開している。トップダウンとボトムアップを統合する方法である。この理論には、大事なキーワードがいろいろとち散りばめられているのだが、数年間血みどろの戦いを経験した者として改めて当時を振り返ると、理論を知らずに、その通りに実践したのだというように思った。

当時の私は「トップと現場を握って改革を推進しよう」と考え、大海原で航海術を編み出しながら目的地にたどり着いた。社長直轄の組織であり、お客様の声を誰よりも深く分析し、サービス現場とのコミュニケーションを密にしながら、全社を引っ張っていった。当然のことながら、様々な困難に巻き込まれたが、良きチームワークを土台に大組織の改革という仕事に挑んだ。このプロジェクトは、著者によればバインディング・アプローチであったということなのだろうが、それを現場で、自分で開発しながら仕事をしたということだろう。

その立場からこの書を読むと思い当たるフシが多い。ややきれいに成功しすぎの感もあり、この書を読んでそのまま実行できるかという問題はやはり残るが、この考え方には担当者は示唆を受けるだろう。

ビジネスマン時代、私は自分を「参謀」として位置づけていた。司令官よりも参謀という役割に関心があった。労働組合対策担当、メディアに向けての広報マン、大組織の内部広報の責任者、そして全社改革のキーマンというキャリアで、参謀としての実績を重ねた。そういう視点からみると、この「社員参謀」というこの書のタイトルにも納得がいく。

自分の属す息苦しい組織を改革しようと志す人には、この応援歌の一読を勧めたい。

### 嶋聡「最強経営者の思考法」(飛鳥新社)

客員教授の嶋さんから送っていただいた本。身近に接した松下幸之助と孫正義から学んだことを書いた本。

以下、気に入った言葉。

### 孫正義

- ・ ニッチを狙え、という人はバカ。私は 30 年後のど真ん中のど真ん中を狙った。
- ・ 新規事業を始めるときには、最初に必ず、私がグループ内で一番の専門家になる時期がある。
- ・ 成功したければ「運のいい人」と付き合い。
- ・ 髪の毛が後退しているのではない。私が前進しているのである。
- ・ 時代は追ってはならない。読んで仕掛けて待たねばならない。

### 松下幸之助

- ・ 指導者は地位が高くなればなるほど謙虚でありたい。
- ・ すべての人を自分より偉いと思って仕事をすれば、必ずうまくいくし、とてつもなく大きな仕事ができるものだ。
- ・ 寸分の隙もなく、一所懸命やっているけれども、余裕綽々としている。これこそ王者の姿だ。
- ・ 衆知を集めて、事を決するということと、多数決によって、事を決するということは、まったく異なることである。

### 楡周平「プラチナタウン」(祥伝社)

出世街道からはずれた総合商社・四井商事部長の山崎は、気がついた時には膨大な負債を抱えた故郷・宮城県の緑原町の町長を引き受ける羽目になった。ひねり出した財政再建の道は、老人向けテーマパークタウンの誘致だった。そのビッグプロジェクトに成功するまでを描いた、提案型の小説だ。

3 万坪の遊休地にシルバータウンでも、ゴールドタウンでもなく、さらに上のプラチナタウンが出現する。

「老人介護と若者の雇用の結合」がテーマだ。ここには、地方創生のヒントがある。

- ・ 2LDKタイプで、入居金 1000 万。完全介護のワンルーム対応は 400 万。月額管理費 10 万円。食費 4 万。都市部にすむリタイヤ組。リバースモーゲージ。
- ・ 共有棟: 寿司屋、レストランカフェ、ディスコ、ライブハウス、美容室、理容室、ショッピングモール、、、。近所には、総合病院、屋内プール、スカッシュ、テニスコート、ゴルフ場、植物園、岩名釣りのできる川、リンゴのオーナー、陶芸、手芸、絵画、園芸、農園、、、。
- ・ 夏休みや冬休みは家族そろって過ごせる別荘に。



## 矢島裕紀彦「夏目漱石 100の言葉」(宝島社)

漱石が弟子たちに手紙で語った人生訓。漱石は良き先生だった。人生の教師だったから、慕うものが多かったのだろう。その態度が文豪という地位を与えた。

- ・ 百年の後、百の博士は土と化し、千の教授も泥と変ずべし。余はわが文をもって百代の後に伝えんと欲する」(森田草平宛て)
- ・ 私はこの自己本位という言葉をも自分の手に握ってから大変強くなりました。「私の個人主義」から)
- ・ 余は余一人で行くところまで行って、行き尽いたところで斃れるのである。それではなくては真に生活の意味がわからない。(狩野亨吉宛て)
- ・ ああここにおれの進むべき道があった！ようやく掘り当てた！こういう感嘆詞を心の底から叫び出される時、あなた方ははじめて心を安んずることができるのでしよう。(学習院での講演)
- ・ だから人を啓発する」ということは、先方で一歩足をこちらの領分へ踏み込んだ時に手を出して授ける時に限る(漱石の教育論)
- ・ 君が生涯はこれからである。功業は百歳の後に価値が定まる。百年の後、誰かこの一事を以て君が煩とする者ぞ。(森田草平宛て)
- ・ 君弱いことをいってはいけない。僕も弱い男だが弱いなりに死ぬまでやるのである。やりたくなくなつてやらねばならん。(森田草平宛て)
- ・ 僕は死ぬまで進歩するつもりでいる。君なども死ぬまで進歩するつもりでやればいいではないか。(森田草平宛て)
- ・ 面白き中に面白からぬことのある浮世と思うが故にくるしきなり。生涯に愉快なことは沙の中にまじる金の如く僅かしかなきなり。(妻・鏡子宛て)
- ・ 敬服しました。ああいうものをこれから二三十並べてご覧なさい。分断で類のない作家になれなす。(芥川龍之介宛て)
- ・ 天下は太平である。ユックリと鷹揚に勉強してエライ者になって、名前を後世に御残しなさい。(行徳二郎宛て)
- ・ 吾人の生涯中もつとも謹慎すべきは全盛の時代に存す。(高浜虚子宛て)
- ・ 僕は十年計画で敵を斃すつもりだったが、近来これほど短気なことはないと思つて百年計画に改めました。百年計画なら大丈夫、誰が出て来ても負けません。(高浜虚子宛て)
- ・ 凝ったなりをして、そうして凝ったところを忘れてるのがいいじゃないか。(森田草平宛て)
- ・ 隣近所の賞賛を求めず。天下の信仰を求む。天下の信仰を求めず。後世の崇拜を期す。(森田草平宛て)
- ・ 人間はね、自分が困らない程度内で、なるべく人に親切にしてみたいものだ。「三四郎」)

- ・ 自己の天分のありたけを尽くそうと思うのである。(新聞のエッセイから)
- ・ 女性の影響というものは実に莫大なものだ。
- ・ 愛嬌というのはね、——自分より強いものを倒す柔らかい武器だよ。(「虞美人草」)

こう並べてみると森田草平宛ての手紙の言葉が多い。森田は漱石がもっとも愛した弟子だったのではないか。

### 蓮実重彦「伯爵夫人」(新潮社)

「エロス X 戦争 X サスペンス 世界の均衡を揺るがす文学的事件！」とオビにあるように、元東大総長が書いた衝撃の書だ。三島由紀夫賞の受賞にふさわしいと思う。

5月に都内で開かれた受賞記者会見で80才の蓮實は「まったく喜んでおりません。はた迷惑な話だと思っております」と受賞の感想を不愉快そうに述べ、報道陣からの質問には「馬鹿な質問はやめていただけますか」などと繰り返す場面もあり、会見場は異例の重苦しい雰囲気包まれた。

「お読みになってくださったんでしょうか？」

という記者に対する質問は強烈だ。記者たちの無教養がさらされた。

最後のページが「帝國・米英に宣戦を布告す」という、夕刊の一面で終わっている。この物語は昭和の戦争の前夜が舞台である。

三島由紀夫や吉田健一と思しき人物もわずかだが登場する。エロスの小説、純文学の小説、あるいは教養小説でもある。仕掛けの多い作品だ。

女性に人気があるだろう、と蓮見は語っている。

### 邱永漢「食は広州にあり」(中央公論社)

台湾に生まれ、東京帝大で学び、広州美人を娶り、白亜の洋館に在り、自ら包丁を手にする邱永漢の美食に関する蘊蓄を堪能した。

「解説」で丸谷才一が食べ物に関する傑作を4冊挙げている。その中の一冊だ。他は、木下謙次郎「美味求真」。吉田健一「舌鼓ところどころ」「私の食物誌」。檀一雄「漂流クッキング」。

2016年8月

### 高橋洋一「数字・データ・統計的に正しい日本の進路」(講談社)

国の借金1000兆円。政府資産500兆円。政府関連組織資産は300兆円。ネット負債は200兆円。多くの資産は金融資産なので換金できる。日銀も含めた連結ベースの

ネット負債は 150～200 兆円。GDP 対比で 30-40%。米は 65-80%。英は 60-80%。日本の財政は悪くない。借金だけでの論議はおかしい。資産との見合いで考えるべきという主張で説得力がある。

他にも常識を覆す論考が多い。

### 宇野常寛編著「静かなる革命へのブループリント——この国の未来をつくる 7 つの対話」(河出書房新社)

大分市美術館でチームラボの企画展を見て、率いる 1977 年生まれの猪子寿之の世代に関心が湧き、読んだ。

1978 年生まれの注目の評論家・宇野が主宰する批評誌「PLANET」の対談を加筆したものだ。

- ・ 根津孝太(1969 年生):デザイナー・クリエイティブコミュニケーター。
  - ・ 「自分が何を生み出して、関与しているか」「プロダクトアウト」
- ・ 吉田浩一郎(1974 年生):(株)クラウドワークス社長。
  - ・ 「サラリーマンとフリーランスの比率を大きく変える」「核人材は社内、プロジェクトはクラウドソーシング」「ゆるくつながる仕組み」「年収 500 万の人を 1 万人つくる」
- ・ 駒崎弘樹(1979 年生):社会起業家。NPO法人フローレンス代表理事。
  - ・ 「自分の事業で目の前の人を助けて成功事例をつくりロビイストとして制度に接続する」「体制をハックしてカイゼンしていく」「政策を売る」
- ・ 門脇耕三(1977 年生):建築学者。
- ・ 猪子寿之(1977 年生):デジタルクリエイター。チームラボ代表。
  - ・ 「アートによって「カッコいい」という概念のバージョンアップさせ社会を変えていく」「21 世紀社会のイメージは日本を含むアジア的なものに対する回答」「日本は非実在のものをコンテンツ化してきた」「ハイクロリティのグローバル層とロークオリティのコミュニティ」
- ・ 尾原和啓(1970 年生):楽天(株)執行役員。
  - ・ 「メディアの肥大に対抗できるのはコミュニティ」「職業、保険、医療といった生活サービスを民主化する」
- ・ 落合陽一(1987 年生):メディアアーティスト。
  - ・ 「3 次元空間でのオンピュータグラフィックスの実体化」「仮想現実(VR)から拡張現実(AR)へ」「人間と現実との関係を変えるテクノロジーの発達」「宇宙に出るとある一つの能力が開花し人類は進化する」

それぞれ個性的な、未来プロジェクトを自身でハンドリングしている人たちだが、彼

らは互いに刺激をうけながら一緒にさまざまなプロジェクトを立ち上げている。ウェブ共済保険、東京オリンピックの理想プラン、ものづくり2.0、、、。

後書きで宇野はこういった活動に参加して欲しい、具体的にコミットして欲しいと結んでいる。

ここには未来が確実にある。

### 白井聡 「戦後政治を終わらせる」 (NHK出版新書)

安部首相は「戦後レジームの死守」を強行。本書は「戦後レジームからの脱却」を目指す。

序章:55年体制の崩壊の後継体制が出てこない。その一因は55年体制の本質の理解が不十分であったからだ。

- ・ 戦争や経済崩壊というハードランディングではなく、自らの手で改革を成し遂げ社会と政治を変化させるソフトランディングによって戦後レジーム(永続敗戦レジーム)を実現すべきだ。55年体制とは東西冷戦構造の日本版だ。

第1章:55年体制の本質と崩壊後の新体制の失敗の連続。戦後レジームの根幹は、敗戦と冷戦によってもたらされた特殊な対米従属だ。

- ・ 55年体制は米ソ戦争の代理戦争。

第2章:日本の対米従属の特殊性は「自国が発展するための手段として他国に従属する」のではなく、「従属するために従属する」ような自己目的化した異様な従属状態となったか。国内問題としての対米従属。

- ・ 永続敗戦レジームの主役たちは「対米従属を通じた対米自立」をやろうとした。GHQのGD(民政局—民主主義改革)とG2(参謀二部—冷戦構造野中で日本を利用)の逆転。
- ・ 占領期から60年安保闘争を「確立の時代」。90年の冷戦終焉までは「安定の時代」。90年代以降は「自己目的化の時代」。
- ・ 二重の法体系があるということは、日本国民には主権がないことを意味する。改憲・護憲にまえにそこが問われなければならない。
- ・ アメリカの二面性は「暴力としてのアメリカ(占領軍)」と「文化としてのアメリカ(ソフトパワー)」。本土は文化が主役になり、暴力は沖縄に移った。

第3章:自己目的化した従属である「経済的従属」と「軍事的従属」の展開をみて、日米安保条約の本質を明らかにする。日米関係における対米従属。

- ・ 日本はレーガンのソ連との軍拡競争を米国債をドル建てで大量購入によって支えた。その後、円高・ドル安でアメリカの借金は大幅に圧縮された、これが「マネー敗戦」だ。
- ・ 日本経済の停滞は超長期的な意味での資本主義の行き詰まりであった。

- ・ アメリカの経済的苦境の一因は対日貿易赤字だった。日本市場の閉鎖性が理由とされ、構造改革協議、金融ビッグバン、金融資本の移動の自由化などグローバル資本に有利な状況を作り出そうとした。政治権力と経済権力が一体となってこれを後押ししている。
- ・ 米軍は日本を守るために駐留しているという常識を吟味すべき。アメリカの「タダ乗り論」と日本の「番犬論」。日米安保のアメリカ参戦義務は緩い。自動参戦はしない。議会に諮ることが必要、グレーゾーンだ。在日米軍はアメリカの世界戦略の便利な手段だ。「世界の警察官」の活動を支える。そして危険な日本を押さえるための「瓶の蓋」だ。
- ・ 新安保法制は、対テロ戦争の主要プレーヤーに日本がなるということ。手続き論と本質論。「価値外交」で中国という共通の敵をつくりそれを後押しするのが本質。対中脅威論が軍事衝突になったとき、アメリカは参戦しないだろう。そのとき在日米軍は日本を守るためのものという日米安保の虚構性が露呈する。だからアメリカは戦争に結びつくことを避けたい。在日米軍は「永続敗戦レジーム」を守っている、具体的には対米従属利権共同体を守っている。

第4章:新自由主義という世界的文脈が日本に与える影響を分析。右傾化、反知性主義、排外主義などの危機的現は近代資本制社会の世界的な行き詰まりに関係。

- ・ 新自由主義は修正資本主義を否定する潮流だ。資本にとっての障害を力づくで破壊し、資本が自由に活動できる空間を拓く。民営化、資本移動の自由、福祉削減。労組など再分配削減に反対する勢力をつぶす。「包摂から排除へ」。国民統合の破壊を隠すために排外主義をあおる。ナショナリズムの安酒。国民がバカになってもらう、反知性主義の空気の万苑。排外主義で、自己愛に耽溺する、インスタントナショナリズムの大衆。資本は国家に寄生し国家の政策を左右。大衆には「底辺の競争」を押しつける。

終章:ポスト55年体制構築のための根本原則を指摘。

- ・ 民主党政権の失敗の本質は「覚悟」の不足だった。
- ・ 第二自民党ではなく、新自由主義を打倒する勢力として結集が必要。「オール沖縄」が示唆を与えてくれる。沖縄は日本の縮図。政治的には最先端。沖縄は「永続敗戦レジーム」の外部にいる。
  - ・ TPPも永続敗戦レジームを維持するもの。日本を収奪対象に。健康保険問題。100兆円市場。
  - ・ ポスト55年体制の政治は、「国家は国民に優越する」という原理の勢力を一掃するものでなければならない。
  - ・ 近代的原理(基本的人権・国民主権・男女平等、)という戦後憲法を徹底すべきだ。
- ・ 「アメリカの核の傘の下日本」という前提を取り払った国際関係の構築。

- ・ 奴隷根性から脱却する精神革命を。

### 三田完「不機嫌な作詞家 阿久悠日記を読む」(文藝春秋)

日本が生んだ最高の作詞家・阿久悠(1937年生まれ。享年70歳)が1981年1月1日から22007年まで26年7ヶ月にわたって毎日書いた、あるいは編集した日記をすべて読んだ筆者は、阿久悠をマネジメントするオフィス・トゥー・ワンで亡くなるまで15年間そばにいた人だ。

今日は、「日記」という観点からのメモ。

- ・ 一日一ページ。身辺雑記、仕事のメモ、ニュース、本や新聞の情報、アイデア、箴言。一日一時間。サインペン。
- ・ 世界情勢から国内の事件、スポーツの結果から記憶に残る言葉、自分の考えと行動を同格で書くというスタイル
- ・ 永井荷風、山田風太郎、古川ロッパ、。。
- ・ 鴨下信一「面白すぎる日記たち」(文春新書)
- ・ 百メートル競走のテープがゴールだと思っている選手と、3メートル先がゴールだと信じてつき進む選手では、勢いが違う。千分の一秒速い。
- ・ 「涼しい顔の時代」イチローとか野茂とか、遠くから見ると涼しげ、アップで見ると汗みどろ。
- ・ 「鳥獣戯画」600枚、年末メ切。これで絶対に直木賞をとる!
- ・ 「なんともしめっぽい文士雰囲気たちこめ、小説は書くも、小説家になるべきでないと思う。音楽、放送界は「」まだVIVID。負けるわけがない。」
- ・ 「母は、学歴はないし 教養もなかったが 常識はあった」
- ・ 「夢は碎けて 夢と知り 愛は破れて 愛と知り 時は流れて 時と知り 友は別れて 友と知る」

明治大学文学部の卒業論文「和泉式部」の指導教授は柴生田稔だったことに驚いた。柴生田は斎藤茂吉の高弟。私の日航時代の上司は柴生田稔の長男だった。つまり阿久悠は斎藤茂吉の孫弟子でもあったのだ。

私のこのブログ日誌「今日も生涯の一日なり」は、ほぼ12年書き続けている。阿久悠の記録に追いつくには後14年以上の歳月が必要だ。

阿久悠日記は計算すると9700日ほどになる。それでは私は3メートル先の1万日を目指すことにしようか。

「千日の稽古をもって鍛とし、万日の稽古をもって錬となす」(宮本武蔵)

### 桐野夏生「猿の見る夢」(講談社)

この作家の本はよく読んでいます。ファンの人でもある。「東京島」「ナニカアル」「バラカ」などは、この作家がただ者ではないことを十分に教えてくれる。ただ、「抱く女」やこの「猿の見る夢」は、あまりにも主人公を戯画化しすぎており、違和感を感じた。

この本は「還暦」「定年」「老後」などを扱っており、確かに現代社会を照射はしている。しかし企業内部の暗闘を描いているのだが、男たちの類型化がはっきりしており、またや感情の揺れがあまりにも現金すぎる。終わり方にも救いが無いのも残念だ。

こういうテーマでは最近では内館牧子「終わった人」が素晴らしかった。終わった人は、実は今からの人であった、という救いのある物語だった。

桐野夏生という作家には、もっと期待したい。

### 別冊宝島編集部「田中角栄 100の言葉」(宝島社)

100の名言の中から、気に入った言葉をピックアップ。

- ・ 相手の目を見て大きな声できちんと話せ。
- ・ 肝心なのは大事を任せられる人を見つけることだ。
- ・ 大事なのは数字と事実だ。
- ・ 初めに結論を言え、理由は3つまでだ。この世に3つでまとめきれない大事はない。
- ・ できることはやる。できないことはやらない。しかし、すべての責任はこのワシが負う。以上！
- ・ 名指しで批判はするな。叱るときはサシのときにしろ。ほめるときは大勢の前でほめてやれ。
- ・ 企業の社長になったら、できるだけ早く大きな仕事をやるべきだ。
- ・ グレーゾーンが一番広い。真理は常に「中間」にある。
- ・ 賢者は聞き、愚者は語る。もっと若い連中の話を聞こう。
- ・ 女は一度これと決めれば動かない。候補者の周りに女が群がれば間違いなく勝つ。
- ・ 努力と根気、勉強、こういったものが運をとらえるきっかけになる。
- ・ 聞く人が「今日は良かったな」と思う話をする。それが本当の雄弁というものだ。
- ・ 戸別訪問3万件軒、辻説法5万回、これをやれ。
- ・ わが国の前途に思いをめぐらすとき、私は一夜、沛然として大地を打つ豪雨に心耳を澄ます思いであります。(退陣表明)
- ・ ゴルフを1日3ラウンドやる人間に怨念なんかあるものか。
- ・ 私の発想はガイリバー的なんだ。政治家にとって大切なのはものごとを鳥瞰的、俯瞰的に見るということだ。

- ・ 政治にはオール・オア・ナッシングというのではない。まず最善の策を考え、次に次善、三善の策まで考える必要がある。
- ・ 戦争を知っている世代が社会の中核にある間はいいが、戦争を知らない世代ばかりになると日本は怖いことになる。

### ロバートキヨサキ,白根美保子「改訂版 金持ち父さん 貧乏父さん」(筑摩書房)

著者は以下の考え方と手法で、アメリカで金持ちになり、47歳で引退し好きなことをすることができた人物。その経済的自由への道案内。若い人が読むと特に参考になるだろう。

- ・ 大きな自由と安定を保障された生活を楽しむ。経済的自由と大きな富。
- ・ ファイナンシャル・インテリジェンス(お金に関する知性)。
- ・ 会計学は長い目で見て役に立つ学問。貸借対照表や損益計算書という財務諸表を理解する。
- ・ 金持ちは資産を手に入れる。貧乏は負債を資産だと思ひこむ。
- ・ 資産＝収入を生み出すビジネス。株。収入を生む不動産、、、
- ・ 株式公開したばかりの小さな会社の小型株。1年以内に売却。逆指値の指示なら損をしない。
- ・ 不動産は、小さい物件からだんだん大きな物件に買い換えていく。長くて7年所有する。
- ・ 会社は金持ちを守る。税率が低い。経費(旅行・車・スポーツクラブ会員権・食事、、、)を収入から差し引くことができる。
- ・ 勤労所得を、不労所得とポートフォリオ所得に変える能力が鍵。
- ・ 「稼ぐ」より「学ぶ」ことに重点を置いた就職。
- ・ 十分なお金があったら、私は何をするだろう？
- ・ お金について学ぶ方法
  - ・ セミナーに出席。少なくとも2日間続くもの。集中。
  - ・ CDやオーディオブック。何度も繰り返し聞く。
  - ・ 新聞やインターネットで面白そうな講座を探す。
  - ・ ゲーム「キャッシュフロー101」
  - ・ <http://www.richdad-jp.com>

働くということの哲学、会社を利用して学ぶことの素晴らしさ、自由の定義、金を何に使うか、こういう点は記されていない。日本人に向けた、「幸せになる法」が必要だ。



## 村田沙耶香「コンビニ人間」(文藝春秋)

直近の芥川賞受賞作。150 ページほどの小著なので軽く詠むことができた。

「独身、処女、コンビニアルバイトという三重苦」の 36 歳の「私」は、コンビニ店員として生まれた。発達障害気味の主人公は、コンビニで働くことで、世界の部品になることができたと思っている。職場の中で、だんだん「正常で普通」な人たちから削除されていく。18 年間のコンビニアルバイトを辞めると、世界とつながらなくなる。24 時間、コンビニとつながっているから日常がコントロールできていたことがわかる。基準を失ってしまい、生活は乱れる。

そして最後にお客としてコンビニに入ると、生き生きと自分が蘇る。「コンビニの「声」が聞こえる」「コンビニからの天啓を伝達しているだけなのだった」「私は人間である以上にコンビニ店員なんです」「私はコンビニ店員という動物なんです」

文春の「芥川賞選評」では、「小説のおもしろさのすべてが、ぎゅっと凝縮されている」「傑作」「上質のユーモア」「異物を排除する正常さの暴力」人々の怪しさが生々しく見えてくる」「独特のユーモアと描写力」「おそろしくて、可笑しくて、大胆で、緻密」と高く評されている。

異物から見た正常な社会の異常さがあぶり出されている作品だ。世界に合わせようと努力している彼らから見ると、私たちの社会と日常と常識はおかしく見えるのだろう。違う世界からみた私たちの世界の姿は、奇妙で滑稽だ。こういうタイプの若い人たちと接するとき、このことを意識したいと思う。

外国人からみた日本というような発想に通じる作品であり、逆転現象をユーモアで包んで見せた手腕を評価したい。面白いが、考えさせる作品だ。

## ケヴィン・ケリー,服部桂「インターネットの次に来るもの——未来を決める 12 の法則」(NHK出版)

今後 30 年を形成することになる 12 の不可避なテクノロジーの力について述べた快著。出版は 2016 年 7 月だから、2045 年あたりまでのインターネット以降の流れを予測した本。考え方を变えて、この波に乗らなければ、破滅が待っている。

「なっていく」「認知化していく」「流れていく」「画面で見っていく」「接続していく」「共有していく」「選別していく」「リミックスしていく」「相互作用していく」「追跡していく」「質問していく」「始まっていく」。

プロダクトはサービスやプロセスになっていく。

- ・ これから起業するためには、ただ、XにAI機能を付ける、オンラインの知能を加えるものを探すでいい。化学、法律、音楽、洗濯、マーケティング、不動産、看護、倫理、オモチャ、スポーツ。編み物、。
- ・ 21 世紀が終わるまでにいま存在する職業の 70%がオートメーションに置きかえ

られる。トラック運転手は人間ではなくなる。

- ・ 2050 年に一番儲かる職業は、まだ発明されていないオートメーションやマシンによるものだ。
- ・ ロボットやマシンと一緒に働くプロセスを最適化できた者が成功する。
- ・ コピーできないモノが希少価値を持つ。信用、ブランディング、バンド、講演、、、。
- ・ アートの民主化が進む。ミュージシャンでなくとも音楽が作れる。他の業界にも波及。
- ・ 優れたコレクションをキュレーションするユーザーが評判になり、商売できるようになる。
- ・ 所有権からアクセス権への転換。
- ・ Xのウーバー。花、芝刈り、往診、合法マリファナ、、、、。空いている資源とタウ買いたい人の組み合わせ。
- ・ シェアリングエコノミーはデジタル社会主義。国家は出てこない。
- ・ 今後 10 年で創造される仕事の量は、過去 50 年分を上回る。
- ・ すべての音楽、本、ゲーム、映画、文書がポケットに入る。クラウドで利用できる。そういう時代には道案内者が重要になる。
- ・ 影響力がキーになる。フィルタリング。生涯影響力、影響スコア、、、。
- ・ 経験の価値が上がる。
- ・ 組み換えることこそがイノベーションと富の源泉。
- ・ 自分のデバイスが感受性を持つ。筋肉、聾啞者、麻痺、、、。
- ・ 数値を使うことで定量化された自己を確立できる。セルフトラッキング。パーソナリズされた錠剤製造麻疹、N=1の世界、
- ・ ライフストリームは個人用電子版人生日記になる。完璧なアーカイブ、モノのインターネットの衝撃、顧客データという金脈、犯罪が起こる前の犯人の逮捕、
- ・ 共監視社会。
- ・ 量が質を変える。
- ・ 遊びと仕事の合体。見て、調べ、訊いて、質問し、反論し、飛び込んで、メモを創り、ブックマーク、、。とにかく自分なりに始める。新しいあり方—波を乗り越なし、飛び込み、駆け上がり、飛び回り、つぶやき、新しいことに難なく入り込み、白日夢を見て、あらゆる事実疑問を抱く。なみがしらと同じ早さで流れていく。
- ・ 世界脳。シンギュラリティ(特異点)、

### 寺島実郎「中東エネルギー地政学」(東洋経済)

1973 年に早稲田大の修士を卒業し、三井物産に入社して以来、イランでの IJPC プ

プロジェクトをきっかけに中東、アメリカを中心に欧州など、世界と深く深くかかわってきた寺島が、自身が関わってきた世界との関連で自己を語っている。

戦後、海外派兵をしなくなった日本で、ピーク時は 3500 人もの邦人がイランで働いていた戦後最大の海外プロジェクトである IJPC プロジェクトは、イラン革命、イラン・イラク戦争の荒波に翻弄され、潰れ三井物産は危機に陥る。中東の専門家との不在とアラブ筋の情報に偏った世界観で無謀に推進したプロジェクトに取り組む中から、イスラエル、そして強いつながりを持つアメリカ、そして欧州の目線へと寺島の視界は広がっていく。そして日本の立ち位置と未来へ向けての構想を描く。その過程を誠実に記して深い感銘を受ける本だ。

この数十年の誠実な知的活動と人脈形成の中ではぐくまれたインテリジェンスが、現在の旺盛な知的活動を支えている。

読者は寺島の経験を追体験することで、日本人のブラックボックスであった中東と、石油を中心とするエネルギーから見た戦後日本の歴史の全貌を見ることができる。また、これからの日本のエネルギー政策のあり方、中東との関わりのあり方について、方向感を確認できる。

世界が近代に移行するきっかけとなった 400 年前のウェストファリア条約から大転換期である現代という視座から、宗教対立の復活、グローバル・ジハードの展開、エネルギーとしての原子力の扱い方、失敗の続くアメリカの外交政策など、現代を動かす重要な要素のそれぞれがどう絡み合っているかを読み解いていく名著だ。

中央公論の寺島論文「我ら戦後世代の坂の上の雲」を読み衝撃を受け、その数年後に偶然本人と接触し、それ以来 30 数年が経った。この間、私は東京、ニューヨーク、ワシントン、仙台、東京で寺島ウオッチャーとして並走してきた。その間に、聞いたこと、見たことなど、思い当たるところが多い。

仕事に真正面から取り組み、苦闘する中から、知的巨人が誕生する物語である。自分史と戦後史、そして世界史をきっちりと関係づけた奥行き深い本となっている。

今日はまず第一弾として、インテリジェンスを獲得するために寺島がどのような心構えと方法で迫ったかをピックアップしたい。

- ・ 孤独なフィールドワークの積み上げと、文献研究が視界に化学反応を起こした。
- ・ 「坂の上の雲」から 7 年間、論考を書くことをやめて、沈黙せざるを得なくなった。
- ・ 教養を高めるための情報とサバイバルファクターとして死にもの狂いで収集・分析している情報は別物ということに気づく。物事は色々な要素の相関の中で多面的・重層的に考えなければ本質には迫れないことを思い知る。
- ・ 知的三角測量。
- ・ イスラエルの史跡巡り、色々な人々との話し合い。

- ・ 空港ではその空港が世界のどの空港とつながっているかを確認する。二国間と二都市間の親密度がわかる。
- ・ 出張の前に徹底した準備。書籍、文献、論文、歴史書。調べればわかるようなことは事前に頭に入れておくのは必須。複眼的視座の構築。問題解決のために本当に価値ある情報を救いあげることができる知的能力がインテリジェンスだ。
- ・ 文献とフィールドワーク。自分の見たものを整理し、新しい時代認識、世界認識を踏み固めて発信する。
- ・ 会社の末席を担いながら、心中期すものがあるが何かが蓄積していく。
- ・ ワシントンの日本人の足跡を訪ね歩いた。
- ・ 私自身の立ち位置はどこにあり、どこに定めるべきか、自問自答を繰り返す。
- ・ 「マージナルマン」として生きる覚悟。組織に軸足を置きながら、組織を客観視する視界を持ち、内と外との緊張感野中で生き抜く人間。この緊張が課題解決に向けて創造を生む。
- ・ 定点観測。毎年最低 10 回の海外出張。70 ヶ国を訪問。大事な国には波状的に何度も足を運ぶ。
- ・ 自分の存在目的を見つめ、あるべき社会、実現すべき価値を求めて、筋道だった生き方で、自分の役割を果たす。
- ・ 九段の寺島文庫には地理・歴史、国際交流に関する書籍が 6 万冊。

寺島さんはその時々でよく考え抜かれた論考を発表する。その特徴は、問題の本質を吟味した上で、必ず解決の方向と具体策を提示することだ。

アメリカ大統領選などもずっとウオッチしており、まだどうなるかわからない時点で、例えばビル・クリントン大統領の出現を予想していた。だから彼の本に雑誌論文を収録するときに、そのまま修正を加えずに掲載するという離れ業ができることは驚くべきことだ。歴史の文脈の中で、対象の本質に迫っているから、彼の論考は迫力が違うし、見通しは正しいのだ。

例えば、この本で言えば、2003 年 4 月号の「世界」にイラク戦争が始まる前にどのように書いていたかをみよう。

「仮にイラクを短期間に屈服させ体制転換させたとしても、問題の解決に近づくであろうか。むしろ、逆であろう。多くのイスラム諸国の人々の米国への憎しみを増幅し、世界中の人々は米国への嫌悪を、軽蔑を深めるであろう。それは、イスラム原理主義をはじめとするさまざまなテロリストたちの温床となり、米国はいつ襲われるかもしれないという恐怖と不安の大国となるであろう」

実際、この予言の通りになった。当時、多くの外交と防衛の論客に対し、一人敢然と「これは間違った戦争だ」と立ち向かった情景を記憶している。そのアメリカ追従論者たちは今もテレビで恥ずかしげも無く発言している。寺島は「発言に責任を持ち、間違

った場合は退場を余儀なくされるのが常識」であるとし、検証報道、調査報道に大手メディアは踏み込むべきだと提案している

そして、日本の進路をどのように主張しているか。

安全保障。

「米国の核抑止力だけに期待するよりも、日本の原理原則としての「非核平和主義」に徹し、大量破壊兵器の廃絶を執拗に訴え続けるという「持たざる国の強み」を生かし切るべきであろう」

- ・ 「反米でも嫌米でもなく、日米同盟の重要性を評価する立場の人間こそ、在日米軍基地の縮小と地位協定の見直しを通じて日本の自立と主体性回復を志向し、「相互敬愛」に立った日米関係を構築すべきであるというのが主旨であり、同時に、たとえ段階的にでも、ロシア、中国、北朝鮮、韓国をも招き入れた北東アジアの多国間の安全保障のスキームを実現すべきというものである。」

エネルギー。

日本の「エネルギー戦略」については、「多次元的な賢さ」が必要であると言う。「平和利用に徹した原子力の技術基盤を維持し、この分野での国際的貢献を図るべきだ」と主張する。そのためには「国策民営の限界を認識し、国家が責任を持つ体制で、原子力を維持すべし」という見解である。

中東

「中東への関わり」については、粘り強く宗教間対話を呼びかけ、宗教的寛容に立つ世界協調を主導し、中東の安定と繁栄に協力する姿勢を貫けとする。

2016年9月

辻直樹「なぜ水素で細胞から若返るのか」(PHP新書)

ヘンリー・キッシンジャー,伏見威蕃「WORLD ORDER(国際秩序)」(日本経済新聞出版社)

ヘンリー・キッシンジャー「WORLD ORDER(国際秩序)」(日本経済新聞出版社)を読了。世界をまるごと見つめる目を感じる、92歳のキッシンジャーの遺言的著作。以下、その要旨。

グローバルな世界秩序は存在したことはない。オランダがスペインから独立し、ドイツとチェコを主戦場とした世界規模の30年戦争終結のために、1648年にウェストファリ

ア(ドイツ)で結ばれた和平条約が今の世界秩序だ。国家の主権という概念が確立。外交の枠組みの設計。国際法により調和を育む。秩序をともに模索。手続きのみ定めた。

この条約の考え方から、欧州内の釣り合いをとることに腐心したため、200年以上にわたり戦争を抑制できた。

- ・ 二度の大戦の結果、ヨーロッパにおける主権の概念と力の均衡の原理は後退した。冷戦期はソ連とアメリカの核戦力の均衡とNATO内部の均衡の上に立っていた。EUの誕生は地域全体の力としてウェストファリア条約の世界版において一個の集合体の役割を果たしている。
- ・ ロシアはウェストファリア条約による国際秩序に対する脅威だった。強いときには傲慢に、弱いときには弱みを押し隠す。
- ・ 中東。サウジアラビア。イラン。シーア派とスンニー派の1000年にわたる闘争。
- ・ アジア。第二次大戦後、アジアはウェストファリア条約の水準になった。
- ・ 日本。神の子孫の思想。独特な国民。形だけ取り入れて日本の様式に変える。秩序の頂点に天皇がいる。人間と神との仲介者。秀吉の明征服構想。徳川は引きこもり。明治維新で日清、日露戦争に勝利しウェストファリア原理に則り列強のひとつになった。その後、大東亜共栄圏という旗印で反ウェストファリア影響圏を構築しようとし、敗戦。新平和主義の姿勢をとり、不屈の精神で急激な回復を遂げ、経済大国になった。日本の今後は、日米同盟、中国の勃興に適応、国家主義的外交という3つの選択になる。指導層の判断応力が結果を左右する。
- ・ 中国。ウェストファリアの発想からもっともかけはなれていたが、現在では古代文明の継承者として、またウェストファリアモデルに則った大国として、両方の姿で復帰してきた。現代の世界秩序とどう関わっていくのか。毛沢東、トウ小平、江沢民、胡錦濤、そして第五世代の習近平。アジアに覇権が生まれるのを防ぐのがアメリカの政策。そのためには力の均衡とパートナーシップを組み合わせることが必要だ。
- ・ アメリカでは理想主義と現実主義がぶつかり合っている。アメリカと世界のために行動できなかったときには、どちらも果たせなくなるかもしれない。
- ・ 核時代にはどちらの陣営も大大量破壊兵器を使用しないような均衡が戦略的な安定となった。そしてインターネットは戦略やドクトリンを凌駕してしまった。多国間のルールをつくらないと危機が発生する。書物から得られる概念的思考が不足すると、指導者にふさわしい思考を衰えるおそれがある。知恵と洞察を身につけるには歴史と地理を深く理解し、当面の問題に集中しなければならない。
- ・ ウェストファリアのルールは公布されているが、法執行の力がないので、効果は十分に発揮されていない。国際秩序は正当性の定義の見直しか。力の均衡の大きな変動に直面する。21世紀の世界秩序の構造には重大な欠陥が3つある。国家は外から中からの挑戦を受けている。政治・経済機構は対立している。調整のた

めの有効な仕組みがない。したがって国際システムの再建が現代の最大の難問だ。今の常状態に即したウェストファリアシステムの現代化が必要だ。

2016年10月

### 安田峰俊「野心 郭台銘伝」(プレジデント社)

多摩大の非常勤をやっていただいている安田先生の10月3日発行の力作。

オビ

- ・ 「独裁、リストラ、嘘、、、中国との蜜月、強烈な身内愛、すべての謎を解き明かす渾身のドキュメント。シャープの救世主か、破壊者か」
- ・ 「シャープを買収した台湾企業・ホンファイの創業者、郭台銘(テリー・ゴウ)とは何者か」とある。

「現代のチンギス・ハン」「きょう雄(残忍で荒々しい人物)」「失言王」と語られる経営者の実像に迫った書である。

ホンファイ(鴻海)は創業以来の名称だが、中国を初めとする国際市場向けにはフォックスコン(富士康)で名が通っている。2016年のデータでは、フォーチュンのグローバルランキング世界25位。従業員は106万人。この企業のビジネスモデルは、大手メーカーの電子製品の製造過程を請け負う受託生産である。自前のブランドを持たずに他社からの発注を受け、自社工場において他社ブランドの製品を代わりに生産するビジネスだ。

多摩大で9月に訪問した本社機能を持つシンセンの龍華工場は、「郭台銘の紫禁城」とも呼ばれている。2.3万ヘーベの敷地内に数十万人が働いている大工場だ。特に中国では、30カ所以上製品工場が広がっている。私たちが見ることを許されたのは、ヒューレットパッカートの自動化されたインク生産工場だった。

取引先は超一流企業だ。アップル、ソニー・エリクソン、、任天堂、ノキア、デル、など、、、。実はこういった企業は、最先端のモノの仕組みを考える製品企画を担当するが、実際に具体的な形にする方法は台湾のホンファイが策定し、中国のフォックスコン工場で大規模生産するという構造になっている。この下流工程を握ったホンファイが力をつけてきた。この日影者、そして潜水艦のような企業がホンファイである。

話題になった日本の有力メーカー・シャープの買収劇は、製造段階の下請け企業がいつの間にか力をつけ、付加価値の源泉である最上流の先進国の大手メーカーを買収し、ブランドを手にしようとする物語なのである。

ホンファイとそのトップ・郭台銘は、シャープとの駆け引きで、恐るべき企業体として我々の目に映ったが、著者は、記者会見の場で直接、疑問をぶつけるなど、その交渉の過程も丹念に追っている。一方的にシャープが振り回されたのではなく、疑心暗鬼なのは、どちらも同じである。しかし、ともかくもシャープはホンファイの中に入った。シ

ンセンでの見学時に、副社長からシャープは中国の拠点をこのシンセンに移してきましたよと言われたことを思い出した。

シャープとホンファイの違いは何ですか、と私が聞いたところ、その答えは「スピード」であった。大阪に、シャープの創業者・早川徳次記念館を建設するという提案も買取条件に入っているとこの本に書かれている。

さて、郭台銘とはいかなる人物か。

1950年生まれ。フォーブスの世界長者番付で、205位で保有資産は6850億円。数年に一度以上のペースで「身の丈に合わない」ように見える投資を躊躇なく行い、決定した途端に恐るべきスピードで実行に移すという経営スタイルで、のし上がってきた人物だ。

公的な顔、私生活の顔を調べた結果、郭台銘には、大経営者が持つ美しい理想や哲学はないと著者は断定している。世界を変えようという志はみえない。

では、郭は何のために一日16時間も働いているのか。それは「野心」だ。世界中を飛び回り、この世の一切を腹に飲み込む。ホンファイという社名は「大きな雁は千里を飛び、海はすべての川を収める」から来ている。すべてを呑み込むという意味がある。ただ、世界を呑み込もうと動き回っている怪物企業という見立てである。

ホンファイについての情報はあまりなく、日本には馴染みの薄い企業なのだが、著者の熱意と努力も相当なものだ。10年前にフォックスコンに部品を納入するメーカーで短い新入社員時代を過ごしたと「おわりに」に書いている。その経験が基底となって、ホンファイへの鋭い観察が散りばめられた本書が誕生したというわけである。この本を書く理由があったことが納得できる。

本書は、シャープという日本の企業の将来を占っている。それに留まらず、日本企業と大中華圏(中国・台湾・ホンコン・シンガポール)との関係を考えるに際して大きな示唆を与えるであろう。力作である。

### 三木清「人生論ノート」(新潮文庫)

学生時代以来、久しぶりにこの名著を再読した。死。幸福。懷疑。習慣。虚栄。名誉心。怒。人間の条件。孤独。嫉妬。成功。瞑想。噂。利己主義。健康。秩序。感傷。仮説。偽善。娯楽。希望。旅。個性。以上が、テーマだ。

「解説」を書いている中島健蔵によれば、この小著は哲学者・三木清の結論とのことだ。三木清の哲学が、どのような主体から生まれたかを示すものであり、三木清という人間への入り口なのだ。

三木清は哲学者であると同時に文学者でもある。その資質の両方がうかがえる書き方だ。

「人生においては何事も偶然である。しかしまた人生においては何事も必然である。」



このような人生を我々は運命と称している。」

この言葉に続いて「偶然のものが必然の、必然のものが偶然の意味を持っている故に、人生は運命なのである」、そして「運命的な存在である人間にとって生きていることは希望を持っていることである。」

この言葉にはうならざるを得ない。

いくつか言葉を拾ってみた。他にも読み過ぎような言葉も、立ち止まってよく読むと深い意味があることも多い。この書を取り上げる人が多かったのは、小著であり、テーマが明確であるから、三木清という人物の考え方がよくわかるからだろう。中島健蔵のように三木の結論かも知れない。

- ・ 機嫌がよいこと、丁寧なこと、親切なこと、寛大なこと、等々、幸福はつねに外に現れる。、、鳥の歌うが如くおのずから外に現れて他の人を幸福にするものが真の幸福である。
- ・ 習慣を自由になし得る者は人生において多くのことを為し得る。
- ・ 義人とは何か、――怒ることを知れる者である。
- ・ 人は軽蔑されたと感じるとき最もよく怒る。だから自信のある者はあまり怒らない。、、ほんとに自信のある者は静かで、しかも威厳を備えている。それは完成した性格のことである。
- ・ 怒りを避ける最上の手段は機知である。
- ・ 幸福は各人のもの、人格的な、性質のものであるが、成功は一般的なもの、量的に考え得るものである。だから成功は、その本性上、他人の嫉妬を伴い易い。
- ・ 近代的な冒険心と、合理主義と、オプティミズムと、進歩の観念との混合から生まれた最高のものは企業家精神である。
- ・ 健康には身体の体操と共に精神の体操が必要である。
- ・ 知識人というのは、原始的な意味においては、物を作り得る人間のことであった。他の人間の作り得ないものを作り得る人間が知識人であった。
- ・ 希望に生きる者は常に若い。
- ・ 一つの所に停まり、一つの物の中に深く入ってゆくことなしに、如何にして真に物を知ることができるであろうか。
- ・ 旅することによって、賢い者はますます賢くなり、愚かな者はますます愚かになる。

### 朝井まかて「落陽」(祥伝社)

明治天皇を祀る明治神宮は1920年に鎮座祭を行った。神宮の森は、150年後の完成に向けてスタートしたのである。自然による遷移を繰り返し、2070年頃に完成を迎え

る、という壮大なプロジェクトだ。

このプロジェクトの主演は、東京帝国大学農科大学の本多静六博士、本郷高德講師、上原敬二技手の3人だ。30代半ばの本郷は明治19年生まれとあるから、私の母方の祖父と同じだ。祖父は東京師範学校を出て、内地や中国青島の中学校の校長を歴任した人だが、そう考えると親しみが湧く。

明治末年・大正元年(1912年)から、1920年までの物語である。狂言回しは、勃興しつつあった新聞界に籍を置く帝大出の記者であるが、この本の本当の主演は、明治天皇である。いや、天皇制という不思議な政体である。

ただ一人(明治天皇)の病状を巡って国民が固唾を呑んで見守ったのは有史以来初めてのことであり、二重橋前の広場に回復を願う人々が多数現れた。そして何かに祈っている。この姿には経験がある。それは昭和天皇のときと同じ風景だ。

文学者、思想家、社会主義者、ほとんどが天皇への尊崇を公言していた。「三四郎」で「この国は亡びるね」と言わしめたあの漱石にしても「天皇の徳を懐(おも)ひ、天皇の恩を憶(おも)ひ謹んで哀衷を卷首に展(しの)ぶ」で終わる淡々とした名文の奉悼文を書いている。日本人は、思想と魂とを分けており、国と天皇を別にとらえているのである。

こういう天皇とは誰なのか。

なぜ、皆、天皇をそうも尊崇する。慕うのか。

人々が何ゆえに帝を尊崇し、神宮を造営し奉りたいと願うのか。

明治を生きた人間にとって天皇への万謝の念、よくぞ天皇として全うして下さった。天皇自身の人生はどうだったのだろう。「己は誰か」と問うた磁気はなかったのだろうか。明治天皇は全国各地を巡幸している。それは、古代の「国見」という儀礼行為だったのではないか。土地や民草を見、聞き、知ることが「治(しろ)す」治めることだった。人々は帝のまなざしを受けることで「受け入れられ、守られている」と感じ、手を合わせる。支配でもなく、屈服でもない。日本独自の静かな響き合い方だ。帝が「民を守る」とは、その実情を知り、思いを寄せることであり、理解することなのだ。

生涯9万首の歌を詠んだ明治天皇。

「国のためたふれし人を惜むにも思ふはおやのこころなりけり」

かつてない変革期を迎えた日本に生まれ、近代国歌の君主になる運命を受け入れ、許容すべきものと、守るべきものの裁断を常に求められ、やがて大帝としての振る舞いや思慮を身につけた。日露戦争の頃から一切の遊びごとに関心を示さず、献身的に国事に傾注した。この国を一つにまとめ上げるための精神的支柱としての役割に徹し、自我を没し、君主としての生を貫いた。

本郷が「己が為すべきことを全うするだけです。明治を生きた人間として」と言い、壮大なプロジェクトの指揮をとっていくが、明治という時代は、あらゆる分野においてそれぞれがそれぞれのつとめを果たそうとした志した時代であったということだろう。

神宮林は明治天皇への郷愁であり、感謝である。己の為すべきことを全うした人を神にお戻ししようという営為である。祈りの森である。

明治天皇は君主として生きた。昭和天皇は君主と象徴の人生を生きた。現在の天皇は象徴の役割を果たしてきた。現在の天皇の生前退位の問題がクローズアップされているが、「天皇とは誰か」「象徴とは何か」という誰もが考えなくてはならないテーマが浮き上がってきたようだ。

そして、この本では脇役だが、私の関心の内にあるのは、本多静六博士だ。本多静六は、自己啓発分野でも偉人である。私も大いに影響を受けている。

「いまだ未熟なる日本林学ではあるけれど、無理な所に立派な神宮を造り上げて進ぜましょう」

「何としてでも、我々の手で天然に負けぬ人工林を造り出さねばならんのだ。でなければ今後林学は不要の学問として政府に排除されかねんぞ。日本の林学がまた、世界に後(おく)れを取る」

本多静六もやはり、己の為すべきことを成し遂げた人であった。

## リンダ・グラットン。アンドリュー・スコット「ライフシフト 100年時代の人生戦略」(東洋経済新報社)

100歳以上の人生を送った人をセンテナリアンと呼ぶ。

日本は現在 6 万人以上がセンテナリアンであるが、2050 年にはセンテナリアンは 100 万人を突破する。今先進国で生まれる子どもはセンテナリアンになる確率は 50% 以上、現在の 19 歳は 101-102 歳、29 歳の人 は 8-100 歳、39 歳は 95-98 歳、現在 59 歳の人 は 89-94 歳となり、半分以上が 90 歳を越える人生になる。

穏健な楽観主義者と自称する著者によれば、平均寿命は 110-120 歳まで上昇し、その後のびが減速するとのことだ。

未来を予測するには、今の 8 歳が 55 歳になった時も平均余命がいと変わらないという前提で導き出したピリオド平均寿命ではなく、啓蒙キャンペーンと医療の進歩によって平均余命が延びている前提で導き出した平均寿命である「コーホート平均寿命」で考えるべきである。

このセンテナリアン時代に、人生と仕事がどのようになるのかを経済学と心理学の観点から探った興味深い本である。

今後 10-20 年でアメリカの雇用の 47%が消失する恐れがあり、6000 万人が職を失う予測もある。新しい企業や産業はあまり人を雇わない傾向にあり、雇用は空洞化していく。

では、人間にしかできないこととは何か。

- ・ 複雑な問題解決に関わる能力で、専門知識、帰納的推論能力、コミュニケーション

ョンスキル。創造性、共感、。イノベーション精神。遊びと即興。

- ・ 対人関係と状況適応能力で、主に体を使う仕事で必要とされるもの。

よい人生とは何か。

やさしい家族、素晴らしい友人、高度なスキルと知識、肉体的・精神的健康に恵まれた人生だろう。そのためには、有形資産だけではなく、無形の資産が重要だ。それはスキルと知識という生産性資産(汎用的なスキルと良好な評判)、健康という活力資産(健康・友人・愛)、自分理解と人的ネットワークという変身資産(新ステージへの移行の医師と能力)である。

私たちは生涯を通じて新しいスキルと専門技能を獲得し続けるだろう。専門技能を身につけるのは1万時間必要といわれるが、一生は87万3000時間になるから、複数の専門を持てる。

- ・ アイデアの創造、直感的判断、チームモチベーション向上、意思決定スキル、思考の柔軟性、。教養と科学・技術。経験学習という学び方の比重。問題解決能力を持つ人物。強力な人間関係。
- ・ 長寿時代は健康の価値が更に高くなる。3分の2は生活習慣で補える脳を鍛える。
- ・ 前向きの親しい友人ネットワーク。
- ・ 余暇時間はレクリエーション(娯楽)から、リ・クリエーション(再創造)へ。新しいスキル・知識、人的ネットワーク、視点への投資。金融リテラシー。
- ・ 多くのステージと多くのキャリアを貫く一本の柱。アンデンティティ。
- ・ 探検者(エクスプローラー)。生涯を通じて探検と旅を続け、新しい経験を追求。
- ・ 特に楽しい活動:セックス、スポーツ、釣り、アートと音楽、社交、子どもとの遊び・会話・読み聞かせ、睡眠、協会通い、映画鑑賞、。
- ・ 何かに打ち込むこと。自己効力感と自己主体感。覚悟と努力。デジタルテクノロジーは100年ライフの学習のための頼もしい手段。MOOCsとの競争。

無形資産をどのようにマネジメントするかが、100年時代の真のテーマだ。

以上がこの本の概要と主張である。

さて、幸福について、「カネ・ヒマ・カラダ、そしてココロ」、そして自由の拡大がポイントだという考え方を私は持っている。

人生100年時代はヒマが大きく増える時代だ。それはカラダにも、カネにも、ココロにも大きな異次元の想定外の影響を及ぼすであろう。有形資産の代表であるカネ、肉体的健康という意味でのカラダに焦点が当たるだろうが、本丸は精神的健康という意味でのココロである。

この本で主張する無形資産である家族・友人・スキルなどは、インフラに過ぎないともいえる。長い時間を使って、人間は何をするのか。個人は何をするか。それが一人一人の真のテーマになるはずだ。

## 神渡良平「中村天風『幸せを呼び込む』思考」(講談社α新書)

先日、多摩大にゲスト講師で見た神渡先生の本。

著者は九大医学部中退で、記者などを経て作家になった。38歳、脳梗塞で右半身不随となるが、リハビリによって社会復帰する。安岡正篤、中村天風、森信三など、人物論に定評がある。

中村天風の言葉によって、著者も含めて人生が充実した人々の物語だ。

ここでは、この本に記載された天風語録を渉猟してみたい。

- ・ 思考が人生を創る！
- ・ 体は病んでも、心まで病まずな！
- ・ 常に心に感謝と歓喜を持って事に当たれば、宇宙のエネルギーが流入する。
- ・ 人々の心に勇気を与える言葉、喜びを与える言葉、何ともいえず、人生を朗らかに感じるような言葉をお互いに話し合うようにしよう。
- ・ いかなることがあっても、また、いかなることに対しても、かりにも消極的な否定的な言動を夢にも口にうるまい、また行うまい。そしていつも積極的で肯定的の態度を崩さぬよう努力しよう。
- ・ 心身を統一し、人間本来の面目に即した生き方、どんなときも、「清く、尊く、強く、正しい積極的な心」があれば、万物創造の力のある神韻標渺たる気と、計り知れない幽玄微妙な働きを持つ靈知が、量多く人間の生命の中に送りこまれてくるからである。
- ・ 俺は体が弱いと思つてりゃ体が弱くなる。俺は長生きできないと思つていりゃ長生きできない。俺は一生不運だと思つていりゃ不運になる。つまりあなた方が考えているとおりにあなた方にあなた方がしているんです。

## 鹿島茂「神田村通信」(清流出版)

神保町に住んでいる鹿島茂と逢坂剛の対談も含め、神保町の魅力が整理されている。

都心のど真ん中に移住した団塊世代の報告という趣がある。

- ・ 安くて便利な交通網:都内全域 30分。新宿 10分、渋谷 2分、銀座 8分、日本橋 5分。終電を気にせずに飲める。
- ・ 文化的アクセスの良さ:都心ライフは美術館巡りに最適。
- ・ 昼食時に街をぶらつく楽しみ:自在に時空間を動き回る散策。
- ・ 自家用車不要:レンタカーのヴィッツ一日 6700円。タクシーで 1500円でどこでも。

- ・ 仕事:大都会の孤独
- ・ 古本屋:魚山堂(写真本)。山猫屋(カルトな本屋)。海坂書房(時代小説)。
- ・ 喫茶:さぼうる。
- ・ バー:人魚の嘆き。
- ・ 食事:ボンディ、マンダラ(カレー)。キッチン南海。丸香(うどん屋)。アルカザール(ステーキ屋)。レストラン七條(エビフライ)。げんぱち(洋食)。

都心ライフの参考書。神保町の隣の九段によく行くので参考にして、鹿島茂のおすすめの古本屋や飲食店をひいきにしてみよう。

### 志村ふくみ「一色一生」(講談社学芸文庫)

染織家の名匠・志村ふくみは、すぐれた文章家でもある。

それを示したのが、大佛次郎賞を受賞したこの「一色一生」である。

「色と糸と織と」「一色一生」「糸の音色を求めて」「かめのぞき」「天青の実」と題する1章。「織 探訪記」「住まいと影」「今日の造形 織と私」「プレ・インカの染織を見て」「呉須と藍」「ルノアールの言葉」「老陶芸家の話」「蚕」「景色」と題する文章の並ぶ2章。

例えば「色と音」は、「今日は夕刻まで色とたわむれていた。」「話し合うような、たわむれるような、時には鍵盤をたたいて、余韻をたもしむような気持ちがするのである」「その色の一つ一つが純一に自分の色を奏でていることだ。色にも音階(色諧というべきかもしれない)があって、、、」「四十八茶百鼠」「その卓抜した感覚こそ日本人そのものである」「染めは色の純度を守るためにあるようなものだ」、、というような珠玉の言葉で連なっている。和歌的な感覚と洞察に満ちた哲学が込められている。

読者はこの名匠の染織の着物を味わうように、深い言葉の世界に引き込まれていく。

さて、しかし、この本では3章が心に残った。

それは、志村ふくみがいかに成立したかがわかる壮烈な自伝である。

養父母に育てられた志村は、出生への疑惑にさいなまれながら、18歳で実母のから打ち明けられ、その実母から機織り世界に導かれる。

昭和31年から32年にかけての「日記」が載っている。東京に夫と子供をの残して近江の実家に帰った。織物の修業にはげみ、幼子と暮らせる日を願った。32歳だった。

「死物狂いでこの道を行こう。」「流れに逆らって一人漕いで行かねばならない。まがうことのない破壊を一方で行いながら、孤立の陣をはってゆく。仕事すすべてだ。生きて、夫や子供と別れることが出来たのだから、これ以上辛いことはよもやあるまい。」

「ふっくらとした色の盛り上がり、きりきりっと全体の引き締まる色合、雪や、大地や、石の上の苔や、そのものの肌ざわりまで感じさせる色、落葉の色、葡萄の色、露草の

滴の色、物思わしげな色、艶やかな色、がっしりした色、無垢な色、小粋な色、ひと恋しい色、消え入りそうな色、日影の色、思い出の中に生きる色、夢の中でみた色、燃えている色、沈んでいる色、濡れた色、透けた色、何という色自体の多様さだろう、、、一つ一つをかけがいのない、納得のゆく色でこれからの人生を描いてゆこうと願う。」

木工家・黒田辰秋のアドバイスも圧巻だ。

「自分のように我がままで、怠け者で不器用な人間は、こつこつ仕事をしてゆくしかない、、、ただあなたがこの道しかないと思うならおやりなさい。まず自分の着たいと思うものを織りなさい。先のことは考えなくていい。ただ精魂こめて仕事をすることです。「運、鈍、根」とはそういうことです。何年も何年も黙々とひとりで仕事をつづけてゆけるか、中みがよっぽど豊かで、ぬきさしならぬことえでなければ続かないものです。」

車を下りたら猛烈な吹雪で一寸先もみえなかった。志村はその中を走りながら「仕事をしよう。仕事をしよう」と叫んでいた。

染織の世界で前人未踏の境地を開き、かつ内面世界を詩情豊かに綴っている志村ふくみの仕事は、多くの女性達に勇気を与え、日本の深さに思いを至らせる。志村ふくみの長い仕事に、文化勲章をはじめとする数々の名誉のある賞が与えられていることに深く納得する。

2016年11月

### 春原剛「ヒラリー・クリントン—その政策・信条・人脈」(新潮新書)

史上最も嫌われた女性と史上最悪の男の戦いとなったアメリカ大統領選。ヒラリーが勝ったらどうなるかを考えながら読んだ。

「健康」に問題を抱えていると思われるヒラリーは大統領選、そして世界一の激務に耐えられるだろうか。

### 平松洋子「野蛮な読書」(集英社文庫)

食や暮らしの分野で人気の著者の読書エッセイ集。

100冊以上を俎上に載せている。講談社エッセイ賞受賞作。

第2章「わたし、おののいたんです」を中心に読む。

対象の著者は、宇能鴻一郎、池部良、獅子文六、沢村貞子。紹介されている本で気になったものを以下にあげる。

- ・ 宇能鴻一郎。「鯨神」。「味な旅 舌の旅」。
- ・ 池部良。「風の食べ物」。「映画俳優 池部良」。「酒あるいは人」。池部良の手料理。「つきましては、女を」。「窓を開けると」。
- ・ 獅子文六。「てんやわんや」。「私の食べ歩き」。「飲み食い書く」。「好

- 食つれづれ草」。「食味歳時記」。「愚者の楽園」。
- ・ 沢村貞子。「貝のうた」「わたしの献立日記」老いの語らい。「老いの道づれ」。57歳から26年にわたる献立日記の存在が圧巻だ。
- ・ 山田風太郎。「あと千回の晩飯」。

### 西垣通「ビッグデータと人工知能」(中公新書)

冷静で中立的で本質的な洞察に基づく長期的な見通しに挑んだのが本書である。この本によれば20145年のシンギュラリティ(技術的特異点)は到来しない。人間に関する洞察、技術だけでなく文化的枠組みからの考察が不足しているのが、シンギュラリティを巡る議論にある。欧米のユダヤ・キリスト教では創造主が存在するという考えだから、機械が人間を越えるという時が来るという結論にいたる。

日本やアジアなどの多神教の国では、機械を相対的にとらえることができるからロボット(機械)との共生が今までも行われてきたし、これからも共存することができる。

文系と理系にまたがる総合的学問である「ネオ・サイバネティクス」からの視点。20世紀の客観主義の限界を超えて、主観主義の観点を加えた生命的な学問思想。

#### 人間

- ・ 柔軟で多元的な知的能力。状況に応じて臨機応変に問題に対処できる。
- ・ 現在の時点で判断。
- ・ 生物は流れゆく時間尾中で状況に対処しつつ自分を変えながら生きる動的な存在。
- ・ クオリア(感覚質)。感動、筆舌に尽くしがたい何か。
- ・ 生物は自律システム。自己循環的。
- ・ 閉鎖系。
- ・ 人間のコミュニケーションは詩的で柔軟な共感作用。
- ・ 目標設定には生物特有の価値観が必要。
- ・ 情報とは意味。
- ・ 全体知。

#### 機械

- ・ 設計された枠組みからはみ出せない。プログラムとはプロ(前もって)、グラム(書く)だ。
- ・ 過去にとらわれた存在。
- ・ 融通がきかないのは本質的な性質。
- ・ 再現性に基づく静的な存在。
- ・ 機械は他律システム。
- ・ 開放系。



- ・ 人工知能の疑似コミュニケーションは指令的で定型的な伝達作用。
- ・ 専門知。
- ・ 情報とはデータ。
- ・ 価値観には無縁。

AIではなくIA(知能増幅)。人手にあまる膨大なビッグデータを分析し、専門家にヒントとなる分析結果を提供しつつ、集合知の精度や信頼性をあげていくことが使命である。

具体的な個別実用テーマ(クルマの自動運転、介護ロボット。医療行為、金融投資)について、技術だけでなく、社会や人間性の観点から検討する以外にない。

AIは仕事を奪わない。近未来のホワイトカラーはIA技術を使いこなす能力が求められる。

人間にしかできない仕事とは何なのか。

人間は現在の状況に応じた柔軟な問題設定と情報の意味解釈によって生きていく自立的存在だ。

機械は指令通りのアルゴリズムで過去のデータを高速処理する他律的存在であり、過去のデータに基づく有益な専門的助言を与えてくれる。

仕事を奪われるのではなく、仕事の質が変わる。

若い世代は、アジア的多様な価値観を持つ理想主義が、しなやかで非抑圧的な 21 世紀を実現していくだろう。

### 黒田博樹「クオリティピッチング」(KKベストセラーズ)

黒田投手の安定した、質の高い投球の神髄が語られた本。

黒田投手は、とても偉い人だ。

- ・ 初球をストライクをとる。
- ・ コントロールがいいという錯覚をさせる。
- ・ あの辺に投げればいいと、思えば勝ち。
- ・ なにより「体」を最優先する。
- ・ 一試合一試合、これが最後の試合だ
- ・ 自分に課すハードルをちょっとでもいいから上げよう。
- ・ いいときこそ、兜の緒を締める。
- ・ 自分のコントロールできる範囲のことだけする。

## ドナルド・トランプ「トランプ自伝」(ちくま文庫)

単行本としては1988年に早川書房より刊行された。

当時トランプは42才。超高層ビルであるトランプタワーなどをつくり話題の主だった。

この本の最後に「さて、次は？」という文章がある。

「これからの二十年間の最大の課題は、これまで手に入れたものの一部を社会に還元する、独創的な方法を考えることだ。」「得意なことが二つあることがわかった。困難を克服することと、優秀な人材が最高の仕事をするよう動機づけることだ。これまではこの特技を自分のために使ってきた。これを人のためにいかにうまく使うかが、今後の課題である。」

そして「訳者あとがき」には、妻イヴォンヌの証言が載っている。トランプが2000年に著した本では、国家としての米国の貧困化が進むことや中流階級が消滅して格差が広がること、年金や社会保障の問題が深刻化することを指摘している。

伝記ではなく「自伝」には、自己評価率直に語れている。本人が自分をどういう人間かを語っているので、私は自伝を重視している。

さて、若きトランプは、自らをどのように評価しているのだろうか？

そしてどのような主義・信条を持っているのか？

30年近く時間が経った今日の時点で、その言動をながめるのは興味深い。

「いずれドナルドは他に分野に目を無欠でしょう。それは政治かもしれないし、何か別のものかもしれません。大統領選挙へ出馬することも絶対にないとは言い切れません」とこの最初の妻は見事に将来を見通していた。

- ・ 私は取引そのものに魅力を感じる。、私にとっては取引が芸術だ。、私はこれにスリルと喜びを感じる。
- ・ 私はだれかが自分に反対したことをいつまでも根に持ったりはしない。どんな時でも有能な人材を確保したいと思っている。
- ・ 昼食といっても、トマトジュース一缶だけだ。食事をしに外へ行くことはめったにない。時間がもったいないというのが主な理由だ。
- ・ 選択の余地はなるべく多く残しておきたい
- ・ 私はいい仕事をしてくれた人は裏切らない
- ・ 私は清潔であることにうるさい
- ・ 取材には、いつでも短時間で終わらせるようにしている。
- ・ ねらいを高く定め、求めるものを手に入れるまで、押して押して押しまくる。
- ・ 私は物事を大きく考えるのが好きだ。
- ・ 私はあまり高いリスクをおかさないように心がけている。
- ・ 私は自分で調査し、自分で結論を出す。一番望ましいのは優位に立って取引することだ。この優位性を私はレバレッジ(てこの力)と呼ぶ。

- ・ 記者たちとは正直に話すということだ。相手をだましたり、自己弁護しないように気をつける。
- ・ 人々の夢をかきたてるのだ。人は自分では大きく考えないかもしれないが、大きく考える人を見ると興奮する。良くしてくれた人には、こちらも良くする。
- ・ けれども不公平な扱いや不法な処遇を受けたり、不当に利用されそうになった時には徹底的に戦うのが私の信条だ。
- ・ 私は必要なことには金を出す、必要以上には出さない主義だ。
- ・ 本当の魅力は、ゲームをすること自体にあるのだ。
- ・ 私は人を判断するのが早いので、無能な者を長く雇っておかずにすんだ。
- ・ 私は酒をやらず、。
- ・ 単刀直入なやり方が最も効果があることが多いのだ。
- ・ あくまで粘るかどうかが勝敗のわかれ目になることが予想以上に多いのを知っていた
- ・ 私は多くの重要な仕事に女性を起用してきた。
- ・ 何も言われぬより悪く言われたほうがまだましだ、。つまり、論争の種になると売れるのだ。
- ・ 世界最大のカジノは、ニューヨーク株式取引所だ。
- ・ 状況が厳しい時のほうが、有利な取引ができる可能性が強いのだ。
- ・ 一番大事なものは信用である。
- ・ 自分の家族ほど心から信頼できる相手はいない
- ・ 費用を節約する方法は、いわゆるバリュー・エンジニアリングを応用することだ。
- ・ 競争会社から有能な人材を引き抜き、よろ:高い給料を支払い、その手腕に応じてボーナスやさまざまな特権を与える。
- ・ 私はこれまで、最高のものにしか投資しないことをモットーにしてきた。
- ・ そうそうたる顔ぶれの委員会と多額の手数料をとるコンサルタントがいくら協力しても、大した結論は出せない。
- ・ 一応あたってみるのが私の主義である。
- ・ ベストを尽くして、もしうまくいかなければ次の目標に移れ、というのが私のモットーだ。
- ・ 新聞はもめごとを好む。また大成功であろうと大失敗であろうと、極端な話が好きだ。
- ・ どんなばあいでも、仕事を遂行するのに必要なのはリーダーシップだ。私は一日としてリンクの工事の進行状況をチェックしなかった日はない。

## 星亮一「山川健次郎伝」(平凡社)

「星座の人」「フロックコートを着た乃木将軍」と呼ばれた教育者・山川健次郎の伝記。

会津藩の白虎隊から始まり、17歳でアメリカ留学、エール大学に学び物理学を専門とする。32歳で帰国後、東京帝国大学(48歳、52歳)、九州帝国大学(58歳)、京都帝国大学(61歳)の総長をつとめ、東京理科大の創設にかかわる。退官後も、武蔵高校(武蔵大学。73歳)、明治専門学校(九州工大)の校長、総裁をつとめた。1931年78歳で逝去。

物理学関係では、田中館愛橘、長岡半太郎を弟子として育てた。その流れが湯川秀樹、朝永振一郎につながる。男爵。

山川健次郎は、賊軍の会津出身であったが、人の縁といくつかの幸運に導かれて教育界に大きな足跡を残した。傑物であった兄の山川浩も東京高等師範学校の校長をつとめるなど、山川家は教育界に大きな貢献をしている。妹・捨松は大山巖夫人。

山川健次郎の人となり。

- ・ 清廉潔白。住まいは破れ別荘のごとく。宴会には出席しない。講演会では報酬を受け取らない。
- ・ 一つのことを成し遂げると、弟子に譲る。弟子が有名になる。
- ・ 全国各地の学校で講演。最多は1年間30回。一日3回。

山川健次郎の言葉。

- ・ 「およそ世の中で戦争ほど悲惨なものはない」
- ・ 「日米戦争などまったくばかげておる。そういうことをいう者は浅薄で思慮のない者どもである。日米双方にとってまったく益のないことであり、両国の識者が話し合うべきだ」

## 国重惇史「住友銀行秘史」(講談社)

話題の書である。

高収益で有名だった住友銀行の汚点となったバブル謳歌時代の裏で発生したイトマン事件の実相を、最も身近にいたものとして、1990年3月から1991年7月までの手帳日記で再現したノンフィクション。大企業の奥の院で志を果たそうとするビジネスマンの物語でもある。

著者は当時威力があった内部告発文書[「Letter」]を大蔵省、新聞社、行内、有力OBなどにばらまいた張本人であった。業務渉外部付部長として住友銀行内部との葛藤と、それにかからんだ伊藤寿永光、許永中らが起こしたイトマン事件の中心にいた一人である。銀行マンとしての首をかけた戦争であった。

あれから四半世紀が経って関係者は物故したり、第一線から退いており、迷惑がか

かることも少なくなったとして、関係者は、実名で登場しているから、少しでも関心のあった向きは、よく理解できる構造となっている。磯田一郎、巽外夫、西川善文、樋口広太郎、堀田庄三、土田正顕、坂篤郎、佐藤正忠、、、。

許永中がイトマンに絵を売り、その金でイトマン株を買い占めている。自分の金で乗っ取られているようなものだった。そういう構造で住銀が支援していた中堅商社イトマンが揺さぶられていた。

以下、銀行内部に対する著者の感想から。

- ・ 誰も引き金を引きたくない。
- ・ 住銀の内部は権力闘争の混じった統制のとれない悪循環。
- ・ 徹底した減点主義ノメガバンク。
- ・ バブルでゆるみ、浮かれ、タガがはずれていた。
- ・ 高い地位にある人間は自分から降りることができない。
- ・ 社内の勢力図が変わろうとすると、皆変わり身と逃げ足だけは速い。
- ・ 権力は周囲から腐っていく。
- ・ 何も決められない。
- ・ 怒りと焦れ、呆れを通り越して悲しかった。
- ・ 「権力の頂点にあった人物を引きずりおろすのは重いことだ。」「一日遅れたら、一ヶ月遅れたら、それだけどんどん損失が増えていく。」以下は、ようやく磯田会長の辞任、イトマンの河村社長を解任した後の著者の感慨。
- ・ 高揚感はまったくなかった。後味が悪かった。抜け殻のようになった。
- ・ 相変わらず人事ばかりを気にする空気が蔓延。
- ・ 人事の見立てほど虚しいものはない。
- ・ 皆、自分のことしか考えていない。いかに自分が安全地帯に逃げれるか。
- ・ 無力感。

著者はその後、本店営業第一部長、丸の内支店長、取締役を経て、住友キャピタル証券副社長、ネット証券社長、楽天副社長、副会長を経験。70歳になった今、新たな事業を始めている。

この本は、バブル期の裏面史を描いているが、また大企業の内幕と実態、その中で、保身でうごめく人々の群れの姿を写している。この描写された姿は大小を問わず多くの企業も同じだ。私もそうだったが、読者は自分の組織と自分を重ね合わせながら、身につまされるであろう。

2016年12月

渡部昇一「実践 快老生活――知的で幸福な生活へのレポート」(PHP新書)

40年前に「知的生活の方法」(講談社)で一世を風靡した当時46歳の渡部昇一は

今年 86 歳。この間、膨大な著作やメディアでの発言があり、私も影響を受けてきた。

年をとらないとわからないことがある、という。以下、新しい知見などをピックアップ。

- ・ 喜寿の 77 歳で 2 億円の借金をして巨大な書庫をつくり全蔵書を書棚に飾っている。音楽家となった娘や息子の高額な楽器を買うために若い頃から借金生活だった。
- ・ 金婚式は素晴らしい。50 年以上の記憶を二人で共有している人は配偶者しかない。
- ・ その健康法を実践している人が長生きしているものを選ぶにかぎる。
- ・ 午後 1 時間の昼寝
- ・ 塩谷信男先生の「正心調息法」。息を吸う・息を止める・下腹部に力を入れる・息を吐き出す・小さな呼吸を一つする。この動作を一日に 25 回繰り返す。
- ・ 真向法
- ・ 伊豆の石原結実先生の断食サナトリウム。人参ジュース。年 2 回。
- ・ 自分が居るべき場所にいると感じるのは、自分が築いてきた書庫兼書斎に入っているときである。
- ・ 文科系は蓄積。高齢者に適しているのは、修養、人間学がいい。
- ・ 「凡そ生氣ある者は死を畏る。生氣全く尽くれば、この念もまた尽く。故に極老の人は一死睡るが如し」(佐藤一斎「言志叢録」)。苦しまずに死にたいのであれば、最良の答えは「長生きをすること」に尽きるのではないだろうか。
- ・ 床暖房
- ・ 伊勢物語。万葉集。三国志(吉川英治)。中島敦「弟子」。百人一首。
- ・ カント「視霊者の夢」。パスカル「パンセ」。
- ・ 高橋是清。「仮にある人が待合へ行って、芸者を呼んだり、贅沢な料理を食べたりして二千元を費消したとする。、料理代となった部分は料理人等の給料の一部となり、料理に使われた魚類、肉類、野菜類、調味品等の代価およびそれらの運搬費並びに商人の稼ぎ料金として支払われる。、芸者代として支払われた金は、その一部は芸者の手に渡って、食料、納税、衣服、化粧品、その他の代償として支出せられる。、、、二千元を節約したとすれば、この人個人にとりては二千元の貯蓄が出来、銀行の預金が増えるであろうが、その金の効果は二千元を出ない。しかるに、この人が待合で使ったとすれば、その金は転々して、農、工、商、漁業者等の手に移り、それがまた諸般産業の上に、二十倍にも、三十倍にもなって働く」(高橋是清「随想録」) 岡本綺堂「半七捕物帳」
- ・ 幸田露伴「努力論」。惜福(福を浪費しない)。分福(福を他人に分ち合う)。植福(人世の慶福を増進長育する)。
- ・ 本多静六「私の財産告白」。2 割食い。十割益半分手放し。四分の一貯蓄。一日一ページ、三ページ。

渡部昇一は向上心が高く、そして何より素直な人だと思う。人がいいといいものは何でも試してみている。健康についても関心が強く、あらゆるものに手を出している。また先人のいうことには素直に従ってみている。本で学ぶ、人から学ぶ、そういう謙虚な姿勢は好感が持てる。

この本のオビには「最終結論」とあるけれども、それはまだ早い。この人が、米寿、卒寿、白寿と年齢を重ねて、その都度何を言うか、楽しみだ。

### 鷺田小彌太偏「谷沢永一 二巻選集下 精選人間通」(言視舎)

大判 400 ページの大著。

読書通であるから歴史通になり、歴史通の本質である人間通になり、その目で現代を見つめるから時評通になった谷沢永一の魅力を堪能できる快著だ。

谷沢永一は人間としての本物を見分け、そうでない偽物には徹底して650字で弾効を加えた。谷沢からターゲットにされたら、もはや逃げ道はないと恐れられた。

批判の俎上にのぼったのは、森鷗外、山本健吉。丸山真男。羽仁五郎。佐藤信夫、。。

人物論。

「才能ある人物のやむを得ない人間的欠点を、鋭く、しかし暖かく、距離をおいて見るのが、本当の人間通ではないか。」

「人生の最大の楽しみは、いり豆をかんで古今の英雄をののることだ、と言ったのは荻生徂徠だ。」

- ・ 「明治文学全集」92「明治人物論集」(筑摩書房)
- ・ 人物論の最高の成果は「日本近代書誌学細見」。

谷沢が優れた学識、生き方で尊敬している人。

- ・ 石橋湛山「石橋湛山全集全 15 巻」(東洋経済新報社)。「湛山を読まずして、日本現代史に口出しするなかれ」
- ・ 森銑三「明治人物逸話辞典」「大正人物逸話辞典」(東京堂出版)。「明治東京逸聞史」(平凡社)。
- ・ 内藤湖南。
- ・ 山本七平。
- ・ 開高健。

人間通で人物評論の嚆矢としてあげているのは、以下。

- ・ 三宅雪嶺。「人間観察の透徹において、まさに古今独歩、まったく無類の存在

であった。」

- ・ 司馬遼太郎。「司馬人間通史観」「人の生き方を支えた素志に同情し、観察の光源を暖色に調節しながら、躍動する人物の见えない部分を透視するべく務めたのである。」
- ・ 近藤唯之。「プロ野球監督列伝」人物論で、読むべき本がわかった。

### 橘川幸夫「ロッキングオンの時代」(晶文社)

著者が取り組んだ20代のロック雑誌創刊の物語である。

そして一人の1950年生まれの青春記でもある。

著者は中学では写真部、高校では山岳部、大学では放送研究会に入り、投稿少年でありマンガ評論家を志望してたのだが、あけぼのを迎えていたロックを応援する新雑誌「ロッキング・オン」(1972年8月創刊)の立ち上げに奔走する。そして後に全面投稿原稿で出来ている「ポンプ」という雑誌も創刊しながら、時代に向きあって成長していく。

高度成長の余韻が残る東京は熱い。後に名を成す雑多な人々がかつ消え、かつ結んで様々のプロジェクトを始めていた時代を感じる。そのような時代に東京でその流れに参加していることの凄みを感じさせる。

ロックとは何か。以下は、著者の考えだ。

「ロックとは巨大なボリュームで聞くものだ」

「ロックは鑑賞したりなごませたりするものではなく、自分を圧倒させるものだ」

「ロックとは、時代と個人のからみあいであり葛藤である」

「ロックというのは、何を言ってんだか解んないけど何を言いたいのかはすごくよく分かるというあのアジテーションのようなコミュニケーションなのだ。逆に言えば、何を言ってるかがもんだいではない。何を言いたいのが問題なのだ。」

「ロックとは、アプリアリに与えられた日常に対しての脱出行動である。」

「本当のロックとは、そうした体制化の流れに対しても、そこから更にはみ出していくことではないのか」

「現実をわしづかみにし、未来をストレートに凝視めるのがロックの本質」

この本の出版記念パーティで、久米信行さんが「生き方がロックだ」といい挨拶をして感心したことを思い出した。

著者は25歳までの自身を責める文学的方法、そして大いなる転機を迎えた25歳からは読者も自分もすべて肯定する宗教的方法へと著者はこのプロジェクトに巻き込まれながら、脱皮していく。

31歳になって、体制への反逆から、現実には生きている社会と、さらに大きなステージ



である時代の上に生きていることを確認し、大きな脱皮を行っている。

ロッキング・オンもポンプもやめて、政治と経済の時代を迎える予感の中で社会の仕組みと直接かかわる方向に動き始める。

これ以降も、参加型メディアと参加型社会を追いかけていく。

ホットな場所にはホットな若者がいる。まだ無名でエネルギーが豊富な若者達だ。彼らを応援しながら、その仲間たちというネットワークというぜいたくな武器を身につけながら。時代の息吹を全身に浴びつつ歩いて行くのが、橘川幸夫である。

現在の橘川を眺めていると、20代の経験で得た方法論を土台に、少しずつ自己を積み上げてきたと感じる。その持続力がビジネスの現場で着想と構想を武器に人々を結びつけてやまない不思議な魅力を持つ今日の著者を形づくっている。

同年生まれの私は、自分の20代の出来事を懐かしく思い出しながら読み進んだ。

九州、大企業、東京、北海道、海外と外的世界を拡大し続けてきた私も、30歳を迎えて新たなステージに自分を立たせたが、期せずして同じ姿を発見し深い共感を覚える。

ゲリラ的生き方で、一人で世の中と対峙し続けてきた著者、組織人として社会と深く関わっていく私も、よくみれば取り組んだ対象から育てられてきたといえる。

この人の青春の記録も私の場合と同様に「脱皮」のプロセスである。

### ユヴァル・ノア・ハラリ 柴田裕之訳「サピエンス全史・上」(河出書房新社)

第一部は認知革命。第二部は農業革命。第三部は人類の統一。下巻の第四部は科学革命。以下、要旨。

135億年前のビッグバンで宇宙が誕生。宇宙の物語を「物理学」という。

45億年前に地球誕生。38億年前に生物が誕生。生物の物語を「生物学」という。

7万年前にホモ・サピエンス(賢いヒト)が文化を形成し始めた。その後の発展を「歴史」と呼ぶ。

歴史には3つの革命があった。7万年前の「認知革命」(巨大な脳、直立二足歩行、精巧な道具、火の使用、言語)、1.2万年前の「農業革命」、500年前の「科学革命」である。

認知革命は、現実ではなく、脳によって想像上の伝説、神話、神々、宗教を生んだ。この時代は狩猟採集民であり、ラスコーの壁画に彼らの生活があらわされている。サピエンスは4.5万年前にはオーストラリア大陸、3.5万年前に日本に到着した。

サピエンスは動物の家畜化、植物の栽培を知り、人口爆発と飽食のエリートを誕生させる農業革命が1.2万年前に起こった。サピエンスは単独の食物に依存するようになった。記号を使って情報を保存する方法を発明した。それが帝国をつくり戦争を勃発させた。紀元前1000年紀には貨幣が誕生し相互信頼の交換経済が発達した。歴

史は小さく単純な文化が大きく複雑な文明にまとまっていくプロセスだ。

この本の上巻を読んだだけだが、途方もない書である。

40歳のイスラエル人著者の知識量と洞察力と、まとめあげる力量には驚くほかはない。

下巻も読み始めた。

### 服部龍二「田中角栄一昭和の光と闇」(講談社現代新書)

大佛次郎論壇賞とアジア・太平洋賞特別賞を受賞した傑作・「日中国交正常化―田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦」(中公新書)を以前読み、著者の力量に感心した。この著者の田中角栄論に興味を持って読んだ。

1972年に54歳で首相となった田中角栄は、日本人が最も愛する政治家であり、同時に最も批判された政治家でもあった。

田中は昭和時代を最も体現した人物であったから、昭和の日本人が愛し嫌悪したのである。田中の政治家人生を追うことは、同時代を生きた人々の人生の軌跡をなぞることでもある。

この本では日中国交回復以外には従来深掘りがされていなかった欧州と東南アジア歴訪という外交にも紙幅を割いている。

昭和という時代と田中の足どりは幾重にも重なっている。インフレ。グランドデザイン。メディアの持ち上げと批判。人心操縦術。現代保守政治の源流。

以下、田中の言葉や述懐から。「責任」がキーワードだ。

「偉くなるには大将のふところに入ることだ」。

「頂上をめざすには、敵をできるだけ減らすことだ。自分に好意を持ってくれる広大な中間地帯をつくることだ」

「郵政・電信電話・電波等の事業を、皆さんの協力を得て、ますます盛り立てていきたい。、最終責任はむろん私が取るから、皆さんはそれぞれ自分の仕事を責任をもって進めてほしい」(郵政大臣訓示)

「私の出身地のなんとかの息子で人格円満高潔、健康優良につきご採用願いたく、尚本人についての責任は小生がすべて負います」(就職の斡旋依頼時。だから選挙に強い)

「人の悪口はいうな」

「政治の醍醐味は総理になることではない。政権政党の幹事長になることだ」(小沢一郎への語り)

「政治はベストよりもベター。つねにタイムリミットがある」

「これまでだって禅譲の約束は何回もあったが、守られたことがあったかい。しょせんは政治家の空手形なんだからなあ」(大平が福田からの禅譲を期待しているときに)

「俺は、福田と九回戦ったが、全部勝った。だけど俺のほうから仕掛けた戦いは一回もないよ」

## ユヴァル・ノア・ハラリ 柴田裕之訳「サピエンス全史・下巻」(河出書房新社)

上巻に続き、人類を巡る壮大な物語を読み終わった。

- ・ 135 億年前に物質とエネルギーが現れる。45 億年前に地球が形成される。38 億年前に有機体(生物)が出現する。250 万年前にアフリカでホモ(ヒト)属が進化する。
- ・ 20 万年前にホモ・サピエンスが進化。7 万年前に認知革命が起こる(言語。歴史)。1.2 万年前に農業革命が起こる(植物の栽培と動物の家畜化。定住)。500 年前に科学革命が起こる(無知。地球全体。資本主義。宗教)。200 年前に産業革命が起こる(国家と市場)。
- ・ 今日、人類が地球という惑星の境界を超越し、核兵器が人類の生存を脅かし、生物が知的設計によって形づくられることがしだいに多くなる。
- ・ 未来は、知的設計が生命の基本原則となるか？ホモ・サピエンスは超人たちにとって代わられるか？

宗教は帝国や貨幣の出現と同じように人類の統一に不可欠の貢献。多神教は宗教的寛容を促す。あるがままを経験する仏教。

科学革命は無知から生まれた。永遠の命。軍事・産業・科学複合体。近代科学(エネルギーの転換)と資本主義(成長。信用。進歩)。統合された人間社会の歴史。政府は資本主義の手先に。消費主義という価値体系。投資と購買。家族とコミュニティの崩壊。個人の誕生。

人類は幸せになったのか？第二次大戦以降に平和になったのは核兵器の脅威が原因。幸福は客観的条件と主観的期待の相関関係で決まる。心の空調システム。自由という宗教。仏教は幸福を重視。人々の幸福は増したか？。人類は自然選択の法則を打ち破りつつある。後釜は知的設計の法則。

1. 生物工学:生物学レベルへの人間の介入。去勢。性転換。超人の設計。社会構造の改変。天才。
2. サイボーグ工学:有機体と非有機体の器官の組み合わせ。バイニックイヤー。網膜プロテアーゼ。バイニックアーム。脳とコンピュータのインターフェイス。インター・ブレイン・ネット。
3. 完全非有機体の創造:コンピュータプログラム、コンピュータウイルス。デジタル方式の心。ヒューマン・ブレインプロジェクト。

シンギュラリティ(特異点):ビッグバンという特異点。新たな特異点か。DNAによる

個別化医療、保険、就職。再考を迫られる法律家、政府、スポーツ団体、教育機関、年金基金と労働市場。私たちは何になりたいのか？何を望みたいのか？

自分が何を望んでいるのかもわからない、不満で無責任な神々ほど危険なものがあるだろうか？

### 司馬遼太郎「ビジネスエリートの新論語」(文春新書)

昭和30年、産経新聞記者時代に本名の福田定一名で刊行された本が20年ぶりに新書として刊行された。「名言随筆サラリーマン ユーモア新論語」が元名である。32歳のときの作品だ。

司馬はサラリーマンの原型をサムライに求めた。それは儒教がもとになっているが、ユーモアを交えた書きぶりで、楽しく読める。しかし、内容から言っても、サラリーマンをビジネスエリートと変えたのには疑問あり。

サラリーマンの元祖は大江広元であるという。頼朝がつくった新政府の公文所別当という事務総長の立場に呼ばれる人物だ。行政能力があり、仕事熱心であった。「益なくして厚き禄をうくるは窃むなり」が大江広元の人生訓であり、保身訓でもあった。

「二十で希望に燃えている者が二十五になると疑いを持つ。三十でそれが迷いになり、三十五であきらめる。四十になると保身に専念し、四十五になると欲が出る」(松岡洋子)。これはある重役のサラリーマン観察だそうだが、よくみていると思う。三十から迷い続ける人と三十であきらめて仕事に精を出そうとする人か、これが運命を分けるのではないだろうか。

若き司馬は「サラリーマン人生の成功不成功は、退勤後の人生をどう構成するかにかかってくる」と言っている。個性を育むのは、アフターファイブというわけだ。

「先輩からは知恵を、後輩からは感覚を汲むがよい」(西洋の諺)。老化を防ぐには常に今の世界に生きることが必要である。特にIT時代にはその教えが生きる。感覚もそうだが、知識も教えてもらうのがいい。サッカーが言うように「人生の真の喜びは、目下の者と共に住むことである」。

「老年の悲劇は、彼が老いたからでなく、彼がまだ若いところにある」(ワイルド)も本質を言い当てている。若い、そして若いと思っている、そこに問題が出てくる。社会死が来てからあわててもどうにもならない。停年後の30年を含めたプランを立てよと司馬は言う。在職中に稼業以外の技能をえいえいと養うべきであり、人生に緊張感を持つとのため。司馬は自分に引きつけてこういう言葉を発していたのだろう。

福田定一は、この本を書いた5年後の37歳で「梟の城」で直木賞を取り、司馬遼太郎として世に出て行く。さきほど述べたある重役の観察には「会社を辞める年齢は大体三十から三十五の間だ」という真理も入っていた。司馬遼太郎の場合も、保身と欲の年代にさしかかるまでに転身したということになる。

この本を読みながら自分を振り返ってみると、「二十五で迷い、三十であきらめ、四十で欲、四十五で再出発」、ということになる。私が転身を意識したのは 44 歳であり、実際に実行したのは 47 歳だった。保身と欲の出てくる時期ではあったが、出世欲よりも社会欲を選んだということにしておこう。

### 東谷暁「予言者 梅棹忠夫」(文春新書)

1950 年代後半から 1970 年代前半の予言の一部を以下に記す。36 歳から 50 代前半の予言はことごとく当てている。

- ・ 生態史観による日本文明の位置づけ。技術がもたらす「よりよいくらし」、豊かさが歴史の推進力になる。文明曲線。旭日昇天教の教祖。日本の高度成長を予言。
- ・ 情報社会論。情報産業論。外胚葉産業の時代。皮膚、感覚器、脳、脊髄などの中枢神経系。農業時代は消化器官中心の内胚葉、工業時代は筋肉や骨格の中胚葉、そして最終段階賭しての情報時代は外胚葉。情報社会の到来を予言。
- ・ 「妻無用論」で主婦の変化減少を予言。
- ・ 知的生産の技術。情遊(情報で遊ぶ)。中間層の知的情遊を予言。
- ・ イスラム圏の動乱。アラブの名でイスラム地域を糾合する運動が続く。中洋。国立中東研究所構想。オイルショックを予言。
- ・ ソ連崩壊を予言。
- ・ 地球時代という名称でグローバル時代を予言。

梅棹は生態学的な見方で対象を「まるごと」捉えると言う方法で、「思いつき学派」と呼ばれるほど興味のあるものに転身していくが、その特色は「関係が形成する全体性と、関係の変化という二重の視点」と田辺繁治が述べているのは当を得ていると思う。

その梅棹は、晩年には日本人については、悲観論に傾いているようだ。日本人はキバを抜かれた猪つまり豚になるだろうと予言しているのだ。精神のキバとは「志」のことであり、日本人の「志の喪失」を同じ憂いを持つ司馬遼太郎と語り合いたかったと述べている。

この本では、最後の予言として、精神のキバが生えてきて日本人が再び「志のある国民」になれるだろうか、と悲観的な言葉を紹介している。この予言を裏切るために、現在と未来の日本人は「志」を取り戻すことが求められている。それがこの本のメッセージだ。

若い頃から梅棹忠夫とある距離感を持ちながら観察をしてきた著者の見方は、長い時間をかけたものだけに、説得力がある。梅棹を巡る本の中でも「予言者」としてのとらえ方に新味があり、かなりのできだと思ふ。最後の予言についての考察は、時代のど真

ん中に投げた直球で共感する。「現代の志塾」を教育理念に掲げる多摩大も、「志」に焦点をあてた教育に邁進したいと改めて思う。